

グラップレー・ベル～オラリオで地上最強を目指すのは間違っている
だろうかツツ！？～

じゃすていすり～ぐ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

迷宮都市オラリオー

『ダンジョン』が唯一存在するこの街に、彼ら、冒険者は居た。

―ある者は『地上最強の英雄になる』と言う夢と復讐の為に。

―ある者は己が信念の為に。

―ある者は熱き戦いを求めて。

―そしてある者は野望を胸に抱いて。

己が牙を信じ、気高き信念のまま、決して退かず、天へ吠えて、闘いと冒険に赴く。

正義等問題ではない。勝者だけが生き、敗者は散っていく。

これは、一人の^{グラップラー}少年が歩み、女神が記す^{フエイタルフェーリ}餓狼の物語であるツツツツ!!!

注意事項

・この小説は、『バキシリーズ』と『ダンジョン』に出会いを求めるのは間違っているだろうか』のクロスオーバー二次創作です。

・リハビリ作なので文章が変かもしれないかもしれません。

・世界観は『バキシリーズ』と『ダンまち』の世界をごちゃ混ぜにした感じです。

・原作キャラの設定が変わってたりしてます。

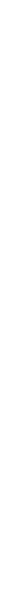
・他作品のキャラも出てきます（主に格闘系で）

それでも『一向に構わんツツツ』と言う方がいればよろしくオナシヤス。

目次

第一章 『その男、ベル・クラネル!!』

序章く出会いく	1
Round 1く入団く	7
Round 2く地下闘技場く	13
Round 3くチャンピオンく	21
Round 4く初めての冒険く	32
Round 5く拳姫く	40
Round 6くレベルアップく	51
Round 7く豊穣の女主人 前編く	60
Round 8く豊穣の女主人 後編く	68
Round 9く狼2人く	76
Round 10く嵐を呼ぶ男く	85
Round 11く邂逅、狼と嵐く	92
Round 12く神々の宴く	98
Round 13く直談判く	103
Round 14く集う狼達く	111
Round 15く切り裂き理人・前編く	116
Round 16く切り裂き理人・後編く	123
Round 17くハリケーンアツパーのジヨーク	130
Round 18く「またやろうぜ!」く	135
Round 19く女神のお誘い	143
Round 20 『いぎ、怪物祭!』	149
Round 21 「暗躍する女神と雷神」	157
Round 22 「アテナ・ファミリアの若き龍」	161



第一章 『その男、ベル・クラネル!!』

序章く出会いく

序章く出会いく

ヘステイアがその少年を見たのは偶然であった。

バイトの帰り、疲れた体を休めようと教会へ帰路へと急いでいた時である。

ふと、一人の少年と擦れ違った。

白い髪に赤い目をした兎のような少年である。

少年はゆったりとしたジーンズのズボンに綿のシャツを着ていた。洗いざらしの生成りのシャツである。

その上に、革のジャンパーを無造作に引っ掛けている。

元は鮮やかな赤いジャンパーだったようだが、長い間着続けているのであろう、色が褪せてしまい、全体が赤茶色に変色してしまっていた。

ヘステイアは何故だか知らないが無性にその少年が気になっていた。

何故なのか分からない。

だが、どういう訳か少年の後をつけてみたくなったのだ。

こつそりと少年の後をつけたのであった。

―それから暫くして・・・。

ヘステイアが、少年をつけてやってきたのは繁華街であった。

迷宮都市オラリオのメインストリート。

夜であっても魔石灯の光によって周囲に様々な原色の光を映し出している。

ヘステイアと少年が歩いているのは人通りの多い道であった。

ふと、少年が路地裏へと入る。

―何で路地裏に？

首をかしげるヘステイアだが、次の瞬間、

「このガキッ！」

怒号が聞こえた。何事かと思い、路地裏を覗く。すると、先ほどの少年が男3人からまれていた。

3人ともモヒカンヘアーの世紀末感バリバリの格好である。

「どうするよ、この装備。おろしたてなのに台無しだぜ」

口ぶりからして冒険者であろう男の一人が、泥の付着した装備を指差しながら少年に凄む。

「どうやら、ぶつかるか何かして男の装備が汚れたようである。

「だから、こうして謝ってるじゃないですか」

「謝って済めば、警察はいらねえぜ。ボウズ、5万ヴァリスだ。そんだけ置いて帰んな」

声音を変えながら男は少年にそう言った。

「明らかなカツアゲ行為である。」

対する少年はと言うと、怯えるどころか笑みを浮かべながら言い放った。

「すいませんねえ、僕アあんた等チンピラに払う金なんか1ヴァリスも持っていないんですよ」

「ンだとテメエ!!!」

少年の言葉に男の一人が激昂して掴みかかった。

殴りかかる気だ。

ヘスティアは思わず止める！と叫び止めようと飛び出そうとした。

そのときである。

「~~~~~ツツツ!!!?」

一瞬で決着がついた。

少年に掴みかかった男が苦しそうにのたうち回っている。

彼を掴んだ右腕を左手で押さえながら口をパクパクとさせている。

泡が口の両脇からだらしなく溢れていた。

男は叫ぶべき言葉を口から吐き出す事が出来ずにそれを飲み込んでいたのである。

「ボヒュッー」

一瞬、男の口から呼気が漏れた。そして次の瞬間。

「ii!!!」

甲高い声であった。通常の「い」の発音よりも数オクターブ高い声であった。

「腕の骨が折れた位で大騒ぎしちゃってまあ」

そんな男を見下ろしながら少年は呟く。

少年の言ったとおり、男の右腕は折れていたのだ。

あの時、男が少年に掴みかかった瞬間――

男がしたことは少年の胸倉を掴む、それだけだった。

少年の襟を掴み自分に引き寄せようとしたその瞬間、男の体がストンと地面に落ちたのだ。

少年は襟を掴まれた瞬間、重心を前に倒したのであった。その動きだけで、男の右腕は逆間接に取られ、ひざまづいたのである。

右腕だけが少年の襟を掴んだまま、真つ直ぐ棒のように天を向いていた。

そして、少年は襟を掴まれた状態のまま、一気に体重を前方に落としたのであった。

その刹那――

めち めち めち

肘の靭帯が逆の方向へ伸ばされ、断ち切られる音が響いたのであった。

(す・・・凄い・・・)

それを一部始終見ていたヘスティアは胸中で感嘆の声を上げる。

「このガキィ・・・ツッ！」

仲間をやられ激昂したもう一人の男が懐からあるものを取り出した。

ボウガンである。

だが、少年はボウガンを突きつけられてもまだ、笑みを浮かべたままであった。

「悪いね、ボウガン突きつけられた位でおたつくタマじゃないんだ」

少年の一言にボウガンを持った男の目の奥に凶暴なものが宿った。それを少年に向かって構える。

同時に、少年が動いた。

拳が届く距離ではないのに右手を大きく振りかぶる。

色褪せたオープンフィンガーグローブをはめた右手であった。

——一体何をやる気なんだ？

ヘステイアは止めに入るのも忘れ、少年の行動に釘付けになっていた。

右手が光り輝いていたのだ。

それはまるで宝石のように。

「パワーウェイブ」

少年がそう言うと同時に、輝く拳を地面に叩きつける。

その時不思議な事が起こった。

光がまるで波のように、ボウガンを持つ男の下へと向かう。

それはボウガンの引き金を引くよりも早かった。

——ズアツ!?

「ツツ!!」

光が男を飲み込み爆発する。

爆炎から男がボロ雑巾のように吹っ飛ばされ仰向けに転がった。

「トウラアツツ!!」

追撃する様に少年が飛び上がり、男の胸板に蹴りを叩き込んだ。

ごしやっ。ともずごととれる音が裏路地に響いた。

少年が全体重をかけて男の胸板を踏み抜いた音であった。

男はそのまま動かなくなる。

「武器を持つてる奴には手加減は苦手なんだ」

動かなくなつた男を見下ろしながらそう言うと、残りの男に向かって声をかける。

「んで？アンタはどうするんだい？さっきの奴みたいにボウガンでも持つてくるかい？それとも、刃物でも使うかい？」

「こ、こ、こ」

残りの男は青ざめた表情で何かを言いかけたが、何を言いたいのかは分からない。

「僕としてはどっちでもいいんだけど、もし武器を持って闘るんだつたら目ん玉抉られる覚悟はしておかないとね」

怖い事を言いながら、少年は満面の笑みをへばりつかせて男に歩み寄る。しかし、その表情も一瞬にして鬼の表情に変化しそうであった。

「両方の眼球だよ」

少年がそう囁いた時には、既に二人の距離は拳を伸ばせば届く間合いに居た。

「ひ……ひイイイイイイイイツツ!!」

叫び声を上げながら男は数歩後ずさり、背後へ全力で逃げ出した。脱兎―。

まさしく追い詰められた獲物となったその男は、一目散に逃げ出したのであった。

男の背中を追わずに、少年はただ見ているだけであった。

「さて、と……そこで何をやってるんですか?」

「き、気づいていたのかい?」

物影に隠れていたヘステイアに声をかける。

対するヘステイアはひよつこりと顔を出しながら少年に言った。

「ええ、貴方とすれ違った辺りからですかね」

「さ、最初からか……」

少年の言葉に、自分の尾行スキルの無さに肩を落とす。

「すれ違ったとき、何でか知らないけどつけてみたくなったんだ。……流石に、キミがあのおの3人からまれた時は神威使って止めようと思っただけど、いらぬお世話だったみたいだね」

「い、いやあく助けるタイミング潰しちゃってスイマセン」

互いに苦笑いをするヘステイアと少年。

ふと、これはチャンスだと思いヘステイアは口を開いた。

「すごいや名乗ってなかったね。ボクはヘステイア、神をやってるよ。君は?」

「ベル、ベル・クラネル。格闘士グラップラーです」

こうして、一人の『神』と一人の『格闘士グラップラー』が出会うとき、物語は動き出すのであった。

— 漢と生まれたからには誰でも一生の内一度は夢見る『英雄』……
そして『地上最強の漢』。

— この物語は『地上最強の英雄』を目指す格闘士グラップラーの少年と彼を支える女神の物語である。

グラップラー・ベルくオラリオで地上最強を目指すのは間違っているだろうかツツ!?く

開 幕 ツ ツ ! ! !

Round 1 入団

神。

千年前、天界より降り立つた不変不滅の超越存在^{デウスデア}である。下界の人間たちに神の恩恵^{ファルナ}と言う力を与えることが出来るのである。

だが、不変不滅と言っても、病気もするし怪我もするのである。そして、死ぬような事が起きたり、定められた掟を破った場合は天界へ強制送還され二度と下界には戻ることは出来ないのだ。

掟とは一体何か？と問われれば話が長くなるので割愛させていた
だく。

神は神の恩恵を与えた人間を『眷属』として加え、『ファミリア』という組織を作るのである。

かく言う、ヘステイアもまた神なのであるが降臨したのは最近。つまり新参者である。

一度は友人の下に身を寄せていたものの来る日も来る日も怠惰に過ごしていた為、友人の堪忍袋の緒を切らしてしまい追い出されてしまったのだ。

先ほど言ったように神とは言えど病気や怪我もする。．．．つまりは腹も減る訳で、食いつなぐ為にバイトをする日々を過ごしていたのであった。

ファミリアを募ろうとするも、収穫は0。

そんな時、現れたのがベルであった。圧倒的な強さでチンピラ2人を撃退したベルを見てヘステイアは思った。

―彼を自分の眷属にしたい。と

(―あ、でも．．．)

ふと、ここでヘステイアにある一つの不安がよぎった。

先ほどベルにのされたチンピラもまた冒険者であった。ただの一般人では神の恩恵を持ってしている冒険者を倒すのはよほどその冒険者自身のレベルが低くない限りは不可能である。

だが、それをベルは倒してのけたのだ。しかも二人でもある。

つまり、ベルは誰かの眷属となっている可能性が高いのだ。

へステイアはベルに恐る恐る聞いてみた。

「ねえ、ベル君」

「何ですか？」

「ベル君は何処かのファミリアに入っているの？」

「いいえ。入ってないです」

返ってきたのは予想外の言葉であった。

「僕って見た目、頼りないですからね。大抵門前払い喰らってますよ」
「言われてみれば確かに、ベルの体格はお世辞と言っていいほど強そうには見えない。華奢な体格であった。」

タハハ。と苦笑いしながらベルは答える。

それを聞きへステイアに電流が走った。

(「いい、イケるツツ!!ベル君をスカウト出来るぞツツ!!」)

そうと決まれば善は急げ。へステイアはベルにスカウトを切り出した。

「それじゃあさ、ボクの眷属になってみないかい？ベル君」

「えッ?!いいんですか!?!」

ベルは目を輝かせ喰い気味にへステイアを見た。ちなみに、ベルにはへステイアが『神』であると言う事はカミングアウト済みである。

「ああ。でも、眷属が一人もない状態なんだけどね。それでもいいかい?」

「はいッツ!僕は一向に構いませんッツ!!」

即答であった。

「よし、それじゃあ行こうぜベル君。これからファミリア入団の儀式をやるぞ!」

「はいッ!」

ベルはへステイアに連れられ歩き出した。

「じゃあ始めるよ、上着を脱いでここに座ってくれ」

へステイアの知人である老人が経営している古書店の二階にベルとへステイアは居た。これからベルに神の恩恵を与える為である。

分かりました。と答え、ベルは上着を脱いだ。

「~~~~~ツツツツ!!?」

(「な、何だコレエツツ!!」)

露となったベルの上半身を見てヘスティアは驚愕する。
引き締まった肉体であった。長い時をかけ鍛え上げられた鋼のよ
うな肉体である。

それだけならまだいい、その肉体には傷跡が刻まれていた。
それも一つや二つではない、無数に刻まれていたのである。
たまらぬ肉体であった。

(い、一体・・・どんな事をすればこうなるんだ・・・?)
そんなベルの体を見てヘスティアはただ、ただ驚愕するばかりで
あった。

「?どうしました、神様?」

「あ?いや、ちよつとビックリしただけさ。それじゃ始めるよ」

ふと、ベルの声で我に返りヘスティアは神の恩恵を与えるべく彼の
背後に回る。

(「うわア・・・、触つてみるともつとスゴいや・・・」)

彼の背に触れ、恩恵を刻みながらヘスティアは感想を述べた。

鋼のような肉体だ。硬さもまた鋼並みである。

「なア、ベル君」

「なんです?」

「この肉体の事なんだけど、どうやったらここまでなるんだい?」

恩恵を刻みながらヘスティアはベルにそう問いかける。

「子供の頃からずっと鍛えてたんですよ、強くなる為にね」

「強くなる・・・か、強くなつて何になりたいんだい?」

「そりゃあ『地上最強の英雄』おとこ・・・ですかね」

問いかけるヘスティアに、ベルははつきりとそう答えた。

「地上最強ねエ、男の子っぽくてイイじゃないか。ボクはそう言うの
好きだぜ」

「そ、そうですか?」

ヘスティアの言葉にベルははにかんだ様子で言う。

(「へエ、結構可愛い所もあるんだなア」)

胸中でそう呟きながらヘステイアは顔をほころばせる。ふと、そこで恩恵が刻み終わったので見てみる事にした。

(「……オイオイオイ、これどういう事だよ」)

背中に刻まれた恩恵から浮かび上がるステータスを見てヘステイアは絶句した。

普通、駆け出しの冒険者が恩恵を刻まれた直後のLVは『LV1』である。

勿論、ベルのLVもまた『1』であつた。……あつたのだが、そのステータスが異常すぎたのである。

ベル・クラネル

LV1

力：S999

耐久：S999

器用：S999

敏捷：S999

魔力：S999

格闘士：S

《魔法》

二

《スキル》

トータル・ファイティング

【武芸百般】

・常時発動

・あらゆる格闘技、武術を学ぶ事で、それを使うことが出来る。

・但し『気』等を使う武術等は使用者の魔力に依存する。

【脳内麻薬】

エンドルフィン

・使用者が危機的状況に陥った時に発動出来る。

・脳内からエンドルフィンを分泌させる事によりステータスが上昇する。

【八極聖拳気功術】

・八極聖拳の気功

・気をコントロールする事で攻撃、防御、治癒に使う事が出来る。

・威力は使用者の魔力に依存。
たまらぬステータスであった。
そんなたまらぬステータスにただ、ヘスティアは驚くしかなかった。

「アビリティ全てカンスト……。それに見たことの無い3つのスキル……ツツ、ボク、トンでもないヤツを眷属にしちやったぞ……」
「どうしました?」

「ん? ああ、何でも無い。これがキミのステータスだよ」

そう言つてヘスティアはベルのステータスを写した用紙をベルに見せた。

勿論、文字は神にしか読めない『ヒエログリフ神聖文字』ではなく誰でも読める『コイネー共通語』に代えている。

「ヘエー、こんな風になつてるんですねエ」

「本当なら恩恵を刻んだ直後はアビリティは殆ど0、スキルとかもまっさらな状態で表示されるんだけどね」

「うくん、だとするなら僕はこのステータスはアレが原因かなア」

ベルの言葉に、ヘスティアは首をかしげた。

「『アレ』ってなんだい? ベル君」

「アー、実はですねエ」

「ピルルルル、ピルルルルルルル」

質問に答えようとした次の瞬間、音が鳴り始めた。ベルはズボンのポケットから携帯電話を取り出すと通話ボタンを押し、応答する。

「もしもし、ベルです。……トクガワさん、どうしたんですか? アツ、そういうや今日でしたっけ?」

どうやら話の内容からしてベルと電話で話しているのはトクガワと言う名の男性であるらしい。

「ア、そうでしたね。スイマセン、ちよつと色々あつて忘れてましたよ。分かりました、今からソツチに向かいます。ハイ……あ、それとトクガワさんに会わせたい人がいるのでその人も連れてきてもいいですか? ハイ、分かりました。それじゃあ」

ピツと電源ボタンを押し通話を終了すると、ベルはヘスティアに向

かつて口を開いた。

「神様、イキナリですみませんが一緒に来てもらってもいいですか？」

「え？別に構わないけど・・・、何処に行くんだい？」

イキナリの事に戸惑いを隠せないヘスティアに、ベルは上着を着ながら言った。

「強いて言うなら・・・『御伽の国』、ですかね」

そう言うと古書店から出て行く。

「あ、待ってよベル君」

ベルの後を追うようにヘスティアもまた、古書店から出て行ったのであった。

続 く ツ ツ ！ ！ ！ ！

Round2く地下闘技場く

オラリオドーム

地上6階、地下二階建てのメインストリートにある巨大ドームである。

日が沈み暗くなった時間帯、ベルとヘステイアはここに来ていた。

「ここでペナントでも買うのかい？」

「まあ、直に分かりますよ」

オラリオドームを見上げながら言うヘステイアに微笑を浮かべたままベルは答える。そこへ、

「おお、ベルー！」

声が出た。振り向くとそこには2人のスーツ姿の男を引き連れた老人が居た。『極東』の民族衣装である和服に身を包んだ背の低いスキンヘッドの老人である。

「あ、トクガワさんこんばんわ」

「待ちかねたぞ、ベルーッ！」

トクガワさんと呼ばれた老人は嬉しそうに言うと、ベルに向かって飛びついてきた。

それをベルは難なく受け止める。

「ああっ！御老公ッ！」

「だまらっしゃいッッ！お前達はさっさと案内すればよいのです！」

トクガワを見て、スーツの男達が止めようとするも一喝された。

「べ、べ、ベル君……。そのご老人ってまさか……」

その光景を見ていたヘステイアは恐る恐るベルに聞いてみた。

「はい、トクガワ・光成さん。僕がお世話になってる人です」

(まさかの大物だよウツッ!!!ベル君、何て人と知り合いなんだッッ!!!?)

ートクガワ・光成

かつて『極東』を支配していたとされる『トクガワ家』の末裔である。

極東が『維新』と呼ばれるクーデターによりトクガワ家の支配から

解放された今でもその財力は世界トップクラスであり、極東一の大物と呼ばれている。

その威光たるやオラリオに存在している数多の神々も畏まり恐縮するほどである。

「所でさっきから気になってたが、その子は誰なんじゃ？もしかしてベルの彼女かの？」

「~~~~~ツツ!!?! (か、彼女ツツ!!?!)」

「いえ、今日から僕が所属する事になるファミリアの主神、ヘステイア様です」

光成の質問に、ベルは平然とした様子で答えた。その傍ら、ヘステイアが彼女発言に顔を真っ赤にして悶えていた。

「ほおう、って事は恩恵も貰つとるのじゃな」

「はい。冒険者登録はまだなので明日登録してきます」

「そうか。・・・ようやく夢への第一歩が踏み出せたのおう」

「ええ・・・、そうですね。思えば長かったですよ」

ベルはそう光成に言うと、懐かしむように空を見上げた。その顔は何処かたまらぬ哀愁が張り付いていた。

「御老公、そろそろ」

「おお、そうじゃったそうじゃった。では、皆行こうかの」

そういう事になった。

オラリオドーム内部、光成と取り巻きの男達の案内の下、エレベーターの前に立った。

「これを使って地下6階まで真っ直ぐじゃ」

「ち、地下6階?!」

(―地下って確か2階までのはずだったよな・・・?)

衝撃の発言に困惑を隠せないヘステイアであった。

そしてベル達はエレベーターに乗って地下6階まで降りる。

「う、うわっ・・・広ッ!」

エレベーターから降りたヘステイアの目に映ったのは広い光景であつた。

赤い絨毯が敷いてある道をベル達は歩く。

「トクガワ時代より300年。代々より続いてきた戦いの聖地……その最新の――」

その先頭を歩きながら光成は突き当たりの扉のドアノブに手をかける。

「――姿じゃ」

そして扉を開けた。その先には……

「と、闘技場?!」

闘技場である。

中央には四方に『白虎』、『青龍』、『玄武』、『朱雀』と書かれたリングがあり、その周りを客席が取り囲んでいた。

その客席にはかなりの人数の人が座っていた。

「お、オラリオドームの地下にこんなのがあったなんて……」

ヘステイアはただただ驚くしかなかった。

ふと、そこへ声が聞こえた。

「あーミツちゃんにチャンピオンやないか、おっそいで〜」

「ん?……こ、この声は……ツツ!」

聞きなれた声にヘステイアは声のしたほうを振り向く。

朱色の髪をポニーテールにした狐目の女であった。体つきは女らしいものの、何処か足りないものがある。

胸である。絶壁と言つていいほどそのバストは平坦であった。

「ロキツツ!!どうしてキミがここに居るんだツツ!!」

「ってドチビもおんのかいツツ!!その言葉そっくりそのままとめて返すでツツ!!!」

ヘステイアは女、ロキを見るなり怒声をぶつける。

ロキもまたヘステイアを見るなり怒声をぶつけた。

ロキ

オラリオに存在する大手のファミリア『ロキ・ファミリア』の主神である。

性格は明るくひょうきんで、自身の眷属への愛情は深い。

なお、ヘステイアとは犬猿の仲で、こうして出会う度に喧嘩をするのである。

「そりゃあ、決まってるだろ？ボクはベル君の主神なんだから」
「な、なんやてエーーーーーッツ!!チャンピオン、嘘だつて言つてーな!？」

ヘスティアの発言にロキは細い目をクワつと見開きベルに縋るように言った。

「あく、すいませんロキ様。ヘスティア様の言ってる事本当です。僕、ヘスティア様の眷属になったんです」

「ノオオオオオオオオオオオオツッ！ウチのファミリア入れる予定やったのにー！何でよりによつてドチビのファミリアに入つてまうん!?!この乳か!?!この乳でチャンピオン誘惑したんかー!?!」

「にゃーーーーー!!!」

無慈悲なベルの言葉に、ムンクの叫びのようなりアクションを取るロキ。

そして、そのままヘスティアに食って掛かった。

「なア〜にやつてんでイ、ロキよウ」

ふと、太い声が聞こえた。その声に釣られベル達はその方向を見やる。

そこに居たのは体の大きいスキンヘッドの隻眼の男であった。

年齢は50代ほど、身長は170後半。極一般的なヒューマンの男の背丈である。

だが、太い男である。腕も、足も、肩も、腹も、全てが太い。

肉と、その纏っている雰囲気がそうさせているのだ。

「うわ〜ん、独歩ちゃ〜ん!チャンピオンをドチビに取られたんや〜」

「オオツ、独歩」

「オロチ館長も来てたんですか」

「おう、コイツの付き添いでな」

ベルの言葉にオロチ館長と呼ばれた男は泣きついて来たロキをあやしなから快活に笑いながら答えた。

オロチ・独歩

かつて『武神』『タイガースレイヤー虎殺し』『人喰いオロチ』と呼ばれロキファミリ

アのエースだった男である。

一代で実戦空手『神心会』を設立した雄であり世界中に100万人に近い門下生を誇る世界的な空手道場の館長である。

今はエースの座を二人の子供に譲り、ファミリアを半ば引退している立場にある。

「あ、あの『武神』オロチ・独歩・・・本物が、目の前に・・・」

ヘスティアはと言うと生の独歩を見て放心状態になっていたが、すぐに我に返りベルに問いかけた。

「そういえばベル君。チャンピオンってロキがキミの事を言ってたけど、それってどういう意味なんだい？」

「そりゃあ決まってるじゃろ。ベルはこのチャンピオンなんじゃ。・・・つと、そろそろセミファイナルが始まるぞ」

ベルの代わりに光成が答える。それと同時に、ドン！と太鼓の音が鳴った。そしてアナウンスが流れ始めた。

『青龍の方角ツツ！格闘スタイルプロレスリング！「ガネーシャ・ファミリア」所属ツ！レオパルドンツツ！！』

青龍と書かれたリングサイドから現れたのは顔を黒い十字で描かれたマスクを被った戦車のような男であった。

『白虎の方角ツツ！格闘スタイル大相撲！「ツクヨミ・ファミリア」所属ツ！狼月山ツツ！！』

対する白虎と書かれたリングサイドから現れたのは、太い相撲取りである。

「げ、ゲエーッ！この二人、ファミリア所属の冒険者にしてプロレスのメインイベントーに、大相撲の現役横綱じゃないかツツ！」

その二人を見たヘスティアは余りの驚きに声を上げた。

「けどあの二人はベルの前座やで。ベルの試合はこの後なんや」「ファア!？」

ロキの衝撃の一言に思わず変な声を上げてしまう。

それもそうだ、今さつき眷属にした兔のような少年があんな屈強な男達の頂点に君臨しているのである。

(「ボクは夢でも見てるのか・・・」)

思わずそう思ってしまう。・・・無理もない。

―ドオン!

「お、試合開始じゃ」

光成が言った。ヘステイアは我に振り返りリングの方を見やった。

「グオゴゴゴゴゴゴゴ!!」

先に動いたのはレオパルドンであった。目の前の狼月山を轢き殺さん勢いで向かってくる。

「ドオオオスコオオオオオオイツツ!!!」

対する狼月山はブチかましの体勢でレオパルドンを迎え撃つ。

―ドゴオンツツ!!!

重い音が闘技場内に響いた。

ダンプカーが衝突したような音である。

レオパルドンのリアアットが狼月山の顔面を捉えていた。

このままレオパルドンが追撃するか?と思ったその時である。

「ツツ!!」

レオパルドンが突如、苦しみ始め動きを止めた。

その隙を突いて、狼月山の張り手がレオパルドンを捉えた。

「ドオリヤアーツー!」

「ギヤアーツツ!」

そしてそのまま、レオパルドンを地面に叩き付けた。

その音はごしやツ!ともずごツ!と聞こえた。

それはレオパルドンの頭部を全体重をかけて押し潰す音であった。

―ゴパツ!

そしてそのままレオパルドンはマスク越しに血を吐くと動かなくなった。

―ドオン!ドオン!

「勝負ありイー!」

『ワアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!!』

勝負ありの宣言と共に、会場が一斉に湧いた。

「いやア、強い強い」

「え?え!?今ので終わり!?!」

試合の一部始終を見ていた光成はそう相手を賞賛した。

一方のヘステイアは何が起こったのか分からないようだった。

「立会いの際にレオパルドンがキン○マを打たれたな」

「ええ、それで動きが止まった隙を狙われたんですね」

何が起こったか分からないヘステイアに独歩とベルはそう解説をした。

「き、キン○マ!? そういうの狙うのって反則じゃ・・・」

「残念、反則じゃないんやなく」

ロキの言葉にヘステイアはエツ!? と驚きの声を上げる。

「武器以外は何でもありなんよ。つまり、噛み付こうが、目ン玉突こうが何をやっても許されるってもんなんや」

「そ、そんな所でベル君は頂点に君臨してるのか・・・」

（―ルール無用のこの闘技場で、恩恵を受けてる冒険者と戦う。・・・道理で初期のアビリティとかがカンストしてる訳だよ・・・）

この地下闘技場のルールを聞き、ヘステイアはそう思った。

「それじゃあ、僕はそろそろ控え室に向かいます」

「おお、今日も素敵な試合を頼むぞ〜♪」

ベルはそう光成と会話を交わし、控え室に向かおうとした。

「オウ、ちよつと待ちなベル」

「はい? 何ですか?」

独歩に呼び止められる。

「今日の対戦相手はイズミ・宗一郎だそうじゃねえか」

「はい」

「イズミは強いぜエ」

「はい、僕もそう思います」

笑みを浮かべながら独歩とベルは会話をする。

「それじゃあ、僕はこれで」

「ああ、チョット待ちな」

「?」

踵を返し控え室に再び向かおうとするもまたも、独歩に止められた。

ベルが振り向いた刹那――

「かあああッッ!!」

先ほどまで柔和な笑みを浮かべていた独歩の顔が鬼の形相となった。

咆哮を上げ、太い腕でベルの顔面目掛けて正拳突きを繰り出した。真っ直ぐな正拳突きである。

ベルは慌てずに後ろに下がった。顔面と拳がギリギリまで近づく。

「Chu」

そしてそのままキスをした。そして、パツと独歩から離れる。

「ハハッ、すっげエパンチ。激励ありがとうございます!」

笑いながら独歩にそう言うと、ベルは控え室へと向かっていったのであった。

「はっはっはっはっは。こりゃあ試合が楽しみだねイ」

「せやなあ」

そんなベルの背中を見ながら独歩は太い声で笑った。

ロキもそう言って笑ったのであった。

続 く ツ ツ ! ! !

Round3くチャンピオンく

「♪」

地下闘技場の控え室、鼻歌交じりでベルは準備を済ませていた。トランクスタイプの試合用ズボンを穿き、両手両足にテーピングを済ませたベルは、鏡の前に立っていた。

「ふふん」

笑みを漏らすとファイティングポーズを取り、軽くジャブを放つ。初めはゆつくりと、そして段々とスピードを上げていった。

「嬉しそうですねチャンピオン」

髭面でタキシードを着た男がベルにそう言った。

シャドーを止め、ベルは男の方は向かずに己の手を見ながら口を開いた。

「何でかな？テーピングを終える頃には全身がむずがゆくなってる」

そして、男の方を見やる。

「早く相手を八つ裂きにしたくて堪らないんだ」

笑顔を浮かべながらこわい事を平然と言った。

対する男もそんなこわい事を聞きながら笑みを崩さず答えた。

「面白いものですな。先ほど対戦者のイズミを見てまいりましたが、貴方と同じ事をおっしゃってました」

「僕と同じ事を、ですか？」

「ええ、『竹宮流と自分の全てをチャンピオンにぶつけない』と」

「はは、そりや楽しみだ」

男と談笑しながらベルはふと時計を見る。

そろそろ試合が始まる時刻であった。

「それじゃあ、行くか」

「―武運を」

そう呟きベルは部屋を出た。

―ドオン！ドオン！

『ワアアアアアアアアアアアアアツツ!!!』

太鼓の音と共に、会場が一気に湧いた。

「いよいよメインイベントじゃ」

光成が言った。

『ベル！ベル！ベル！ベル！ベル！』

「すごい人気だねえ、ベル君って」

会場から鳴り響くベルコールにヘステイアはそう感想を漏らす。

「チャンピオンじゃからなあ、ベルは」

「ごっつ凄いい戦いつぶりを見せてくれるんやで。ほーんと、ドチビに勿体無いわ」

光成に便乗するように、ロキが言った。ロキの一言余計な言葉にヘステイアはムツと顔をむくれさせる。

『皆さん！お待ちせいたしました。これよりメインイベントを開始いたしますッ！』

会場にアナウンスが鳴り響いた。

『ごっこ、オラリオ地下闘技場が出来て以来！最も若く、最もエキサイティングなチャンピオン！青龍の方角ッ！格闘スタイルクラネル流格闘術！「ヘステイア・ファミリア」所属ッッ！ベル・クラネルの入場だアーーーーッ！』

「ツシャアツツ!!!」

『ワアアアアアアアアアアアアアツツ!!!』

『今日も魅せてくれよチャンピオン！』

『ヘステイア・ファミリアって聞いたことないけどファミリア入りおめでとー!』

勇ましい掛け声と共に、試合コスチューム姿のベルが姿を現した。

それと共に会場から凄まじいまでの歓声が沸き起こる。

「ンで、今日ベル君の試合相手のイズミ・宗一郎・・・だっけ？どんな人なんだい？」

そんなベルを見ながらヘステイアは光成に問いかける。

「イズミは『竹宮流』と呼ばれる実戦柔術の使い手なのじゃ」

「竹宮流？」

聞きなれぬ単語にヘステイアは首をかしげる。

「極東に僅かに残る実戦柔術の一派ですよ、神ヘステイア。起源はトクガワ時代中期、イズミ・彦次郎によって立ち上げられたとされています」

「独歩ちゃん、何でドチビには敬語やねん……。ウチにはタメゴトで話すくせに……」

そんなヘステイアに竹宮流について説明する独歩。

その傍らではロキが恨みがましい目で独歩を見ていた。

「おっと、イズミも入場するみたいじゃぞ。白虎の方角じゃ」

光成の言葉に、一斉に白虎の方角へと視線を向ける。

『続きまして、白虎の方角！格闘スタイル竹宮流柔術ツ！「スサノオ・ファミリア」所属！イズミ・宗一郎ツツ!!』

現れたのは灰色が特徴な古武術の道着を着た初老の男であった。

髪は既に白く、頭頂部が禿げている。

だが、体の方は鍛えており引き締まっている。

入場する時の動きは無造作であったが、どこか軽やかで、動きに無駄が無かった。

その動きは猫科の肉食動物のそれであった。

「この人が……」

初老の男、宗一郎を見ながらヘステイアはぽつりと呟いた。

「ここでは、武器以外の全てを認めます！」

（――この人、強いな）

試合を行う前にスタッフが説明を行っているのを聞きながらベルの視線は宗一郎を見ていた。

ベルは宗一郎を見ながら自分と同じ臭いを感じ取っていた。

それは獣の臭いであった。

そして、直感する。

肌で、目で、否……。全身で。

イズミ・宗一郎は強い。と。

「クラネル君。礼を言わせてもらうよ、私の挑戦を受けてくれて」

不意に宗一郎がベルに話しかけてきた。

「いえ、お気になさらず。挑戦をされて受けないのではチャンピオン・・・いや、それ以前に格闘士とは呼べませんからね」

「ふふ、そうか」

ベルの言葉に、宗一郎は柔らかな笑みを浮かべた。

場所が地下闘技場でなければ、極普通の優しそうな中年の笑みである。

「すまないねえ、クラネル君。今日、私は君をここで殺す事にした」

その笑みのまま、凄いことを言つてのけた。

つまりは『本気で当てる』

それは、すでに約束されていたことを確認するための台詞であった。

果たし合いであることの確認であった。

「ふふん、そうこなくっちゃ面白く無いですよイズミさん」

対するベルも笑みを浮かべながら言う。

「でもさ、竹宮流つてのがどんなのか知らないけど必殺技の一つや二つで勝てるなんて思わないで欲しいな」

「ほう」

「ここは、地上最強を決める聖地だからね」

——ぐにやあ。

ベルの言葉と同時に、両者の間の空間が圧縮された闘気により歪んでいた。

正しくそれは一触即発の空気であった。

「両者！・元の位置にツツ」

スタツフに言われ、ベルと宗一郎は互いのリングサイドへと移動する。

そして・・・、

「始めエイツツ!!!」

——ドオン!!!

試合開始の太鼓ゴングが鳴らされた。

それと同時に、しなやかに宗一郎の体がゆるゆると動いてきた。

ベルも動いた。

二人の距離が急速に縮まっていく。

ベルの間合いに宗一郎が入って来た。

「ちえあつー！」

同時にベルの右足が跳ね上がった。

細いながらも鍛え上げられた足がぶん！と唸りつま先が宗一郎の胸元にぐんと槍のように伸びた。

「ひゅっー！」

鋭い呼吸を吐き、宗一郎はベルの足を難なく両の腕で絡めとる。

このまますぐに、膝と足首を極める関節技に入る体勢であった。

「オワツッ!」

（―やばっ、極められる!?!）

関節技のコースに入られる前に何とかしなければならぬ。

ベルは地に着いた軸足で地を蹴っていた。

「オワアツツ!!!」

その左足は、宗一郎のこめかみ目掛けすつ飛んでいく。

それを宗一郎は体を沈みこませかわす。

右足から拘束はずされていた。

「ツッー！」

（―もう、攻撃に転じるのか!?!）

ベルの両足がつく前に宗一郎が動いた。

「邪ッー！」

「くう!?!」

持ち上げた頭部に宗一郎の左足が襲ってくる。

それを右肘を曲げて受ける。

（―お、重てエ~~~~ツッ）

初老の男の体が生み出したとは思えない、鋭い蹴りであった。鍛えていない常人ならば、受けた腕が蹴り千切られている。

そのパワーを、肘を曲げたベルの右肘が、がっちり封じていた。立ち上がる。

「ツッー！」

「シッ！」

すぐに攻撃が来た。

拳。

拳。

肘。

足。

肘。

指。

拳。

見事な攻撃であった。

そのこと如くをベルは弾いていた。

肘で受け、膝で受け、手首で叩き、掌底で跳ね上げていた。

しかし、自分から攻撃をしようとはしない。

「ベル君……どうして反撃をしないんだ？」

観客席のヘステイアはそんなベルを見てそう言った。

「葛^{かすら}を警戒しているようだな」

「葛？」

独歩の言葉にヘステイアは問いかけた。

「竹宮流では関節技を総称して葛と言うんですよ。下手に攻撃を加えようものなら先ほどのように関節技に入られる恐れがある。それが、竹宮流のような柔術の怖い所です」

「しかし、関節もやけど打撃の方も凄いなあイズミセンセ。人体の弱点を的確に突いてきよる。胴なら秘中、胸尖、章門、背梁。頭なら天倒、人中、牙顎、村雨。一発当たれば悶絶間違いなしの場所や。こらさしものチャンピオンもキツイか？」

独歩の説明に便乗するように、ロキは宗一郎の動きを見てそう解説した。

「……ベル君」

それを聞きながらヘステイアはベルの名をそつと呟いた。

（―強いとは思ってたけど真逆これほどはねえ・・・）

宗一郎の攻撃を受けながらベルは思った。

まだ、相手のリズムがつかめない。

（一か八か・・・、此方から仕掛けてリズムを狂わせるか・・・）

そう思った矢先である。

ふっ・・・。と相手の攻撃の手が、一瞬ゆるんだ。

その隙を、ベルは逃さなかった。

（今ッ！）

攻撃をしかけようとしたその時だった。

―くるり。

「な!?!」

（後ろを向いた?）

ベルの目に映ったのは宗一郎の後頭部であった。

それも一瞬である。

「邪ッッ!」

真下の地の底から、魔性の疾さで浮きあがってくるものがあつた。

背を向け、身体を前に折った宗一郎の左足の踵であつた。

それが、ベルの両脚の間に潜り込んでいた。

踵で、股間の底を蹴りあげられれば、陰茎を潰されて悶絶する。

ヘタをすれば死に至る。

陰茎を潰されなかったとしても、恥骨を砕かれる。

「ぐぬうッッ!?!」

恐怖のためにあげた声なのか、攻撃のための声なのか、ベルには自分で自分のあげた声がわからなかった。

右の拳を思いっきり、自分の脚の間、真下に向かって叩きつけていた。

ベルの拳と宗一郎の踵がぶつかっていた。

互角のぶつかり合いであった。

「ッッ!?!」

後ろを向いているため宗一郎の表情は窺い知れなかったが、必殺の決め手が不発に終わり驚愕していたのは見て取れていた。

勝機である。

「トウリアアツツ!!」

背を向けた宗一郎の上に、ベルが大きく跳んでいた。

左肘の先に体重を乗せ、宗一郎の背骨の上に打ち下ろしていた。

「ゴガツ！」

「ガアツ!」

直撃であった。

宗一郎は溜まらず叫んでいた。

「ひゅっ！」

呼吸を短く吐くとともに、ベルの右腕が宗一郎の顔面を左に向かせるように回り込んでいた。

鍛え上げられた腕が、横を向いた宗一郎の右頬から顎にかけて絡んでいる。

「~~~~~ツツツ!!!」

宗一郎の背と首が、大きく反り返っていた。

ベルの左腕は、自分の背に回されている宗一郎の左腕と、脇腹との間に外側から潜り込んでいた。

その潜り込んだ手を、宗一郎の左の腋の下から肩口へと突き出す。

ベルの左指と、宗一郎の頭を抱え込んだ右手の指とがからんだ。

「みりっ。」

と言う音が上がった。

その音は鍛え上げられた肉に包まれた宗一郎の左肩から聞こえた。

「ごりっ。」

さらに力を込める。

宗一郎は動かなくなった。

技を解き、宗一郎を放す。

「勝負あ・・・」

動かなくなつた宗一郎を見て、スタツプが声を上げた瞬間だった。

ぐったりとなつていた宗一郎が体を起こし、ベルに迫ってきた。

ベルは技を解いたばかりで無防備である。

顔面がから空きであった。

「しゃあっ！」

宗一郎は折れていない右で指をVサインの状態にしてベルの顔面に放った。

目潰しである。

―ガッ！

肉がぶつかる音が聞こえた。

宗一郎の右手はVサインのままベルの目の前まで止まっていた。

手首のあたりを左手で止められていたのである。

「惜しかったですね」

驚愕の宗一郎にベルは笑顔でそう言った。そして、空いている右の拳を宗一郎の顔面に放った。

―めしゃ。

狙い変わらず右の拳は宗一郎の顔面に綺麗に突き刺さり、鼻の軟骨がつぶれる感触と、歯が折れる感触が右手に伝わってきた。

そのまま拳が顔面に突き刺さった状態で振りぬく。

宗一郎は吹っ飛ばされあお向けに倒れた。

「キャオラアッツ!!!」

間髪入れずに飛び上がったベルが宗一郎の胸の上に膝を打ち下ろしていた。

―めりっ！

直撃であった。

あばらの折れる音がした。

ぴくっぴくっとなんげをしながら、宗一郎は起き上がろうとしたがやがて力尽き動かなくなった。

目を剥き、天井を睨んでいた。

「勝負ありイ!!!」

それを見て、スタッフが声をかけると共に、ドオンドオン！と太鼓の音が会場に響いた。

「よっしゃあッツ!!!」

『ワアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!』

ベルが右手を挙げ勝ち名乗りを上げると同時に会場から歓声が沸

きあがった。

「か、勝っちゃったよ・・・」

そんなベルを見てヘステイアはそう呟いた。

これほどの、これほどの男だったのか。

(すごい・・・すごいぜベル君。君を、眷属にして良かった。君と出逢えて良かったツツ！)

視線の先で観客達に胸上げをされるベルを見てヘステイアは胸中で呟いた。

—そして、暫くして・・・。

「ベル君、いい試合だったぜ」

「はは、ありがとうございます」

試合を終え、普段着に着替えたベルは光成達と別れ、ヘステイアと共に帰路についていた。

「なあ、ベル君」

唐突にヘステイアが口を開いた。

「なんででしょう?」

「君の夢って、『地上最強の英雄』になることだよな」

「はい。そうですが、どうしたんです?」

「ボクもさ、夢が出来たんだ」

「どんな夢です?」

ヘステイアはベルの方に向き直り、微笑みながら言った。

「ボクたちのファミリアを『地上最強のファミリア』にする事さ。—だから、勝ち続けるよベル君」

そう言っつて、拳を突き出した。

「はい」

ベルもヘステイアの拳に己の拳を合わせた。

「約束だぜ」

そう言っつてヘステイアは笑った。

月明かりに照らされたその笑顔は綺麗であった。

続
く
ツ
ツ
！

Round 4 ～初めての冒険～

「ここが冒険者ギルドの中かア～」

ギルドのドアを開け、中に入りながらベルは呟いた。

「神様の眷属になる前は遠くから見てただけだけど・・・案外人多いな」
見渡せばヒューマンは勿論の事、獣人、アマゾネス、エルフ、ドワーフなど多種多様の人達で溢れていた。

どのカウンターも彼らが陣取っており、これは時間がかかるか？と心配していたが、よく見れば空いているカウンターがあった。

とりあえず、そこに向かいカウンターにいる受付嬢であろう女性に声をかけた。

ブラウンの髪をセミロングにし、メガネをかけたエルフの女性である。

「あの、すみません」

「はい、なんででしょうか」

その女性は綺麗な笑みを浮かべてベルに答えた。

綺麗な女性である。そんな笑みを見てベルは少しドキツとしてしまった。

（「故郷の村や、武者修行の旅先で訪れた街とかじゃあこんな綺麗な人いなかったからなア・・・」）

内心緊張しながら、ベルは女性に答える。

「えーっと、冒険者登録をしたいんですが」

「冒険者？君が？」

女性は訝しげにそう言うと、ベルをじーっと見ながら続けた。

「冒険者って言うのは君が思っているよりもずっと危険なものなんだよ？」

「僕は構いません」

迷う事無く言った。

「命を落とす危険もあるし、レベルがずっと上がらない事だってある。それでもいいの？」

「それでも一向に構いませんッ」

「そ、そこまで言うなら止めないけど・・・」

ベルの揺ぎ無い意思に若干引きながらも、女性は用紙を取り出しベルに渡した。

「この用紙に君の名前と種族と年齢、レベルと所属ファミリアを記入して」

「分かりました」

そう言っつて、ベルは用紙に言われた項目を記入する。

「よし、と」

記入し終え、それを女性に渡す。

「ふむふむ、ベル・クラネル。種族はヒューマンで年齢は14。レベルは1、所属は「ヘスティア・ファミリア」・・・か。ファミリア名は始めて聞くわね」

用紙を見ながら、女性はベルに言う。

「はい、立ち上げたばかりなんですよ。僕が眷属になるまでは誰もいなかったみたいで・・・」

「なるほどね、新規のファミリアか・・・。分かりました、これよりヒューマン、ベル・クラネルをオラリオの冒険者として登録します。よろしいですか?」

そう言っつて、女性は記入に誤りがないか確認してサインに記入し、ベルに言った。

「はいー」

ベルはそう答えた。

即答であった。

「分かりました。これより私、エイナ・チュールがベル・クラネルさんの攻略アドバイザーとして担当する事になります。以後お見知りおきを」

「よろしくお願いします、エイナさん」

「うん、よろしくね。ベル君」

ベルが頭を下げると、親しげに女性、エイナは親しげにそう言った。

—これで、ついに夢にまで見たダンジョンに行けるんだなあ・・・。

ようやく掴んだ『地上最強の英雄』の夢。その第一歩である。

そうと決まれば善は急げ、早速ダンジョンに向かわねば。
そう思った矢先である。

「それじゃあ早速、ダンジョンの注意事項をキツチリ教えてあげるね」
「えっ」

出鼻を挫かれた。

エイナの言葉に、目を瞬かせながらベルはそう洩らした。

「初めてダンジョンに潜る人には注意事項を教えなければならぬ決まりなの。それを受けたらダンジョンに行つていいよ。というか受けなさい、いいわね？」

「・・・アツハイ」

エイナの気迫に思わずベルはそう答えた。

有無を言わせぬ気迫であった。

「それじゃあ、別室で注意事項を教えるから行こうか」

「・・・行きましょう」

そういう事になった。

—そんなこんなで・・・。

「やっと、ダンジョンに潜れるようになった・・・」

くたびれた様子でベルは呟いた。

エイナからダンジョンの注意事項や上層に出てくるモンスターなどについて事細やかに説明を受けたからである。

端的に言うならばスパルタであった。

『無茶はするな』

『冒険者は冒険をしてはいけない』

特に、エイナから口をすっぱくして言われた事である。

(—これは多分、職員としてではなく『エイナさん自身』として僕を心配しているからだろうなア)

エイナ・チュールは本当に優しい人だ。

ベルはそう思う。

死んで欲しくない為に、ベルを気遣い心配する。

たまらぬ女性ひとであった。

「だけれど、そこまで心配するって事はよほどダンジョンのモンスターは外よりも強いって事なんだよな」

そう呟く。

外のモンスターは、自然にダンジョンの中から生まれるオラリオのモンスターと違い、繁殖の際に核である『魔石』を削り子に分け与える。その為、ダンジョンに出てくるモンスターよりも力が低いのである。

ベル自身、オラリオに来る前に何度かそんなモンスターと戦った事がある。

湧き上がったのは興味であった。

一体どれほどの強さなのだろうか？

戦ってみたい。

ベルはそう思っていた。

「見せて貰おうかな、ダンジョンのモンスターの實力ってヤツを」

そう言っただけでベルはダンジョンに向かう。

その顔には笑みを張り付かせていた。

その笑みはもはや少年のものではなかった。

餓狼の笑みであった。

―ダンジョン一階層

「ここがダンジョンか、中々広いところじゃないの」

ダンジョン内を見回しながらベルはそう呟く。

ちなみに今のベルの格好はいつもの服装の上にギルドから支給された防具をつけており、腰には鞘に入ったナイフがあった。

防具は兎も角、ベルは基本素手で戦う為ナイフはいらなと言ったのだが、エイナに凄い剣幕で睨まれたのと『魔石』を回収するのに使う為にとつてある。

「兎に角、突っ立ってるのもなんだし探索するか」

そう言っただけで、ダンジョン内を歩き回る。

―パキッ。

ふと、壁の方から何かが割れる音がした。

そちらへ視線の方を移す。

壁から何かが雛が卵から孵るように這い出てきていた。

緑色の小型の人型のモンスター、ゴブリンである。

一番弱いタイプのモンスターであった。

「ギギッ！」

ゴブリンがベルに気づいた。

今にも襲い掛からんと身構えている。

「ふふん」

対するベルの方は臆することなく悠然としていた。

笑みを浮かべながら構えていた。

「キシヤッ！」

先に動いたのはゴブリンであった。

獰猛な猟犬の如く駆け出し、口を開けてベルをかみつこうとした。

それを間一髪、スウェーで避ける。

「凄いな、ゴブリンでも外の連中とは全く違う。スピードも・・・恐らくパワーもダンチだ。・・・だけど」

続いて長く伸びた爪でベルを引っ搔こうとする。だが、

「対処できない訳じゃないツッ！」

「アゲツッ!？」

カウンターで放たれたベルの右拳がゴブリンの顔面にクリーンヒットしていた。

鼻血と折れた歯を撒き散らしながらゴブリンは仰向けに倒れた。

「ま、こんなもんだな」

そう言つてベルはナイフを使い、ゴブリンの体から魔石を取り出した。

核である魔石を失ったゴブリンは灰となり消滅した。

それをポーチに入れようとしたその時である。

「ッ!？」

殺気を感じ前方に転がり込んで後ろを見た。

その後ろには新たに生まれ出たであろうゴブリンが爪を振り切った状態でたたずんでいた。

しかも一匹だけではない。何十匹も居た。

「そういやダンジョンのモンスターって無限に湧いてくるんだっただけ。すっかり忘れてた」

すっかり忘れ油断していた自分を恥じつつも、笑みを浮かべながらゴブリン達を見据えていた。

「雄オオオオオオオオオオオオツツ!!!」

吼えた。

吼えながらゴブリンの一匹に飛び掛る。

「しゃああああっ!!!」

その一匹を押し倒し馬乗りになると、そのまま顔面を思いつきり殴った。

右拳。

左拳。

右拳。

左拳。

右拳。

左拳。

右拳。

左拳。

そして、トドメに頭突きを叩きつける。

ごしゃつと言う鈍い音と共にそのゴブリンは動かなくなった。

「トウラアッー!」

「ヒギイツ!?!」

それと同時に立ち上がり、次のゴブリンに狙いを定め股間を蹴り上げる。

股間を押さえながら、ゴブリンの体が宙に浮く。

「チエリヤアッー!」

間髪入れずに廻し蹴りを顔面に叩き込んだ。

ゴブリンの意識を刈り取る。

—ざわ・・・ざわ・・・

あつという間に同胞が二匹倒され、どよめくゴブリン達。

「ルアアアツツ!!!」

「ギャバツ!?!」

その隙を見逃さずベルはもう一匹のゴブリンに前蹴りを放った。顔面に前蹴りがめり込む。

「うおおおおおおああああああアアアアアアアアアアアツツ!!!」

再び吼えた。

吼えて、ゴブリンの群れへと突撃する。

それはさながら狩りをする狼のようであった。

そしてそのまま、手当たり次第にゴブリンを殴った。

殴った。

殴った。

殴った。

ぶん殴った。

「ギシャアアアアツツ!!!」

「キエアアアアアアツツ!!!」

今度は2匹同時に襲い掛かってきた。爪を振り上げてベルに迫る。挟み撃ちであった。

逃げ場は無い。だが、そんな状況でもベルは焦るそぶりを見せない。

「バーカ」

そう言って笑った。

そしてしゃがんだ。

ドズツ!

爪が突き刺さる。

だが、ベルではない。

ゴブリン同士で突き刺しあっていた。

同士討ちであった。

「さてと、あんた等まだやるかい?」

そう言って、まだ残っているゴブリン達にそう問いかけた。

モンスターであるゴブリン達にはベルの言葉は分からない。

だが肌で、目で、それを感じ取っていた。

—この男には絶対に勝てない。

「ヒャンツツ！」

怯えるような泣き声と共に1匹が逃げ出した。

それを引き金に2匹、3匹と次第にゴブリンが逃げていく。

終いには全部のゴブリンが踵を返し、ベルから逃げていった。

「ふふん」

ベルはゴブリン達の逃げる背中を追うことはしなかった。

ベルには逃げる相手を倒す趣味は無い。

視線を倒したゴブリン達に向ける。

ゴブリンは30匹ほど地面に転がっていた。

「結構倒したな」

そう呟き、魔石の回収を始めた。

その後、探索を止め魔石を換金していくのだが魔石の多さからエイナに無茶をしたと思われ雷を落とされたのであった。

哀れなり。

続 く ツ ツ ！ ！ ！

Round5く拳姫く

ベル・クラネルが冒険者となって、4週間程の時が経った。
ダンジョンに潜り戦いを続ける中で、ベルは4階層まで潜ることを
許されるようになったのであった。

そして―

ベル・クラネル

LV1

力：S2100

耐久：S1850

器用：S1520

敏捷：S1980

魔力：S1920

格闘士：S

《魔法》

二

《スキル》

トータル・ファイティング

【武芸百般】

- ・ 常時発動
- ・ あらゆる格闘技、武術を学ぶ事で、それを使うことが出来る。
- ・ 但し『気』等を使う武術等は使用者の魔力に依存する。

【脳内麻薬】

エンドルフィン

- ・ 危機的状况に陥ることにより発動。
- ・ 脳内からエンドルフィンを分泌させる事によりステータスが上昇する。

【八極聖拳気功術】

・ 八極聖拳の気功

- ・ 気をコントロールする事で攻撃、防御、治癒に使う事が出来る。
- ・ 威力は使用者の魔力に依存。

ステータスが限界突破していた。

たまたぬステータスであった。

「カンストしてる時点でビックリしたけど、真逆限界突破するなんてなあ……」

—やっぱ凄いやベル君は。

そんなベルのステータスを見て、ヘステイアはそう呟いた。

「どうしたんですか?」

「いや、なんでもないよ」

ヘステイアの下にはベルがうつ伏せで寝ていた。

上着は脱いでおり鍛えられた上半身が露になっている。

ステータスの更新をやっていたのである。

ダンジョンへ潜り、モンスターと戦い、ホームへ帰って来た後ステータスの更新をする。

コレが、ベルの日課となっていた。

今日もまた、ダンジョン探索を終えヘステイアの待つホームに帰って来たのである。

ステータスの更新を終え、ベルの背中から降りる。

「で、どうでした?ステータスは」

「うん、順調に上がってるよ」

そう言っつて、ベルにステータス表を渡した。

「そうですか。……ふむ、今日はコレ位上がったのか」

ステータス表を見ながらベルは脱いでいた上着を着る。

そしてキッチンへと向かった。

エプロンを付け、調理場へ立つ。

晩飯を作るのである。

ステータスの更新の後に晩飯を作るのもまたベルの日課なのであった。

(—今日は何にするかな。昨日は洋物だったから、和食にするか) ベルは頭の中で献立を決め、早速取り掛かるのであった。

—少年料理中……。

「いただきます」

「いただきます」

テーブルに置かれた和食……御飯、味噌汁、焼き魚と言った料理

を前にベルとヘステイアは両手を合わせて会釈した。

「ん、やっぱりベル君の料理は美味しいなア」

「いやア、そんな事」

焼き魚を食しながら感想を述べるヘステイアにベルは照れくさそうにそう返した。

武者修行の旅、そしてオラリオにやってきてからスカウトを受けるまでずっと一人暮らしをしてきた手前、自炊を良くやっていたのである。

自分の作った料理が他の人、しかも女性に褒められると言うのは嬉しいものだ。

「特にこの味噌汁とか絶品だよ。毎日飲みたいくらいさ」

「そ、それほどですか」

「うん、これから毎日ボクの為に味噌汁作ってくれよ」

「ホワツ!？」

ヘステイアの言葉にベルは思い切り目を見開いた。

そのベルの反応を見て、ヘステイアはハツとする。

「—そーいや極東じゃあプロポーズに『味噌汁を毎日飲みたい』って言うことがあるんだっけ？」

—極東では『自分の為に毎日味噌汁を作ってくれ』と言うプロポーズがある。

とある極東出身の神友T氏が言っていた言葉である。

それを思い出し、ヘステイアは顔を真っ赤にした。

一緒に暮らしていくうちに、ベルに惹かれてる為、いつかは相思相愛の仲になりたいとは思ってたものの、いざ(不可抗力とはいえ)プロポーズをするとなると緊張する。

「あゝ…えーつとだな、ベル君。ボクが言いたかったのはだね…」

「そんなに美味しかったんですか、僕の味噌汁?それなら明日も味噌汁作りますけど」

「アツウン…」

しかし、ベル自身には味噌汁発言の真意は伝わってなかったようである。

若干がっかりしながらへステイアは頷くのであった。
その後、風呂に入り眠りについたのであった。

—翌日。

「来ちゃったよ．．．第5階層」

ダンジョン第5階層、その入り口である階段の手前でベルは呟いた。

本来、ベルは第4階層までしか許されていない。それなのに何故ここに居るのか？

答えは簡単だ。ステータスが上がったことで第4階層までのモンスターではあまりにも弱すぎて相手にならないからだ。

—弱い相手では満足出来ない。

モンスターと戦って倒す度にベルの中に巣くう『狼』がそう叫ぶのだ。

特に今日は一段とその『狼』が吼えている。

その声に根負けし、1階層だけならと現在に至るのだ。

「さて、どれほどの強さなのかな？この階層のモンスターは」

これエイナさんにバレたら雷落とされるなあ。と考えつつ、されどまだ見ぬ強敵との戦いを夢見ながらベルは探索を開始するのであった。

「おかしいな、なんかやけにここのモンスターの数が少ない．．．」

探索を始めて暫くしてベルはそう呟いた。

ここ5階層では、モンスターが圧倒的に今まで探索してきた階層よりも少ないのだ。

—一体何が起こってる？

そう訝しんでいると．．．

—ぞわり。

全身の毛が逆立つ感覚がした。

ベルは目を見開き目の前の漆黒をただ見つめていた。

漆黒の中には二つの赤い光があった。

やがて、漆黒からそれが現れる。

それは巨漢であった。

筋骨隆々とした大男である。

牛の頭をした大男だ。

無論それは人間ではない。モンスターである。

「―何でこんな所にミノタウロスが・・・？」

ベルがボソリと呟いた。

ミノタウロス

本来なら5階層に出るはずの無いモンスターである。

つまり、駆け出しのレベル1では太刀打ちできないモンスターだ。

(ひよつとして、このモンスターが少ないのもコイツに怯えてつて
事か・・・)

胸中で呟く。

コイツが居るのなら5階層で余りモンスターが出没しないことも
頷ける。

そのときである。

「ヴヴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

ミノタウロスが吼えた。

並みの冒険者なら震え上がり失禁してしまうほどの咆哮である。

だが、彼が対峙している冒険者はベル・クラネルであった。

ベルは口元にたまらぬ笑みを浮かべながらミノタウロスを見てい
た。

餓狼の笑みであった。

何故、ここにミノタウロスが居るのか？そんな事はどうだってい

い、重要じゃない。

よくぞ来てくれた！

よくぞ来てくれた！

弱いモンスター相手では満足出来ない自分の下へよくぞ来てくれ
た。

そう思い笑みを浮かべていた。

ゆつくりとベルは身構えた。

「来いよ」

そう言つて笑みを浮かべたまま左手の人差し指をクイツクイツと

自分の方に向け挑発する。

その言葉にカチンと来たのか、ミノタウロスは唸り声を上げながら石でできた棍棒のようなもの、『ネイチャーウェポン』を振り上げベルに襲い掛かる。

「ひゅっ！」

「ッ!？」

頭目掛けて棍棒を振り下ろす瞬間を見計らい、ベルはミノタウロスの手首を狙い蹴り上げる。

—ごかつ！

鈍い音がした。

骨が外れる音であった。

「ヴアアアアアアアアアア!!？」

ミノタウロスが手を押さえ蹲り叫び声をあげていた。

ネイチャーウェポンは遠くに飛んでいつている。

ベルの蹴り上げが、手首に当たり脱臼したのである。

暫くして、ミノタウロスが立ち上がった。脱臼した手首を掴み、それを思いつき押し込んだ。

—ガチン！

と骨が繋がる音が聞こえた。

「アレ痛いんだよなア」

そんなミノタウロスを見て、ベルは苦笑しながら言った。

ミノタウロスは手を開いたりしながら確認すると、構えた。

ベルと素手で殴りあうつもりである。

「上等だよ」

そんなミノタウロスを見てベルは笑った。

そしてにらみ合う。

「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!!」

「雄オオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!!」

互いに吼えた。

そして互いにぶつけ合う。

拳。

拳。足。肘。拳。足。肘。拳。足。拳。

互角のぶつかり合いであった。

「キョオラアッ！」

ベルの右足が跳ね上がった。

弧を描き、ミノタウロスのこめかみにのびていく。

だが、それを見計らったかの用にミノタウロスのローが、ベルの軸足を叩いた。

バランスを崩す。

ミノタウロスが追撃をしようと向かってきたその時である。

「甘いんだよ牛公ッ！」

「ヴォアッ!？」

左の回し蹴りがミノタウロスの顔面を叩いた。

横つ面を蹴り飛ばされ、ミノタウロスが地面を転がる。

追撃をかけようとベルが動く。

「ヴォオオツツ!!！」

舐めるなどばかりに、ミノタウロスが起き上がると同時に右のストレートを放つ。

「がっ!？」

それはベルの顔面に直撃した。

ミノタウロスの一撃、それはレベル1の冒険者にとっては『死』を意味する。

無論、それは拳でも同じである。

勿論、ベルも例外ではなく拳によって頭部はザクロのように弾け……ツツ、否ッ!

それを、思いっきりミノタウロスの胸目掛けて振るった。
—ゴシヤツ!

直撃。

拳はミノタウロスの胸に深々と突き刺さった。

—ゴブツ!?

口から血を吐き出すと共にミノタウロスは地面に倒れ、動かなくなつた。

決着である。

「ふう……」

息をつき、ナイフを取り出すとミノタウロスから魔石を取ろうとしてふと手を止める。

殺気を感じ取ったからだ。

その方を見やるとミノタウロスがもう一体暗がりから姿を見せた。

「もう一体いるなんてなあ……」

そう呟き、再び身構え動き出そうとしたその時だった。

—ドズッ!

ミノタウロスの胸から何かが生えてきた。人間の手である。

手の細さからして女性のようだ。

それが引き抜かれ、ミノタウロスが倒れると同時にその人物の姿が露となった。

「—大丈夫ですか?」

腰まで届く金髪に金色の瞳の美少女である。

ベルはその少女を知っていた。

とは言っても話に聞いた程度であり、実際に見たことは無い。

「アイズ・O・ヴァレンシユタイン……」

名前を呟く。

アイズ・O・ヴァレンシユタイン

大手ファミアリア『ロキ・ファミアリア』のエース冒険者であり、『武神』オロチ・独歩の娘である。ただし、血のつながりは無く養子だ。

父より直伝された神心会空手を使い、モンスターを屠るその姿から『拳姫』の二つ名で呼ばれている。

（「オロチ館長の娘さんだからもうちよつとゴツイ女の子かなと思つてたけど・・・華奢だなア」）

若干失礼なことを考えながらも、ベルはアイズを観察する。

（「だけど・・・強いなこの人。伊達に『拳姫』と呼ばれてはいな・・・」）

「あの、大丈夫ですか？」

「ツツ!？」

気がついたら視界いっぱいアイズの顔が映り、驚く。

「あ、ごめんなさい。怪我、してたみたいだから」

「ああ、大丈夫です。コレは別のミノタウロスにやられたもので。でも、もう倒しましたから」

ベルの反応を見て謝罪するアイズ。

嗚呼そういう事なのか。と苦笑交じりにベルはそう言つて倒したミノタウロスを指で指した。

「え？これをキミが倒したの？」

「ええ、魔石はまだ取つてませんけどね」

驚いた様子のアイズにベルはそう答えた。

「おーい！アイズ、こっちはあらかた片付けたぞ。そっちはどうなつた？」

声が聞こえた。ベルとアイズは振り向く。

そこに居たのは若い男だ。

身長は180の後半ぐらいだろうか？

体の各部分が鍛え込まれ、太い。

「あ、克己兄さん。こっちも終わったよ、一匹は彼が倒したけど」

アイズが男の名を呼び、状況を説明した。この男もまたベルは知つていた。

オロチ・克己

アイズと同じくロキ・ファミリアのエース冒険者でありオロチ・独歩の息子である。

その余りにも卓越した空手の腕から『近代空手を終わらせた者』と呼ばれており、次期ロキ・ファミリア団長候補に選ばれているとの噂もある。

「彼がかい？・・・その兎のような白い髪に赤い目。君、ひよつとして親父が言つてたベル・クラネル君かい？」

「はい、そうですか」

克己はマジマジと見ながらベルにそう問いかける。

「会えて光栄だよ。・・・それと、この件はすまなかつた。ちよつとヘマをやらかしてミノタウロスを逃がしてしまつてね。本当に申し訳ない」

「いえ、気にしないで下さい」

そう言つて頭を下げる克己にベルは苦笑いしながらそう答えた。

「お詫びと言つちやアなんだけど、今度奢らせて欲しいんだ。どうかな？」

「いや、流石にそこまでしていただくわけには・・・」

ベルは流石にそこまではいいと断つたものの、それでは俺の気がすまないと克己の押しに根負けし、結局奢つてもらふことになつたのであつた。

―その帰り道・・・。

「あ・・・、エイナさんにミノタウロスと戦つたこと話したら怒られるかもなあ」

若干嫌な予感を感じていたのであつた。

続 く ツ ツ ！ ！ ！

Round6〜レベルアップ〜

「5階層でミノタウロスと戦ったア~~~~~~~~ツツ!!!? 何考えてるのキミはツツ!!!」

冒険者ギルドにて怒声が響く。

ベルの攻略アドバイザー、エイナ・チュールのものであった。

エイナの前ではベルが座っている。

「冒険者は冒険をしちゃダメってアレほど言ったでしょ!? 運よく倒せたから良かったけど一歩間違えたら死んでたかもしれないんだよツツ!」

「い、いやア・・・すいません。つい出来心で・・・」

エイナの説教にベルは苦笑いで謝るも、彼女の腹の虫は納まらない。

「その出来心が、冒険者が命を落とす原因なんだからね! だいたい・・・クドクドクドクド」

結果、1時間ほどエイナの説教は続いた。

「ふう〜・・・疲れた」

つかれきった様子でベンチに腰掛けた。

理由は言わずもがなエイナの説教である。

まさか、あそこまで説教を受けるとは思ってはいなかった。

言いつけ守らず5階層に降りた拳句、普通のレベル1ではまず勝てないであろうミノタウロスと戦ったから当然といえば当然であるが・・・。

「随分エイナ氏にドヤされたようですね、ベルさん」
「ん?」

不意に声がかかり、その方を見やる。

男がいた。極東の隣りの大陸、そこにある『中華帝国』、略して中国の民族衣装に身を包んだ褐色肌の男である。

身長は170センチ後半あたりだろうか。

長く黒いオサゲが特徴的である。

「烈さん、久しぶりですね」

「ええ、本当にお久しぶりです。すっかり大きくなって・・・」
ベルの言葉に男、烈は微笑みながら答えた。

この男の名は烈海王。

中国出身の拳法家兼冒険者で中国武術界において高位に値する『海王』の称号を受け継いでいる人物だ。

その技のキレ、威力はどれもピカ一で、正に海王の名に相応しい。ちなみに本名は別にあるのだが、それは本編とは関係ないので別の機会にしよう。

「先ほどはお恥ずかしい所を見せちゃいましたね・・・。ところで『タン先生』はお元気ですか？」

「ええ、勿論です。元気に拳法を教えておられますよ」

ベンチに座り親しげに話すベルと烈。

ベルが8歳の時にタン先生こと齡80の中国拳法の達人タン・フリールーの元で中国武術と八極聖拳の気功を学んだ時に知り合った仲である。

兄弟弟子の関係であり、よく組み手をしてもらっていた。

「そうですか。近いうち会いに行こうかなア」

「きつと老師もお喜びになられます」

和気藹々と話すベルと烈。

ふと、時計を見た。午後6時である。

「あ、いけない。そろそろ神様が帰ってくるころだし晩御飯の材料買って帰らないと」

「む？：そうなのですか。お気をつけてベルさん」

話を切り上げ、二人は別れたのであった。

―ヘステイア・ファミアアのホーム。

「ふーん、普通ってた道場の兄弟子とねえ」

「ええ。オラリオで再会出来るとは思ってたませんでしたよ」

ベッドで横になりながらベルは自分に乗っかっているヘステイアに言った。

ステータスの更新の最中なのである。

「近いうち遊びに行く予定ですし神様もどうですか？」

「うん、いいぜ。そのタン先生って人はどんな人なのか見てみたいし……」

ヘステイアはそう言って、ベルのステータスに目をやった。

ベル・クラネル

LV2

力：10

耐久：10

器用：10

敏捷：10

魔力：10

格闘士：S

幸運：E

《魔法》

□

《スキル》

トータル・ファイティング

【武芸 百般】

・常時発動

・あらゆる格闘技、武術を学ぶ事で、それを使うことが出来る。

・但し『気』等を使う武術等は使用者の魔力に依存する。

エンドルフィン

【脳内麻薬】

・危機的状況に陥ることにより発動。

・脳内からエンドルフィンを分泌させる事によりステータスが上昇する。

【八極聖拳気功術】

・八極聖拳の気功

・気をコントロールする事で攻撃、防御、治癒に使う事が出来る。
・威力は使用者の魔力に依存。

(……ん?)

妙な違和感に気づきもう一度よく読んで見る。特にレベルの所を。

ベル・クラネル

ヘステイアの危惧にベルは笑いながらそういった。

「強くなつて名を上げればオラリオだけでなく世界中からも注目される。そしていずれは『アイツ』の耳にも届く筈ですからね」

「アイツ?・・・アイツって誰だい?」

ヘステイアの問いにベルはハツとして答える。

「あ・・・いえ、何でも無いです、忘れてください。・・・今夕食作りますから」

そう言つてベルは服を着て夕食の準備に取り掛かった。

「―ベル君・・・」

ヘステイアはベルの名を呟く。

見てしまったのだ。あの時、瞳の中に宿る『憎悪』の炎を。

どろどろとした黒い炎であった。

それがベルの瞳の中で暗く燃え盛っていたのだ。

「キミは何を隠してるんだい?」

ヘステイアの問いかけに答えるものは誰も居なかった。

―翌日。

―ざわ・・・ざわ・・・

冒険者ギルドは何時にもましてざわめきたっていた。

「オイオイオイ」

「4週間でレベル2にランクアップとか凄いわコイツ」

「ほう、ミノタウロスを単独で討伐ですか。たいしたものですね」

ギルドの掲示板、それを見て冒険者達が口々にさういう。

掲示板にはこう書かれてあった。

―ベル・クラネル、上層にて現れたミノタウロスを単独で討伐し僅か4週間にしてレベル2にランクアップ。

その報は勿論彼らにも知れ渡っていた。

「ふふん、昂ぶるねエ」

ぶるり。とたまらぬ武者震いをしているスキンヘッドに眼帯をはめた男が言った。

オロチ・独歩であった。

独歩は笑みを浮かべていた。
戦いに餓えた狼の笑みである。
たまらぬ笑みであった。

「いやア、すっごいのオ。最速記録を打ち立てるとは、流石はベルじゃ」

呵呵大笑しながら小柄な老人はベルを賞賛した。

トクガワ・光成であった。

「嬉しそうですね、御老公」

「そりゃあそうじゃ。何せワシのお気に入りの格闘士であり、孫みたいなもんじゃからのう」

付き人の言葉に、笑みを浮かべながら光成は言った。

嬉しくてたまらぬ笑みであった。

そして、それはまだ見ぬ強者たちの耳にも――

「ああ……。なんて、なんて素晴らしいのこの子は……」

とある一室にて、恍惚な表情で呟いた。

女性である。

黒の露出度の高いドレスを着た銀髪の女性だ。

美しい女性であった。

豊満なバスト、くびれたウエスト、そのどれもこれも美しい女性であった。

この姿で街中を歩こうものなら10人中の10人が振り向く美しさである。

無論、彼女は人間ではない。神である。

美の女神フレイヤ。それが彼女の名であった。

ロキ・ファミアと対を成す『フレイヤ・ファミア』の主神である。

フレイヤの目の前には鏡のようなものが浮かんでいた。

それにはベルがモンスターと戦っている様子が映されている。

「よう、フレイヤ。また、地下闘技場のチャンピオンにご執心かい？」

不意にフレイヤの背後から声が聞こえた。

振り向くとそこには男が立っていた。

太い、男であった。

腕も太い。

足も太い。

首も太かったし、その上に乗っている顔も太かった。

吐く息も太そうだったし、考え方や思想までもが太そうであった。

「ええ、そうよ。彼の輝きは私をときめかせてくれるの。たまらないのよ、神でも第一級冒険者でも持ち得ない餓えた狼のような魂の輝きが」

熱の籠った吐息を吐き出し、潤んだ瞳でフレイヤは男にそう答える。

発情した雌のような表情であった。

「それほどまでにかい、妬けちまうなア」

「あら？ 北辰館館長、マツオ・象山が嫉妬かしら？」

男、象山の言葉にフレイヤは意地悪そうな笑みを浮かべて問いかける。

マツオ・象山

オロチ・独歩の神心会とは対を成す空手団体『北辰館』の館長である。

独歩とは『龍虎』と呼ばれるほどのライバル関係で、何度も激闘を繰り広げてきた仲であった。

「俺らだって人の子だぜい。妬けるに決まったらア、にしても——」

フレイヤの言葉に鏡のようなものに映るベルを見て言った。

「強いねエ、このボウヤ」

太い笑みを浮かべながら言った。

そして、踵を返し部屋から出ようとする。

「フレイヤよウ、ちよっくらギルドに行ってくるぜ」

「あら、どうしてかしら」

「決まってるだろ？」

くるりと太い首だけをフレイヤに向けながら言う。

「現役復帰するんだよ」

——そして、ある所では。

「ほう、僅か4週間でレベル2・・・すっげえなア」

控え室にてプロレスパンツにブーツといたったいかにもプロレスラーと言った容姿の男が座りながら鏡のようなものを見ながら呟いた。

金髪と長い顎が特徴的な男である。

彼もまた人間ではなく神だ。

トール

『トール・ファミリア』の主神にして、プロレス団体『アズガルド・プロレスリング（略称アズプロ）』の社長兼プロレスラーである。

絶大なカリスマ性を誇りその一挙手一投足が観客を魅了する。

「聞いた所によりゃあ、地下闘技場のチャンプだって?・・・もうちよつと裏の情報も調べとけばよかつたぜ」

鏡のようなものの映像を見ながら呟く。

それにはベルがモンスターと戦っている光景が映されていた。

笑みを浮かべながら続ける。

「欲しいなア、ウチに」

「トール社長。試合開始10分前です」

控え室のドアから係員の男が声をかける。

「おう、今行くよ」

そう言つて、鏡のようなものを消すと立ち上がり背中に『雷神』と書かれたガウンを羽織り控え室から出て行った。

—また、別の所では。

『オラリオにて、ベル・クラネルという少年が僅か4週間でレベル2にランクアップの最速記録を立てました』

とある格闘技のジムにてテレビを見ている男が居た。

ライオンの鬣のような赤い怒髪をした黒い拳法着の男である。

極めて悪魔的な風貌。

体はかなり筋肉質である。

男の足元には、ジムの人間であろう男達が転がっていた。

あるものは顔面をひしゃげさせ—

あるものは折れた骨が肌を突き破り—

あるものは目玉を抉られ―

あるものは袋が裂け、肉片が零れ落ち、股から血を流して―

その悪魔的な男以外は全て地に倒れ伏していた。

うめき声が聞こえている事から生きていることが分かるが、惨状である事には変わりはない。

「ベルの野郎、ちよつとはマシになったって所だが。…まだ足りぬ。俺を満足させるには程遠い」

くつくつと笑いながら男は言う。

そして、テレビを消すとおもむろに立ち上がった。

「ちよつくらサプライズで会いに行つてやるか。オラリオに、ベルの所によ」

そう言つて男は悪魔的な笑みを浮かべた。

男の名はハンマ・勇次郎、二つ名は『鬼神^{オーガ}』

そして人は彼のことをこういう。

―『地上最強の生物』と。

ベルやヘスティアの知らないところで様々な思惑が蠢いていた。

続 く ツ ツ

!!!!

Round7 豊穰の女主人 前編

荒野であった。

荒野で赤い怒髪の男と、黒髪の男がにらみ合っていた。

赤い怒髪の男は両手を広げるような構えを、黒髪の男はマーシャルアーツの構えである。

黒髪の男が動いた。光り輝く拳を振りかざし赤い怒髪の男に迫る。ベル自身も使用したバーンナツクルである。

—どごっ!

黒髪の男の拳が赤い怒髪の男の胸に突き刺さった。

ごぷり。と赤い怒髪の男の口から血があふれ出す。

これで、決着か・・・?否ッ!

赤い怒髪の男は広げた両手をそのまま黒髪の男の両耳に振るった。

—ぱんっ!

音が響いた。

黒髪の男の眼球から光が無くなっていく。

両手を離すと黒髪の男の耳からずぶずぶと血があふれ出した。

だが、それだけでは赤い怒髪の男の拳は止まらない。

己の力、全てを使い放たれる一撃が、黒髪の男の胸に吸い寄せられ・・・。

音が響いた。

形容できない音であった。

骨、肉、魂、全てを根こそぎ破壊するような—

そんな音が荒野に響いた。

拳が黒髪の男の胸に突き刺さっていた。

たまらぬ拳であった。

「と、父さアアアアアアアアアアアアアアアアんツツ!!!」

叫び声がした。

幼い少年の声だ。

幼い自分の声と共に、ベルは夢から覚醒した。

目を開ける。

そこは見慣れた部屋であった。

ヘステイア・ファミリアのホームである。

近くにはヘステイアがすやすやと寝息を立てて寝ていた。

「また、この夢か……」

手元に置いてあった愛用のオープンフィンガーグローブを見ながら呟く。

義父『ジェフ・クラネル』が今際の際に渡してくれたグローブであった。

—強くなれ……。

ベルにそう言い遺して渡したのである。

ベルが10歳の頃であった。

「アレから四年……か。僕は強くなってるんだろうか……」

呟きながらグローブをはめた。

そして、一張羅のジャンパーを羽織り装備をつける。

「行ってきます、神様」

「んく……いってらっしやい……」

そして、夢現なヘステイアにそう言うのとホームを出るのであった。

—最近、誰かの視線を感じる。

街中を歩きながらベルはそう思った。

リンクアップから何日か経った早朝である。

思いながら視線の感じる方向を見やる。

バベル、その上の方からであった。

—キミは4週間でリンクアップを果たした、これは未だ誰も成し遂げていない事だ。良くも悪くもキミに目をつけてくる輩は居るだろう、表の世界であろうと裏の世界であろうとね。

ベルはふとこの間、ヘステイアが言った事を思い出していた。

「もう僕に目をつけてる神ヤツがいるって事か……」

バベルの方を見上げながら呟く。

光成やヘステイアから、バベルの上の階には神々が住んでいると聞いている。

ならば、目をつけているのはそこに住まう神々なのだろう。

「面白れエ」

ベルは口角を吊り上げ笑う。

どんな事をするのか？

どんな手を打ってくるのか？

挑戦？闇討ち？それとも……。

どんな手を使って来てもいいと思う。

挑戦だろうと、なんであろうと。

自分はそれに受けて立てばいい事だ。

「あの……」

「ん？」

後ろから声がかかり振り向いた。

少女であった。

薄鈍色の髪と瞳をしたヒューマンの少女である。

ウェイトレスの格好をしている事から何処かの飲食店で働いているのであろう。

可愛らしい少女であった。

「これ、落としましたよ」

「ん？あれ……？」

少女から手渡されたのは魔石であった。

ふと、ベルは疑問に思い首をかしげる。

魔石は全て昨日換金したはずである。

「――まあ、うっかり忘れてたんだらうな）すいません、ありがとうございます
ございます」

胸中でそう納得し、少女に礼を言う。

「いえ、お気になさらないで下さい。ところでこんな朝早くからダン
ジョンに行かれるんですか？」

「そうですね、まだ収入が少ない方なので少しでも収入上げよう
と……」

――ぐう……。

言いかけて音が鳴った。

ベルの腹の音であった。

(あ、そういうや朝飯食べずに出たんだっけ?)

参ったなあ……。と胸中で呟くベル。そこへ、

「おなか空いてるんですか?」

「いやア、恥ずかしながら朝食を食べ忘れてまして……」

少女から声がかかり、苦笑いでそう返した。

暫く少女は考えるそぶりをした後、パタパタと踵を返してとある店の方へ走っていく。

『豊穰の女主人』

その店の看板にはそう書かれてあった。

「お待たせいたしました。これ、よかつたらどうぞ」

暫くして、少女が小さなバスケットを持ってきてそれをベルに渡した。

「いいんですか?これって貴方の朝食じゃ……」

「大丈夫です。私の場合は、お店で賄いが出るので問題ないですよ。それにこのまま貴方を見過ごせば私の良心が痛みますし……ダメですか?」

そう言つて、上目遣いで甘えたようにベルに言う少女。

たまらぬ少女であった。

ベルはそんな少女に困つたように苦笑いしつつ答える。

「分かりました。お言葉に甘えていただきますね。その代わりと言つちや何ですけどお礼にいつか貴方の働いてる店で御飯を食べに行きますから」

「本当ですか?ありがとうございます、私待ってますね」

「はい。あ、自己紹介がまだでしたね。僕はベル・クラネルと言います」

「ベルさんですか、私はシル・フローヴァです」

バスケットを受け取つたベルは少女、シルと自己紹介をかわし別れたのであった。

ダンジョンへと向かいながらバスケットを開ける。

中に入っていたのはサンドイッチであった

ハムサンド、サラダサンド、たまごサンドと言つた色とりどりのサ

ンドイツチである。

それを手に取り一口食べる。

―もにゆ・・・もにゆ・・・。

(~~~~ツッ! うんめエ~~~~ツ)

咀嚼しながら胸中で眩く。

そのまま、二口、三口とサンドイツチを口に運びあつという間に一つ平らげた。

そして、他のサンドにも手を出し、ダンジョンへ着く頃にはバスケットの中は空になっていた。

「もし、シルさんの所で食べにいくならちやんとお返ししとかないかね」

ベルはそう言つて、バスケットをバッグの中に入れるとダンジョンの中へ入つていった。

―暫くして・・・。

「ふう・・・、結構稼いだかなア」

換金したヴァリスがたつぷり詰まった袋を見ながら眩く。

外へ出ると日は傾き始めていた。

「よオ」

声が聞こえた。

鍛え込まれた体の男だ。

オロチ・克己である。

「克己さん、こんな所でどうしたの?」

「迎えに来たんだよ。今日だけ、約束の日」

「約束・・・? ああ、今日だったんですね」

克己の言葉に一瞬首をかしげるベルだったがすぐに思い出す。

ミノタウロスの一件にて、奢ってもらう日であったのだ。

「すいません、一回ホームに戻っていいですか? 今汗塗れですし、神様にも一言挨拶したいので」

「ああ、構わないぜ」

一度、ホームへ戻り着替えた後その店へ行くこととなったのであった。

—そして・・・、

「へえ、このお店がそうなのかい？」

「はい、そうです。料理も絶品ですし、それに面白い催し物もあるんですよ」

その行きつけの店の手前、ヘステイアの問いに克己は答える。

何故、ヘステイアも同行しているのか？理由は簡単である。

一旦ホームに帰り、ヘステイアも誘った当初はロキが居ると言う理由からか乗り気ではなかったが、奢りだと聞くや否や・・・。

「何だつていい！ただ飯にありつけるチャンスだツツ!!」

何とも現金な神様である。

（—あれ？ここって確か・・・）

話を現在に戻し、ベルはと言うとその店を見て内心驚いていた。

看板にはこう書かれてある。

『豊穰の女主人』

シルがベルに朝食を渡すために入った店であった。

「偶然つてあるもんだなア・・・」

ぼそりとそう呟いた。

ひよつとしたら、シルさんとも会うかもしれないな・・・。そう思いながら。

「とりあえず、中に入ろうか。皆もう来てるんだよ」

「そうですね」

「行こう行こう」

そういう事になった。

中に入る。

洒落た店であった。

様々な人が居ることから、ここは人気が高いと見える。

「おつ、来た来た。おーい、かつみんにベルたん待つとつた・・・で？」
声が出た。振り向くと人だかりの中から、手を振りながらロキが此方にやって来た。

そして、ふとヘステイアを見て固まる。

「何でドチビがここにおんのやアアアアアアアアアアツツ!!」

吼えた。

普段は閉じてるのかどうかも分からない糸目が大きく見開いていた。

「何でつて？決まってるじゃないか、ベル君居る所にボクありだよ」

「かつこつけて言うたつもりかボケエ！ウチはベルただけを呼んだんや！ワレなんざお呼びじゃないわい！つまみ出したるツツ!!!」

「やるかロキツツ!!!」

臨戦態勢。

両者は今にも飛び掛らんと身構えている。

それはまさに獲物に襲い掛からんとする肉食動物のそれであった。

「まあまあ、二人とも。あまり騒ぎ起こすとミアさんから怒られるぜ」

そんな状況に割って入って来たのは克己であった。

見やると、店主であろう太いドワーフの女性がヘスティアとロキを睨んでいた。

修羅の眼光であった。

そんな眼光で睨まれ、ヘスティアとロキは借りてきた猫のように大人しくなる。

「克己さんお待ちしておりました。そちらの方が……ってベルさん!」

「あはは、どうもシルさん」

そこへ、克己へと駆け寄る薄鈍色の髪と瞳をしたヒューマンの少女がベルの方を見やり驚いた。

シル・フローヴァであった。

「む？ベル君、この子とはどういう関係なんだい？」

「いやあく、ちよつと今朝朝食を食べ忘れてしまいました……その時、この人、シル・フローヴァさん々に朝食を貰ったんですよ」

問いかけるヘスティアにベルはちよつと恥ずかしげにその時の事を話しながらシルのことを説明した。

「ふくん、まあ大体分かった。だーけーど、ベル君」

「？」

ベルの説明を聞き、ヘスティアはベルにずっと顔を近づけこう言った。

「あまり、シル嬢が可愛いからって口説こうとするなよ？浮気、ダメ、絶対！」

「ちよっ!?何言ってるんですか神様ツツ!!僕とシルさんは今日、出会ったばかりですよ！確かにシルさんは可愛いですけど僕、口説く勇氣無いですよ……」

ずびし！と指を突きつけながら爆弾発言を言うヘステイアにベルはツツコミを入れた。

「か、可愛いってそんな……」

一方のシルは、ベルの可愛い発言に顔を真っ赤にして照れていた。「と、とりあえず早く行こうぜ。ロキ・ファミリアの皆を待たせてるし」

このままだとカオスな流れになってしまいそうなので、咳払いをしながら克己はそういった。

「あ、そうだった。克己君の言うとおり早く行こうぜベル君」

「それはそうですけど、何で僕の腕に抱きついてるんですか？」

克己の言葉に賛同しながらヘステイアはベルの腕に抱きつく。

そんなヘステイアにベルは困惑しながら問いかける。

「何となくだよ、何となく。キミだけだぜ、こういう事をするのは……」

そんなベルにヘステイアは何処となく恥ずかしそうに最後のところだけは小さく言った。

後編に続くツツ！！！！

Round 8 豊穰の女主人 後編

「すみません、フィンさん遅くなりました」

ロキ・ファミリアが予約していたであろう席へとやって来て克己はそう言った。

大手のファミリアである為かなりの人数である。

その中から一人の金髪の少年らしき人物が克己の下へ駆け寄る。

だが、一見少年のような外見であるが身にまとう空気が彼が少年ではない事を告げていた。

フィン・デIMUMナ。

ロキ・ファミリアの現団長を務めている パルウム 小人族である。

小人族は成人しても子供程度の容姿を持つているため本来の年齢は分かり辛いのが、実際の年齢は40代と結構な歳である。

「何、大丈夫さ。所で彼が君の言ってた・・・」

フィンは克己にそう言いかけベルの方を見やり、途端に驚いたような表情になった。

「君は、ひよつとしてベル・クラネル君かい？」

「お久しぶりです、フィンさん。入団試験の時以来ですね」

フィンの言葉にベルは懐かしそうにそう言った。

「ベル君、ロキの所に入団試験に行ったのかい？」

「ええ、見事に落ちちゃいましたけど・・・」

問いかけるヘスティアにベルは気恥ずかしそうにそう答えた。

その言葉にヘスティアは更に首を傾げながら言う。

「あれ？でも、ロキの所って体力テストだけじゃなかったっけ？ベル君の身体能力なら落ちることはまず無いと思うけど」

最もな疑問である。ベルの身体能力を考えれば体力テストで不合格はまずありえないと断言できる。

それなのに何故体力テストに落ちたのか・・・？

そんな疑問に、フィンは答えた。

「おっしゃるとおり、彼の身体能力は凄まじくどの競技でも新記録を立ててました。ですが、ある競技で予想外の事態が起こったんです

よ」

「予想外の事態？」

「棒高跳びで、棒が身体能力に耐え切れずに折れたんですよ。それで記録無し・・・失格になっちゃったんです」

フィンの後を継ぐようにベルが答えた。

棒高跳びの棒はちよつとやそつとじゃ折れないように設計されてある。

その棒を折ってしまったのだから、ベルの身体能力がどれほど凄まじいかが理解できる。

(逆に棒が折れてなければベル君はロキの所に居たって事だよなア・・・折れた棒に感謝せねば)

胸中で折れた棒に感謝をするヘステイア。

それもそうだ。試験のときに棒が折れていなかったらヘステイアとベルは出会うことは無かったのだから。

「そろそろ座ろうか。積もる話もいっぱいあるからね」

「それもそうですね」

フィンの言葉にベルも頷く。

全員が席に座るとロキが音頭を取り始めた。

「それじゃあ皆、遠征に無事帰ってきたことを祝って乾杯やー！」

「「「かんぱーい!!!」」」

カチンとグラスのかち合う音がした。

そして、弾かれるようにして飲み、喰らう。

ベルとヘステイアもまたそれは同じであった。

山盛りのパスタ。鶏肉の唐揚げ。魚の煮付け。カクテルにワイン。

エトセトラエトセトラ・・・。

それらを喰らい、飲む。

「くウ~~~~ツツ!! うんめエ~~~~ツツ!! 初めてここに来るけどいい所じゃないの」

「そう言っていただけで嬉しいです、ベルさん」

唐揚げを食べつつ、カクテルをあおり感想を述べるベルにシルは笑顔でそう言う。

そこにロキが上機嫌で割って入って来た。

「そりやそうや、なんたつてここはウチらのいきつけやからな。飯も旨いし可愛い女の子がいっぱいおるしなア、ウへへへへ」

そう言つてだらしない顔で笑うロキ。

そんなロキにベルとシルは苦笑いをし、ヘステイアは呆れた様子でキミらしいやと小声で呟いた。

「おうベル、おめえさんここで食べてたのか」

太い声が聞こえた。

声に振り向くとスキンヘッドの太い男と、金髪金眼の少女が居た。

オロチ・独歩とアイズ・O・ヴァレンシユタインであった。

「オロチ館長、それとアイズ・O・ヴァレンシユタインさん」

「アイズでいいよ、ベル」

「じゃあ、アイズさんつて呼ばせてもらいます。それでどうしたんです?」

「アイズにおめエの事を話したら、エラく興味持つてなア。おめエと話してエらしいのよ」

アイズの代わりに、独歩がベルの質問に答えた。

「話・・・ねエ。それでアイズさん、僕に話つていうのは?」

「どうしてキミはそんなに強くなれるの?」

「強く・・・とは?」

「お父さんから聞いた。キミは地下闘技場の無敗のチャンピオンで、恩恵を持つてる挑戦者とも戦つて勝つてるつて」

地下闘技場の事まで喋つたらしい。

独歩の方を見やると、別にいいじゃねえかと言わんばかりの笑みを浮かべていた。

「「つたく、ひつどいなアオロチ館長は・・・」

小さく呟く。

だが、別に隠しているつもりは無いので別に良いが・・・。

アイズの方に視線を向け、答える。

「僕がここまで強くなれたのは『夢』の為・・・ですかね?」

「夢・・・?」

「はい、『地上最強の英雄』になる。それが小さい頃からの夢です。その為に世界中の色んな所を周って様々な武術を学びました」

「それで、強くなれたんだ」

「だけど、僕なんてまだまだですよ。まだ届かない、『夢』にも『アイツ』にも・・・」

ベルはそう言つて、あの時の事を思い出した。

義父であるジェフが、『あの男』との立会いで敗れた時の記憶であった。

『あの男』を倒す。それもまた、地上最強の英雄を目指すベルの目標となっていた。

—ヤツを倒さなければ、『地上最強の男』なんて目指せない。

無意識に、ベルは拳を握り締めていた。

「むむむ・・・」

一方のヘスティアはと言うと、ベルとアイズが話しているのを見て苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

ぶつちやけ嫉妬である。

ヘスティアの周りの空間が彼女の発する神威によって、酷く歪んで見えた。

「おうドチビ、詰まらん事で高濃度の神威を出すのやめーや」

「つまらん事とは何だツツ！んんんん！許るさーん！！ヴァレン某め、ボクのベル君とイチャコラしやがってー！」

「まあまあ、落ち着いて」

どこぞの大人気格闘ゲームの悪のカリスマのような事を言いながら歯軋りするヘスティア。

そんなヘスティアを独歩と克己は宥める。

「ん？あいつは・・・」

ふと、独歩はベル達に近づいてくる男が居る事に気づいた。

「よオ」

唐突に声がした。

見やると、男が立っていた。

ボサボサの髪に、無精ひげの男である。

「あんだ誰です？」

「俺かい？俺はトウゴウってんだ」

「そのトウゴウさんが何の用ですか？」

「アンタ俺達が追いかけていたミノタウロスの一体をぶっ倒したんだってなア、レベル1・・・それも 単独^ソで」

トウゴウと呼ばれる男は人を小馬鹿した笑みを浮かべながら続ける。

「いい気なもんだなア、マグレでミノタウロスを倒して周りからチヤホヤされてよオ」

「トウゴウツツ！」

侮辱的なトウゴウの発言にフィンが一喝する。そんなフィンに、ベルは右手で制しながら答えた。

「大丈夫ですよ、フィンさん。たかが小物の戯言を気にしてたらキリがありませんよ」

「あ？」

—ビキツ。

さつきまで小馬鹿な笑みを浮かべていたトウゴウの顔に笑みが消え、額に青筋が浮かび上がる。

「テメエ今、何て言った？」

「聞こえなかった？人を見かけで判断するような小物って言ったんだよ、僕は」

「舐めてんのかよテメエ？」

ベルの言葉にトウゴウは怒りの籠った視線を向ける。

一触即発の空気であった。

ベルはちらりと、シルを見た。

シルは今にも泣き出しそうな表情で震えていた。

遠くでは店主であろう女性が『ここで暴れるな』と目で訴えている。『ここじゃあ店に迷惑がかかる、表に出ましようか』

ベルはそう言うと、店から出て行った。トウゴウもまたベルの後に続くように店から出ようとする。

「トウゴウ」

そんなトウゴウに声がかげられる。

振り向くと、オロチ・独歩が目の前にいた。

「館長、止めるんですかい？」

「いんや、ケンカするのはかまわねえ。だがな、神心会やロキ・ファミリアを背負つとる等と、大それた事は考えんていい」

「・・・おっしやつてる意味が分かりませんがね」

「立ち会ってみればわかる、ベル・クラネルは邪心を持って勝てる相手じゃねえって事がな。妙な功名心に囚われると頭ツから食われるぞ」

それだけ言うど踵を返し、店の店主の方へ向かう。どうやら表を騒がせてしまう事に対する謝罪をしに行ったのであろう。

「お、面白れエ・・・上等だぜー」

トウゴウはそう言つて店を出た。そして、悠然と立っているベルに向き直る。

「謝る気はなさそうだなア・・・」

そうトウゴウに言うベル。先ほどまでの歳相応の雰囲気は消え、凄まじいまでの闘気がベルの周りの空気をゆがめていた。

(~~~~~ツツ!!?)

トウゴウは、レベル3の冒険者であると同時に、神心会で初段を取るほどの実力者である。

ベルの獣のようなたまらぬ表情を見た瞬間、一瞬にして自らの細胞が見抜いた。

(——これが・・・ツ、レベル2に上がったばかりの餓鬼の気迫かよツツ!!?)

目の前の14歳ほどの少年が放つ尋常ならざるオーラ。

今まで闘ったモンスターや他派閥の冒険者とは全く異質な存在感。

それら全てが自分を上回っていた。

(まるで・・・団長や克己さんのような　ロキ・ファミリアの幹部の連中と立ち会つてみたいじゃねーかツツ!!)

絶望的な実力差であった。

「どうした？来ねえのかよ」

挑発するようなベルの声がトウゴウの闘争心に火をつけた。

そして叫ぶ。

「舐めんじゃねエツツ！こちとら、食う時も寝る時も排泄たれする時も空手の事を考えて生きてきたんだぜエ！テメエのような餓鬼とは年季が違うんだよオ!!!」

激情のままにベルへと向かう。

右足を跳ね上げ、体を回転させて蹴りを放つ。

後ろ回し蹴りだ。

一気に決めるつもりである。

だが、

「へッ」

「ツツ」

それは空を切った。

ベルがストレスでかわしたのである。

右足を地面につけて追撃しようとしたそのときであった。

「サニーパーンチツツ!!!」

ベルの叫びと共に、目の前に拳が迫っていた。

それがトウゴウの顔面にめり込む。

めちり。と鼻の軟骨がつぶれる音と、カリカリ。と歯が碎ける音と

共に、トウゴウは意識を手放していた。

決着である。

「相変わらずえげつねエなあ」

第三者の言葉に振り向くと、左の頬に刺青を入れた灰色の髪の毛の青年が立っていた。
ウエアウルフ

その青年をベルは知っている。

ベート・ローガ

レベル5のロキ・ファミリア所属の冒険者で、凶狼と呼ばれ恐れられていた男である。
ヴァナルガンド

また、神心会が主催する「リアルファイトトーナメント空手道選手権大会」で三連覇を達成した猛者でもある。

「お久しぶりです、ベートさん。その分だと随分鍛えられたようですね」

「まあな。1年前にテメエに不覚を取ってからは血のシヨンベンが出るほど自分を苛め抜いたからよ」

ベルとベートの会話の通り、二人は面識がある。

ベートは前述した「リアルファイトトーナメント空手道選手権大会」にて飛び入り参加したベルと決勝戦で闘ったのである。

死闘の末、勝利したのはベルであった。

そのリベンジをするため、ベートはこうしてベルに向かい合っているのである。

「どれだけ強くなったのか・・・は、話すと長くなりそうですね。だから、^{こっち}拳で聞かせてもらいますよ」

「ああ、その方が手っ取り早いしな」

「それじゃあ、始めましょうか」

「応」

獣のような笑みを浮かべてベートは構える。

「立ち合いを所望」

「願ってもないこと」

対するベルも獣のような笑みを浮かべて構えた。

「雄オオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!!」

互いに吼えて、動き出す。

両者が繰り出したのは、右のストレートであった。

それがぶつかり合った。

狼二人の戦いが始まる――。

続 く ツ ツ ！ ！ ！ ！

Round9 狼2人

打つ。

打つ。

ベル・クラネルとベート・ローガが打ち合っていた。どちらも一步も譲らない。

片やレベル2、片やレベル5。圧倒的なレベルの差に拘らずである。

「やっぱ凄いなア、二人ともあの時よりもキレが増してるよ」

その光景に胸が控えめなアマゾネスの少女が呟く。

ティオナ・ヒュリテ。ロキ・ファミリアの幹部の一人である。

「ほ、本当にあの人ってレベル2なんですか？本当はレベル5で、詐称してるだけなんじゃ・・・」

「いんや、それは無いでレフィーヤ」

エルフの少女、レベル3の冒険者レフィーヤ・ウイリデイスは驚きを隠せない。

それもそうだ、方やレベル2でもう片方はレベル5である。

それは例えて言うなら子供が大人に挑むようなものだ。

そんなレフィーヤの問いをロキが否定する。

「ベルたんはホンマにレベル2や。ドチビに勧誘されるまで何処のファミリアにも所属しとらんやった」

「で、でもそれじゃあ辻褄が合いません。レベル5のベートさんとあそこまで張り合えるなんて・・・」

「それが出来るのよ、彼は」

第三者の声に、レフィーヤは振り向く。そこにはティオナと同じアマゾネスの少女が立っていた。

唯一つティオナと違う所があるとすれば胸の大きさだろうか。

ティオネ・ヒュリテ。

ティオナの双子の姉であり、同じくロキ・ファミリアの幹部の一人である。

「前にも、彼が闘った所を見た事がある。昔、神心会が主催していた

『リアルファイトトーナメント空手道選手権大会』・・・そこで白帯で飛び入り参加したヤツつて言えばワカるかしら?」

「・・・ツツ!!?真逆彼が!?選手の中には恩恵を持つてる人が多く居たから、てつきり彼も恩恵を貰ってるものだと・・・」

「だけど、その時ベルたんは無所属やったんや。つまり、恩恵はもろてない。そして、決勝でベートにも勝つとる」

「~~~~~ツツ!!?」

ティオネとロキの口から出た衝撃発言にレフイーヤは絶句するしかなかった。

レベルとは一体何だったのか?

レフイーヤは自分の常識がひっくり返される思いであった。

「む、ベートが押してきているな」

「本当だぜ。拙いんじゃねえかベルのヤロウ」

その傍らフィンの言葉に独歩が頷きながらそう答えた。

独歩の言うとおり、じりじりとベートがベルを押しつつある。

(一腕を上げたなア、ベートさん)

ベートに押されながら、ベルは思った。

その程度なのか?

そんなもんじゃねえだろうお前の力は。

見せてみるよ、お前の底力を。

拳を打ち合うたびにそのベートの心が拳を通して伝わってくる。

「一舐めんじゃねえよ」

強烈な笑みを浮かべながら、ベルはそう呟いた。

それと共に頭から、正確には脳から何かが染み出してくる感覚がした。

それが、脳から全身へと広がっていく。

同時に、押され若干疲労がにじみ出していたベルの肉体が羽のように軽くなっていた。

エンドルフィン
脳内麻薬。

ベルのスキルであった。

「こっからが本番だぜ、ベートさんツツ!!」

そう言つて、右のストレートを打ち返した。
—ごしやつ。

「ぬううツツ!？」

それがベートの右頬にクリーンヒットする。
大きくのけぞつた。

「な・・・!?!ベートのラッシュを押し返した!？」

「それだけじゃねエ、ベートに一撃を入れやがった!」

予想外の展開にフィンと独歩は驚きを隠せない。

「がああっ!」

吼える。

吼えながらベートに拳を浴びせた。

ベートは受けに回る。

拳。

拳。

拳。

蹴。

それを崩すかのようにラッシュを浴びせた。

—ぐらり。

何発かラッシュを浴びせた後、ベートの体が揺らぐ。

—今だッ!

トドメの右ストレートを放つた。

だが、それはベートには当たらず空を切る。

（—空振り!?!違うこれは・・・）

ベルは自分の右腕を見た。

二の腕辺りにはベートの左手が添えられている。

（受け流したツツ!）

気づいた時にはベートは攻撃の態勢に移っていた。右拳を握り締
めている。

右ストレートを放つつもりだ。

（—来るツツ 右ストレート）

ベートが右ストレートを放つた。

ベルの胸目掛けてである。

（―回避 無理ッツ 直撃―）

―ごしやつ！

ベートの拳がベルの胸に突き刺さった。吹っ飛び、つんであった樽に突っ込む。

ベルは崩れたタルの下敷きになりそのまま動かなくなった。

―これで決まったか!?

ギャラリーの誰もがそう思っていた。

しかし、ベートの口から聞こえたのは意外な台詞であった。

「立ちな。テメエがアレを喰らって無事な位打った俺でもワカラア」

「いやアゝゝゝ何でもお見通しだなア。ベートさんは」

崩れたタルの中から声が聞こえると共に、樽が爆砕した。

そしてそこから気の波がベートに向かって走る。

「ぐうあつ!!?」

爆発。だが、ベートは咄嗟に両腕をクロスさせて防いでいた。

だが、無事ではない。ガードした両腕が気功の熱で赤くなっていた。

煙の中からベルが現れる。

「さっきのは効きました、ベートさん。咄嗟に気功で防御してなければよかったです」

「ピンピンしてる状態で言われても説得力ねえよ」

軽い足取りでそう言うベルにベートは不貞腐れながらそう言った。

「ところでさっきの技、にこりゆう二虎流の技でしたよね？僕の攻撃を受け流した奴と空手の正拳突きとは威力が違う右ストレートを見てピンと来ましたけど」

「知ってるのか？」

「ええ。二虎さんと一度手合わせした事がありますから。・・・結局、中断になっちゃいましたけど」

―二虎流

ベルが言っていた二虎こと『トキタ・二虎』が創設した武術である。身体などの力の操作を行う「操流ノ型」、歩法・走法が中心の「火天

ノ型」、肉体硬化と打撃技に特化した「金剛ノ型」、肉体軟化と関節技に特化した「水天ノ型」という大きく四つの系統と番外扱いの「無ノ型」に分かれ、さらに4系統の技には「極(キワミ)」という単に強力なだけでなくどのような状況でも最後まで使える奥の手がある。

二つの系統を複合した技も存在するほか、この四つの系統を極めて初めて習得可能になる「奥義」も存在するらしいが、これは後々語ろうと思う。

「そうかい。……ちえ、折角テメエの驚く顔を見れると思ったのによ」「実はちよつと驚いてるんですよね。確か、僕と立ち合ったのは1年前ですよね?」

「まあな。お前に負けた後、勝つには神心会の空手だけじゃあダメだと思つてよ。その時に二虎アイツに出会つて、教わつた」

ま、それよりも……。とベートはベルに挑発的な笑みを見せながら続けた。

「第2ラウンド、始めようぜ」

「そうですね」

再び互いに構える。

睨みあつたまま両者は動こうとしない。

1秒……2秒……。

3秒目でベルが動いた。

「パワーウェイブツツ!!!」

八極聖拳の気功で纏つた拳を地面に叩きつけ気の波をベートに向けて放つた。

「そう来ると、思つたぜ!」

ベートは飛び上がり、それをかわす。

そして、そのまま空中からベルに襲い掛かる。

「エエイヤーツツ!!!」

「うがッ!」

思いつきり逆さに飛び上がって、回転しながら真上に蹴りを捻り込む。

重力を無視したかのような余りにも奇妙な技にベートの反応が遅

れた。

そのまま顎へと突き刺さる。

ベートが地面に叩きつけられると同時に、ベルの体は重力を思い出したかのように着地した。

「ゲエーッ!?!何だあの技は!?!」

その光景を見た周りのギャラリーからは驚きの声上がる。

「ほオ、ライジンググタツクルかア」

「ライジンググタツクル?」

独歩が発した技の名前であろう単語に、克己は問いかける。

「ベートみてえに上空から襲ってくる奴に対して主に使う、所謂対空技ってやつだぜ」

「先ほどのパワーウェイブ。そしてそれを回避した事を想定しての放ったのか・・・」

ベル・クラネル。

なんとという男であろうか。

フィンは改めて、そう思った。

—ざわ・・・ざわ・・・。

「立ちやがったぞ」

「流石レベル5だ、なんとも無いぜ」

そう思っていると、ギャラリーがざわめきだした。ベートである。

ベートが起き上がっているのであった。

起き上がり、再び構えている。

「そう来なくっちゃ」

ベルはそう言ってニヤリと笑った。

ベートへと向かう。

拳を握り締め、ベートへと殴りかかった。

それをベートは受け流す。

ベートが蹴りを放った。

それをベルは掴み、関節技をかけようとする。

極められる前にベルを突き放す。

そのやりとりが目にも留まらぬ速さで行われていた。

「キャオラツッ！」

「ぬううツッ！」

「があッ！」

「ちいいいッツ!?!」

「かつ！かつ！」

凄まじい速さで、一般人やレベル1程度の冒険者では目で追うことは出来ない。

現れたと思えばまた、一瞬で消える。

聞こえるのは二人の餓狼の息遣いと、掛け声。そして時折発せられるうめき声であった。

—あの時の戦いはホント凄かったツスよ。

その時の様子をロキ・ファミリアのラウル・ノードはこう語る。

—よくマンガとかで早すぎて消えたように見える描写つてのがあるじゃないですか。

アレが現実に目の前で起こったんスよ。

2人とも時折立ち止まって打ち合っていましたけど、腕や足がね。消えた様に見えるんす。ぶつかり合う音だけが聞こえるんスよ。

自分もロキ・ファミリアに所属している手前、空手やって結構経つてるしレベルも4なんスけどね・・・、恥ずかしい話ホント凄まじい攻防で、目で追うのがやっとでした。

館長や幹部の皆は見えてるみたいでしたね、ハイ。

漫画みたいなハイレベルな攻防が何分か続いた時でした。館長が呟いたんスよ、

「拙いなア、こりゃ」

って。

何の事か分からなくて首をかしげたその時だったんですよ。

ガシャーン！って音がして何かが『豊穣の女主人』に突っ込んできたんです。

それを見た瞬間驚きました。

なんとたつてベートさんがぶっ飛ばされて、仰向けに倒れてたんです

からねえ。

「お、おいおいぶっ倒れてンじゃん凶狼ツツ！」

「スゲエぞあのボウズ！」

豊穰の女主人内部にて仰向けに倒れるベートを見て騒然とする客達。

「勝っちゃいましたよ、あの人・・・ベートさんに」

レフイーヤもまた、それを見て呆然としながら呟く。だが、彼らだけには違っていた。

「いや、まだまだよ。まだ、終わってない」

「え？それってどういう・・・」

「見ねい、レフイーヤ」

アイズの言葉に怪訝な表情を見せるレフイーヤに独歩が言う。

再び、ベートに視線を戻しアツ！と驚いた。

ベートが立ち上がった。

ふらふらになりながらもされど、目は死んでいなかった。

(ホント、大した男だよな。ベートさんは・・・)

立ち上がるベートを見てベルは胸中で呟く。

ベートは肩で息をしていた。

ベルも同様である。

だが、二人ともその表情は晴れ晴れとした、見る者を心を打つような清らしい表情をしていた。

—楽しいな、おい。

—と言う思い。

—もつと続けたいな、おい。

—と言う思い。

そんな感情が二人の表情から滲み出るようであった。だが、

—次で決着だからな。

そんな決意も感じられる、そのような雰囲気では二人は向かい合っていた。

向かい合ったままでもどちらも動こうとはしない。

時が経つにつれて二人の呼吸がゆつくりとしたものになっていく。静寂―。

シン・・・と静まり返る。物音も一つも無い。

ベルも、ベートももう肩で息をしていない。

静かに向かい合っている。

動けば終わる。

お互いそう考えているかのようであった。

そして、二人が同時に足を踏み出す。

「雄オオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!!」

吼えながら互いに向かい合い、拳を繰り出そうとして―。

「いい加減にしないかいツツ!!!」

野太い女主人の一喝がそれを止めた。

見やると、太いドワーフの女性が憤怒の表情で両者を見ていた。

ミア・グランド。豊穰の女主人の店主である。

「あんた等、喧嘩するのは構わないけど周りを良く見てみな! 店が滅茶苦茶じゃないかツツ!! どうしてくれるんだい!!?」

言われてみて、周りを見てみると豊穰の女主人の店内であった。

凄まじくめちゃくちゃになっていた。ベートが突き破ったであろう壁や窓。テーブルの破片が散乱している。

自分たちがやらかした事に、ベルとベートは顔が真っ青になっていた。

もはや、2人共戦いを継続する。なんて事は考えていなかった。

「す、すいませんでした!」

「謝るくらいなら早く片付けなツツ!!!」

ミアに謝罪をし、片付けと破壊した壁と窓の弁償を行う2人。

こうして、ベルとベートの戦いは有耶無耶な結果で終わったのであった。

続 く ツ ツ ! ! !

Round 10 嵐を呼ぶ男

「ふう・・・」

豊穰の女主人でのベートとの立ち合いから何日か後、ベルは元気にダンジョンに潜っていた。

とは言っても無傷ではなく顔のあちこちに絆創膏を貼ってはいるが・・・。

ちなみに、ダンジョンに行く際、エイナに驚かれ心配されたのは言うまでもない。

「しゅっ！」

『ゲゴツ!?!』

カエル型のモンスター『フロッグシユーター』の舌攻撃をかわし裏拳で沈める。

『ギシャアッ!』

「おっと」

影のような『ウォーシャドウ』が爪を振るいベルを襲うがそれを紙一重で回避する。

続けて攻撃を叩き込もうとした次の瞬間である。

「クラックシユートオツツ!!」

『くくくツツ!!?』

一瞬の隙について放った、軽く飛び上がって放つ空中踵落としがウォーシャドウの頭にある弱点の宝石に直撃する。

ウォーシャドウもまたフロッグシユーターと同じ運命をたどった。

「さて、と・・・6階層こゝのモンスターはあらかた戦ったかな」

魔石を回収しつつベルは呟く。

6階層のモンスターは『初心者殺し』と呼ばれるものが多く出没しており、1〜5階層に慣れてきた駆け出しの冒険者にとっては脅威である。

先ほど倒したウォーシャドウも初心者殺しのモンスターである。

ベルもここに来た当初は少し苦労はしたものの、今では軽くあしら

えるようになっていた。

「そろそろ、エイナさんに下層に行ける様に頼んでみようかな……。うくん、でも了承してくれるかなア……」

魔石をポーチに入れながら考え込むベル。

暫く考えた後……、

「まあ、イザとなつたらステータスを教えるかア。ステータスを見せれば納得すると思うし」

そうあつけられかんと答えダンジョンを後にするのであった。

——ところ変わって……。

カコン。と遠くの庭でししおどしが傾く音が聞こえる。

極東によくある和風の屋敷であった。

トクガワ・光成の屋敷である。

その一室で光成はキセルをふかしていた。誰かを待っているようである。

ふと、ふすまが開く。

「失礼します、御老公」

黒服の男である。光成の配下だ。

「ガオラン様がお出でになられました」

「オオ、そうか！すぐに通しなさい」

黒服の言葉に光成は目を輝かせながらそう言った。

一礼をした後、黒服は去った。

入れ違いに、褐色肌の男が入ってくる。

スーツ越しではあるが、鍛えられている肉体を持つ男であった。

「お久しぶりです、御老公」

「元気にしとったか、ガオラン」

会釈しながら光成に言う男……ガオランに、光成は満面の笑みで返した。

この男の名はガオラン・ウオンサワット。

『闘神』の二つ名を持つ冒険者であり、元ナックモエ（ムエタイの選手）であり現役プロボクサーである。

そして、彼もまた独歩同様に地下闘技場で戦ったことのある格闘士であった。

「それで、今回はどういったご用件で？」

「ウム、地下闘技場の件についてじゃ」

「チャンピオン・・・、ベル・クラネルの事についてですね？」

ガオランの言葉に、光成は左様。といいながら続ける。

「今度行うメインイベントにベルとヒガシ・丈・・・『ハリケーンアツパーのジョー』をぶつきたいとおもつとるんじゃないよ」

「ジョーを、ですか？」

「うむ、そうじゃ」

無邪気な笑顔で光成は答えた。

ヒガシ・丈。

名前から分かる通り、極東出身のムエタイ最年少王者である。

ムエタイに転向する前は、ボクシングをやっており少年ボクシング大会でも4連覇を成し遂げている。

その後、ムエタイへと転向。最年少で王者に上り詰めたのだ。

『ハリケーンアツパーのジョー』の異名の由来は彼のフィニッシュブロー、『ハリケーンアツパー』から来ている。

「お言葉ですが御老公、何故ジョーをベル・クラネルの対戦相手に？ジョーは確かにムエタイ王者ですが日が浅い、ベテランのムエタイ王者はいる筈ですが・・・」

「普通のムエタイ使いではベルの相手にはならんからのう。・・・それに、ジョーはおぬしが直々に指導をした弟子じゃ」

キセルの中にある吸殻を灰皿に落としながら続ける。

「ムエタイとボクシングを学び打撃を極めたお主の拳・・・それを受け継いだジョーならばベルといい試合をする。ワシはそう思ったんじゃないよ」

ジョーの強さの秘密。ムエタイとボクシング・・・、その二つを極めたガオランの拳。それを直々に教えられた事によるものであった。

現代ムエタイの弱点。それは、パンチを軽視する傾向である。それを克服する為、ボクシングに転向したのである。

ジョーは、ガオラン譲りのパンチ重視の戦い方で順調に勝ちを進め、そして最年少の王者となったのであった。

光成の言葉にガオランは暫く黙った後、口を開いた。

「そこまで知っていたとは・・・、流石はミスター・トクガワだ。わかりました、この話を受け入れましょう」

「オオ！受けてくれるんじゃない」

「ええ、丁度ジョーの奴も『ムエタイのリングじゃ燃えねえぜ！』と言っていましたから」

「そうかア。いやア、楽しみじゃあ。これは凄い試合になりそうじゃぞ」

楽しみでしようがないと言った風に光成はそう言った。

―そして、話は元に戻りベルはと言うと・・・。

「もつと下層に行きたいイイイ~~~~ツツ!?ダメに決まってるでしょツツ!!!レベル2になったと言っててもまだまだ駆け出しなんだから、ダンジョンを舐めてると本当に死んじゃうよツ！」

ギルドにて、エイナからお説教を受けていた。

理由はいわずとも分かるだろう。もつと下に行きたいとエイナに言ったからである。

(あく・・・、やっぱこうなっちゃったかア・・・)

エイナの説教を受けながら、ベルは胸中で呟いた。

下層に行ける様に頼もうと決めた時から覚悟はしていたが、真逆コレほどまでに凄まじいとは思っても見なかった。

顔を真っ赤にして凄まじい剣幕である。

口で説得を試みたものの、結果はご覧の通りだ。全く聞き入れて貰えない。

(―そういや、地下闘技場の試合の日って一週間後だったか。その日にエイナさんを連れてこよう、そこで実力を見せれば納得するはず・・・)

―ピリリリリ、ピリリリリ。

そう考えていた直後、電話が鳴る。

携帯を見ると『トクガワさん』と表示されていた。

光成からである。

「(トクガワさんから? ひよつとして、次の対戦相手の事かな?) あ、すいませんエイナさん。ちよつと席外しますね」

「え? ちよつとベル君、話はまだ・・・」

ベルはエイナに一言断ると、少し離れた位置に移動し通話する。

「どうしたんですか?」

『おお、ベルか。実はの・・・』

「次の試合の対戦相手の事ですか?」

『そうじゃ。良くワカったのオ』

電話越しに驚いたような光成の声である。

「何となくそんな気がしたんです。で、対戦相手は一体誰ですか?」

『聞いて驚け、今回お主が戦う相手はの・・・ヒガシ・丈じゃ』

「ひ、ヒガシ・丈つて・・・まさか『ハリケーンアッパーのジョー』ですかツツ!!」

思わず大きな声が出てしまった。

一斉に注目されたので、周りにすいませんと謝り再び光成と話す。

「それ、本当ですか?」

『ホントもホントじゃ。ひよつとして怖気づいたかの? ベルちゃん』

光成の言葉にまさか。と笑って返す。

「願ってもないことですよ。是非とも戦ってみたかった」

ベルはそう言って笑った。

餓狼の笑みである。

たまらぬ笑みであった。

『そうかそうか。ジョーを対戦相手にして良かったワイ』

「あ、そうだ。僕の方もお願いがあるんですけどいいですか?」

『なんじゃ?』

「エイナさんを地下闘技場に連れて行きたいと思うんですが、いいですかね?」

『エイナと言うと、おぬしのアドバイザーじゃったか? まあ、構わんが』

「そうですか、ありがとうございます」

『おう、そうか。試合、楽しみに待つとるぞ〜』

「はい」

通話を打ち切る。

そして、エイナの元に戻った。

「ベル君、誰から電話だったの?」

「アハハ、お世話になってるお爺さんからです。それよりもエイナさん」

エイナの問いに苦笑しながら答える。

そして、改めてエイナの目を見て言った。

「一週間後空いてますか?」

「空いてるけど、どうしたの、藪から棒に」

「エイナさんがある場所に連れて行こうと思います」

「ある場所?」

目を瞬かせ問うエイナにベルはそう告げる。

益々訳が分からなくなったエイナは頭に『?』を浮かべて首をかしげる。

「まあ、所謂おとぎの国みたいなものです」

そんなエイナに苦笑しながら、ベルは言う。

そして、真顔になって続けた。

「そこで、僕の強さを知っていただきたい。僕が下の層でも戦えるって事を」

「・・・ッ!」

いつになく真剣な表情で言うベルにエイナは言葉を失った。

却下しよう思ったが、ベルの決意の籠った真剣な眼差しを見てそれを改める。

「分かったわ。その『おとぎの国』と言う所に連れてってもらおうよ」
「ありがとうございます。僕が、『そこ』に連れて行くのはエイナさんがその事を口外しないと信頼してるからです。『そこ』はちよっと特殊ですから・・・」

信頼してる。それを聞いたエイナは少し顔を綻ばせると、すぐ真剣な表情となる。

「そこで見るものは誰にも他言しないって約束するよ。もしそれが明るみになるような事になれば、私はキミに絶対服従を誓う」

「ふ、服従ってそこまでしなくても・・・」

「それ相応の責任は取るって事だよ」

まあ、そんなこんなで試合当日エイナを連れて行くと言う事で話は纏まったのであった。

—オラリオの入り口にて・・・。

「ここが、オラリオか・・・」

男が立っていた。

奇抜な男であった。

逆立った髪に日の丸のハチマキをした日焼けした肌の男であった。

全身は黒いマントで覆われている。

「オツシャー！このヒガシ・丈様がこのオラリオにジョー伝説を打ち立ててやるぜツツ!!!」

両腕を上げて凄まじい声で吼える。

はだけたマントから鍛え上げられたたくましい肉体が露になった。

早い話がパンツ（ちなみにトランクスタイル）一丁である。

通報不可避な格好であった。

この男がヒガシ・丈。

ベルと戦う男である。

続 く ツ ツ ！ ！ ！

Round 11 邂逅、狼と嵐

「ふう……、今日も疲れたなあ……」

エイナは、ギルドの業務を終え帰路へとついていた。

日は沈んではいるが、魔石灯の灯が街を照らしている。

―早く帰って、シャワー浴びたいなあ。

そう思い、エイナは足を速める。

「おう、そこのエルフの嬢ちゃん！ちよつといいか!!!」

ふと、大きな声が聞こえてきた。

酒場から聞こえる冒険者の喧騒や、行きかう人々の声が掻き消されるほどの大声である。

余りのうるささに耳を塞ぎながらもエイナは声のした方を振り向いた。

男がいた。

逆立った髪に日の丸のハチマキをした日焼けした肌の極東特有の顔立ちをした男であった。

首から下はマントを羽織っておりパツと見怪しげに見える。

「何ですか？」

そんな怪しげな男にエイナは警戒しながら問いかけた。

全身をマントで覆ったその姿を見たら無理もない。

「安心してくれよ、俺は怪しいもんじゃねえ。ムエタイチャンプのヒガシ・丈ってんだ」

「ムエタイチャンプ……？ヒガシ・丈……？」

男、丈の言葉にエイナは眉を潜めた。

思い当たる節があったからだ。

（―確か、ベル君が電話で話してたときにそんな名前を叫んでいたよ
うな……）

「ん？どうかしたか？」

「いいえ、何でもないわ。それで、丈君は何しにここに？」

エイナの問いに丈はよくぞ聞いてくれました！とばかりに口を開いた。

「冒険者になるためにギルドに向かう所なんだよ。そして、そこで新たななるジョー伝説を打ち立ててやるのさッッ！」

「~~~~ッ！残念だけどギルドは閉まつてるわ。冒険者登録は明日になるわよ」

大きすぎる丈の言葉に耳を押さえながらエイナは答える。

「ま、マジかア！明日行くにしてもオラリオ（オラリオ）には来たばっかだから『アイツ』のホームとか何処にあるかわからねえしなア、それに宿に泊まれる金とかもないし……」

どうすつか……。と呟きながら、頭を搔く丈。

そんな丈を見て放っておけないと思ったエイナがこんな事を切り出した。

「あのさ、丈君。良かったら、私の家に泊まつてかない？」

「良いのか？」

「うん。もし、キミを放っておいたら目覚めが悪いから。それに、私ギルド職員だからね。明日のギルド案内も兼ねようと思って」

「本当か!?ならお言葉に甘えさせてもらうぜ。アンタ、名前は？」

「エイナ。エイナ・チュールよ、ヨロシクね」

そう言つて、丈に自己紹介をするエイナ。

そんなこんなで、丈はエイナの家にお世話になることになった。

—なお、これは余談ではあるが……。

「なん……だと……!?エイナさんが男と一緒に歩いている……!?!」

「アイエエエエ!?エイナ〓サンが男と一緒に!?男と一緒にナンデ!?」

「ウソダドンドコドーン！」

「ああああああああん　まあああああああり
だああああああああ!!!」

丈とエイナが一緒に歩いている姿を見たエイナに気のある男冒険者達はそう慟哭したとか……。

—翌日。

「おはようございます、エイナさん。……あれ、その人は？」

朝の鍛錬を済ませた後ダンジョンに潜る為に、朝早くから来ていたベルはエイナに挨拶をする。

ふと、冒険者登録をしていた丈を見て問いかけた。

「ああ、この人ね。新しく冒険者になることになったヒガシ・丈君よ。丈君、こちらは私が担当している冒険者のベル・クラネル君」

エイナはベルに丈を、丈にベルを紹介する。

丈とベルは互いに、見たまま動かなかった。

「へえ、アンタがベル・クラネルかい？」

「そう言う貴方は、ヒガシ・丈」

そう言っ、互いに笑みを浮かべていた。

そのまま動かない。

動かないのだが、二人の間にはまるで磁場があるかのように空間が歪んでいた。

「―スゲエ殺気。『ハリケーンアッパーのジョー』は伊達じゃないな・・・」

（―ガオランの言うとおりだぜ。地下闘技場のチャンピオンと呼ばれるだけはあらア）

互いの殺気を受けながら、ベルと丈は互いを観察する。

そして、確信する。

（こいつは・・・強いツツ!!）

そう思うと、思わず笑みがこぼれた。

たまらぬ笑みであった。

「ね、ねえ二人とも。どうしたの？」

「いえ、何でも」

「何でもねえよ」

ただならぬ雰囲気を感じたエイナの問いに、ベルと丈はそう答えた。

丈の冒険者登録が終わり、研修が始まる。

―そんなもって・・・。

「それじゃあ、気をつけてね二人とも」

「分かりました」

「オウ、行ってくるぜ！」

研修が終わり、初心者セットを受け取った丈はベルと共にダンジヨ

ンへ向かったのであった。

「ダンジョンの一階層……」

「オラオラア！」

凄まじい拳のラツシュでゴブリン達を地に沈めていく丈。

そんな丈にベルは賛辞の言葉を送った。

「丈さん、流石ですね」

「よく言うぜ、お前さんだつて結構強い癖に」

丈はそうベルへと返す。

「ガオランから聞いてるぜ、恩恵を持たずに地下闘技場に足を踏み入れてその不屈の精神でチャンピオンに上り詰めたんだつてな」

「今は、ヘスティア様から恩恵貰ってますけどね。そう言う貴方は恩恵は？」

「ガオランに弟子入りする時に『シヴァ様』から刻んでもらった。ダンジョンでの実戦経験はねえからレベル2止まりだけだな」

「そこまで言つて、あくあ！とつまらなさげに続ける。」

「しつかし、ここのモンスターは弱すぎるぜ！全く張り合いがありやしねえ」

「まあ、一階層ですから。でも、そんなにつまらないなら……僕と闘りますか？」

丈の言葉にベルは笑みを浮かべながら言う。

獣の笑みだ。

戦いに餓えた餓狼の笑みであった。

「へえ、いいのかい？俺達6日後に試合するんじゃないか？」

「まあ、そうですね。僕としてはいいですよ。たとえば、今ここで」

丈もまた、笑みを浮かべ問いかける。

餓狼の笑みで。

「ぐにゃあ……」

両者との間に再び歪みが発生した。

正しく一触即発である。

それが、1秒ごとに長く感じていく。

「ダッ！」

同時に動く。

拳を振りかぶるのも同時であった。

「シッ！」

「しゅっ！」

そして、同時に拳を振るう。

互いの拳は顔面には直撃せず、頬を掠っていた。

互いに拳を見切り回避していたのだ。

「お前もやるなあ、俺様の拳を見切った上でカウンターを放つんざ」

「そのカウンターを回避した丈さんに言われたくないですよ」

互いに笑みを浮かべながらそう言った。

そして離れる。

「で？どうする、まだやるか？」

「ええ。・・・と言いたい所ですけど、ここで終わりです」

「ほう」

「お客さんが来た様なので」

そう言つて、ちらりと見る。

周りにはゴブリンが所々に現れており、囲まれていた。

「あく、すごいやダンジョンこってモンスターを無限に産み出すんだっ

たな。忘れてた」

今更ながらに丈はそう言った。

そんな丈に苦笑いしながらベルは問いかける。

「んで、どうします？」

「分かってるくせに」

ベルの問いに丈は鼻で笑いながら答える。

「全員まとめて・・・」

「ぶっ飛ばすツツ!!」

たまらぬ笑みを浮かべて、嵐と狼はゴブリンの群れへと突っ込んでいった。

その後、ゴブリン達は全滅し魔石をがっほり稼げたのであった。

無論、その事で無茶をしたと思われエイナに怒られたのはいうまで

もない。

続
く
ツ
ツ
!
!
!

Round 12 神々の宴

―ベルと丈がダンジョンに潜っている最中。

ヘステイアはある所に来ていた。

いつもやっている『じゃが丸君』を売るバイトではない。神々のあ
る会合に参加する為である。

その証拠にいつもの服装ではなく、ドレス姿であった。

「ここで『神の宴』をやってるのか……。しっかし独特だよなあ、こ
こって」

オラリオにある大手ファミリアの一つ『ガネーシャ・ファミリア』の
ホームであるアイアム・ガネーシャである。

その建物を見てヘステイアは苦笑いしながら呟いた。
独特な建物である。

ガネーシャ・ファミリアの主神である巨大なガネーシャの像であっ
た。

それが胡坐を組んでいるポーズである。そして、その股間の部分が
入り口である。

たまたぬ建物であった。

そんなたまたぬアイアム・ガネーシャで『神の宴』が行われるので
ある。

「とりあえず中に入るかな」

そう呟き、アイアム・ガネーシャに入る。

中には様々な人……。否、神が参加していた。

「あ、ヘステイアちゃん久しぶり！」

その中にいる一人の女神がヘステイアに気づく。

濃い紫のロングヘアーにカチューシャをつけた女神である。

「やあ、アテナ。暫くだね」

その女神にヘステイアは親しげに話していた。

―アテナ。

天界では知神と呼ばれ、ヘステイアと共に三大処女神の一人として
名を馳せていた女神である。

下界に降りてからは、紆余曲折の末夢だったアイドル歌手となり、活動を続けている。

ヘステイアとは三大処女神と呼ばれていた時代から大の仲良しである。

「最近どうだい、アイドル活動は？夢だったんだろ」

「うん、順調だよ。ヘステイアちゃんは？」

「ボクかい？実は念願だったファミリアを立ち上げたんだ」

「そうなの？おめでとう！」

世間話に花を咲かせるヘステイアとアテナ。そこへ、

「よお、ドチビにアテナたん」

「相変わらずね、二人とも」

声が聞こえた。

振り向くと、ドレスを着たロキともう一人の女神がいた。

赤いショートヘアで右目に漆黒の眼帯をした女神であった。

「ヘファイストス！・・・それにロキ」

「二人もお久しぶり」

―ヘファイストス

『ヘファイストス・ファミリア』の主神であり、ヘステイアとアテナの神友でもある。

昔なじみの旧友と再会し、ヘステイアとアテナは破顔する。

「ヘステイアはともかく、貴方の活躍は聞いてるわよアテナ」

「ファイちゃんもありがとう」

「ちよ、ボクはともかくって何だい。ボクだってなあ、やっとなファミリアを立ち上げてるんだぜ？」

ヘファイストスの言葉に、アテナは嬉しそうに笑い、ヘステイアはむくれながらそう返した。

「そうそう、ドチビはなああの地下闘技場チャンピオンをファミリアに入れてるんやで？」

「チャンピオンって言うと、ベル・クラネルを？それ本当なの？」

「本当さ。・・・って、ベル君凄く人気だなあ。やっぱり地下闘技場のチャンピオンってそれほど知名度あるわけ？」

「まあね、でもそれだけじゃないのよ」

「それだけじゃない？　どういう意味だい？」

「へファイストスの言葉に首をかしげるヘステイア。そこへ、

「ふむ、楽しそうだな」

「ん？　その声はシヴァかい？」

声のした方を見やると、そこには褐色肌の男がいた。

黒髪のインドの民族衣装を着た小柄な男である。

—シヴァ。

大手ファミリアの一つであり、ガオランや丈が所属している『シヴァ・ファミリア』の主神である。

「久しいな、皆の衆。．．それにヘステイアにアテナよ、今宵もそなた達は美しい」

「あはは、ありがとうございます」

「褒めても何も出ないぜ。ところでシヴァは何でボクらのところに？」

シヴァの言葉に、アテナは苦笑いしヘステイアは半眼でそう返した。

そして、気になった事を聞いてみる。

「うむ、ちよつとした挨拶だよ。何でもベル・クラネルと我が側近、ガオランの弟子が地下闘技場で試合するそうじゃないか」

「弟子？」

「ハリケーンアッパーのジョーと呼ばれている男だな。ヒガシ・丈という極東の出身の我が眷属だ」

「ハリケーンアッパーのジョーって、キミの眷属だったのか。初めて知った」

シヴァの言葉に意外そうな表情でそう答えるヘステイア。

そこに、ロキの茶々が入る。

「ドチビ、ハリケーンアッパーのジョーの事、知つとるんねんな。意外やわ」

「こう見えても、バイトで色々と情報を仕入れてるからね」

えっへん。と豊富なバस्तを突き出して威張るヘステイア。

ぶるん。とたまらぬバストが揺れる。

しかも、ロキの目の前であった。

「おう、ウチの目の前でその無駄にでかい乳突き出すのやめー』ピリリリリリリ!』ん? なんや?」

恨みの籠った眼差しでヘスティアに抗議しようとした瞬間、電話が鳴り出した。携帯をポケットから取り出し見る。

『フィン・ディムナ』

画面にはそう表示されてあった。

「フィンから、何やねん一体……。もしもーし」

『ロキ、大変だ!』

通話ボタンを押し、通話を開始した。

慌てた様子のフィンの声が聞こえてくる。

「フィン、どないしたんねん?」

『ベートとアイズが御老公の屋敷に殴りこみに行った!』

単刀直入に伝えられた言葉に、ロキは一瞬間まり……。、

「はアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!!」?

アイアム・ガネーシヤ内に響くほどの絶叫を迸らせていた。

ー同時刻、トクガワ邸。

そこに入ろうとする二つの影があった。

二人とも頭にフードを被っており、正体を窺い知る事が出来ない。

その二人に気づいた門番がそれを止める。

「生まれ、ここはトクガワ・光成公の私有地だ。アポは取ってあるか?」

「あ?ンなもんねえよ」

「アポを取っていない者をここに入れるわけにはいかん。お引取りね……。ガツ!」

門番が言い終わる前にフードを被った二人組みのうち一人が頬を掴んで黙らせた。

「悪いな、そんな悠長な事は出来ないんでね。顎外されたくなけりやトクガワの爺さんに伝えな」

そう言つて、フードを外す。

「このベート・ローガとアイズ・O・ヴァレンシユタインが、アンタに会いに来たってよオ！」

フードの二人組みの正体はベートとアイズであった。アイズはと言うと無言でペコリ。と頭を下げていた。

Round 13 直談判

「表が騒がしいのう・・・」

トクガワ邸の自室にて光成はそうぼやいた。

一体何が起こってるのだろうか？

そう思った矢先である。

―ガラツ！

「も、申し上げます！屋敷が凶狼と拳姫に襲撃を受けましたツツ!!!」

必死の形相で、部屋の襖を開け黒服の男が入ってくる。

戦闘でもしたのか、服のいたるところがボロボロであった。

「もうすぐ、こちらにやって来ます！御老公、早くお逃げを・・・」

最後まで言う事はなく、背後から来た男の回し蹴りを即頭部に喰らい、昏倒する。

「襲撃とか人聞きが悪いぜ」

「でも・・・否定は出来ない。こっちに来るまで私達、結構人を倒してたから」

「先に襲ってきたのはアイツラだ。正当防衛って奴だろうが」

ベート・ローガとアイズ・O・ヴァレンシユティンであった。

服に少量ついている血（恐らく返り血だ）からして、襲撃をした下手人はこの二人であろう。

―何というか、こういうの懐かしいのウ。ベルと出会ったときもこんななんじゃったなア。

ふと、その二人を見て光成は初めてベルと出会ったときの事を思い出していた。

―トクガワさん・・・僕を、地下闘技場で闘わせてくださいツツ!!!

倒された黒服たちが転がる庭。そこで正座をして光成を待っていたベルは、そう涙ながらに光成にそう言った。

地下闘技場で闘いたい理由。夢であった『地上最強の英雄』を目指すのと同じ目的を知り、それに心を打たれた光成は、ベルの地下闘技場エントリーを快く承諾したのである。

そんな昔の事を思い出しながら光成は問いかける。

「して、お主ら。何のようじゃ?」

「地下闘技場」

光成の問いに、ベートは只一言だけそう言う。

「アンタ、地下闘技場つてのを経営してるんだよな? だったら、俺をここで闘わせる。勿論相手はベル・クラネルだ」

「(なるほど、ベルがお目当てか・・・) して、そちらのお嬢ちゃんも地下闘技場で闘いたいのかの?」

「・・・」

ベートを一瞥し、アイズに問いかける。

アイズは無言でこくりと頷いた。

そして、淡々と告げる。

「私は、強くなりたい。彼と同じように、同じ場所で闘ったら何か分かるかもしれないから・・・」

「ふうむ・・・」

アイズの言葉に、顎に手を当て考える。

暫く考えた後、光成は口を開いた。

「お主らの考えは分かった。地下闘技場のエントリーを認めよう」

「二本当(か)?」

身を乗り出すようにして聞く、アイズとベートにただし! と付け加え、続ける。

「今、ここでワシの前で証明してからじゃ。お主らが、地下闘技場で闘えるだけの力があるかどうかのう」

そう言つて、両手をパンパンと叩く。

同時に、二人の男が入つて来た。

片や、筋骨隆々の大男。片や、スーツ姿のひよろいイメージをした優男である。

「地下闘技場でファイターをやつとるコマダとカノウじゃ。この二人に勝てたらエントリーを認めよう」

そう言つて、光成はニヤリと笑う。

試すような笑みであった。

「そんなのでいいのか? だったら簡単だな」

「このガキ・・・、舐めた口叩きやがって。カノウ、このガキは俺にやらせろ」

ベートの言葉に、額に青筋を浮かべながら大男・・・コマダは優男、カノウにそう言った。

「いいでしょう。では、私は拳姫の方を戴きましょう」

カノウはそう言って、アイズに方に向き直った。

アイズはカノウを見据えて問うた。

「・・・貴方に勝てたら、地下闘技場にエントリーできるの？」

「ああ、そうだ。ただし、勝つことが出来たらな」

「・・・勝つ」

アイズが構える。

「フ、勝つ・・・か。大した自信だな拳姫」

そんなアイズを見て、不敵な笑みを浮かべるカノウ。

そして、構える。

光成の部屋が戦場となる。

部屋の主である光成は戦闘に巻き込まれぬよう離れた所から見物をしていた。

「だが・・・その戯言は、私の初弾をかわしてからにしたまえ」

「ツ!?私と同じ構え・・・!」

それを見たアイズは驚愕する。

カノウの取った構えはアイズと同じ構えであったからだ。

だが、すぐさまアイズはキツとカノウを睨みつけると駆け出した。

「シッ!」

右足がはねる。そのまま弧を描きカノウのボディへと向かい・・・、グン!

と思いきや高度が上がった。カノウの米神あたりである。

フェイントを織り交ぜた回し蹴りである。

入った。アイズはそう確信した。

―だが。

「ツッ!?!」

それを片手で受け止められる。

アイズはそれに驚愕するも、咄嗟に足をカノウから離し、距離を取る。

タイミングも完璧だった。なのに何故……。

そんなアイズの心情を見越してかカノウの嘲るような声が聞こえた。

「おやおや、まるで防御される事が信じられないような顔つきだねえ」「くっー！」

再び、地を駆けカノウに攻撃を仕掛ける。

拳。

蹴。

拳。

蹴。

拳。

拳。

蹴。

だが、そのどれもがカノウに避けられ、いなされ、防がれる。

(おかしい……)

ラッシュを繰り返しながらアイズは思った。

(これだけ攻撃しても、反撃してこない。……こんなの、初めて)

カノウ。得体の知れない、たまらぬ不気味さを持つ男であった。

一旦距離を取り構えを変える。

するとどうだろうか……、

「ツ!?また私の構えを!!？」

カノウもまたアイズと同じ構えを取っていた。

「こうして敵の構えを性格にまねるとね、出てくる攻撃も出ない攻撃も予測できるものさ」

不敵な笑みを浮かべ、カノウはアイズに言った。

「護身の真髄は防御にあり、完全な防御術さえ身に付ければ攻撃等単純な一撃で事足りる。例えば女性の平手打ちのようなものでも十分に効果を発揮する。特にキミのように自分の攻撃力に自信を失いかけてるようなお嬢さんには」

「・・・なら、これならどう？」【目覚めよ】」テンペスト

カノウの挑発に乗り、アイズは奥の手を使う。

—轟。

風が吹き荒れる。

『エアリエル』、アイズが使用する己が身に風を纏わせる魔法である。

そしてその風を右手に纏わせ、腰だめに構える。

—刹那。

どん！と空間がはぜた。

「リル・・・」

弾丸の如く、カノウへと突貫する。

「ラファールガッツ!!!」

そして、渾身の正拳突きをカノウに向けて放つ。

エアリエルを応用したアイズしか使用できない奥義『リル・ラファールガ』。さしもの、カノウもこれには対処できずに・・・否ッ！

「ふん！」

アイズの渾身の一撃を余裕の表情でかわしたのである。

そして、

「初弾ツツ!!!」

がら空きとなったアイズの頬へ拳をたたきつけた。

アイズが大きく揺らぎ膝を突いた。

—勝った。

そう思ったカノウ。だが、次の瞬間驚きの表情に変わる。

「どうして、続けて打ち込まなかったの？絶好のチャンスだったのに」
アイズは何事もなく立ち上がり、平然とそうカノウに言った。

「く、口が聞けるのか？あの一撃をまともに喰らって」

「あの一撃って・・・まだそれしか喰らってないんだけど。それに、まだ始まったばかりだよ」

そして、再びカノウにラツシュをしかける。

だが、それを防がれ体勢が崩れた直後に反撃を受けてしまう。

よろけるも、再びカノウにラツシュを仕掛ける。

が、結果は同じ。

仕掛け、防がれ、反撃をされる。

その繰り返しである。

だが、アイズはそれでも倒れていない。

それどころか、カノウの反撃を徐々に見切っていた。

カノウの一撃を避け、弾き、受けるようになっていた。

―何故だっ、何故こいつは私の初弾を一度ならず二度や三度も喰らっても倒れん!?!それに何故、見切られ避けられるのだ!?!

段々とカノウの顔にも焦りが浮かんできていた。

この鉄壁とも言える防御術はカノウが血の滲むほどの訓練と闘技場での死闘を得て会得したものである。

それを、地下闘技場のファイターでもない表の世界しか知らぬ一介の冒険者如きを倒すのに手間を取っている。

それが、カノウにとって屈辱でしかなかった。

更にアイズが無意識に放った一言がカノウの屈辱に拍車をかける。

「貴方って、本当に闘技場のファイターですか？」

「・・・何ッ!?!」

「確かに、防御の方は凄いと思いますけど・・・その分」

皆まで言わずカノウの拳がアイズに迫る。

アイズのボディ目掛けて拳は迫り―

「攻撃が単調すぎる」

時間が止まったかのごとく、アイズの左腕に受け止められていた。

そして突如、時間が動いていた頃の勢いを取り戻したかのように、

そのまま後方へカノウは頭から畳に捻りこまれていた。

一体何が起こったのか？

一体何をしたのか？

そんな考えがカノウの頭の中に浮かぶと共に、意識は暗転したのであった。

「勝負あり。いやア、見事なもんじゃのオ」

カノウが動かなくなつたのを見届け光成はそうアイズに言った。

『『当て身投げ』、久しぶりに見たわい。まるで『アリア』のようじゃ」

「!?」

―当て身投げ。

アイズがカノウに使用した技がそれである。

相手の攻撃を受け止め、そのまま返す刀で、地面に叩きつける技である。

古武術の技であった。

そして、三成が言った『アリア』と言う人物。

その人物が使っていた技である。

三成の口からアリアの名が出た瞬間、アイズの目が見開かれた。

アイズが三成に何かを問いかけようとしたその時である。

「これでいいのかい？爺さん」

声がして振り向くと、大して疲れた様子も見せないベートがいた。その彼の後ろでは顔を腫らしたコマダがぐったりと横たわっている。

ベートも勝ったようだ。

「うむ、二人とも合格じゃ。地下闘技場のファイターとしてエントリーを認めよう」

ベートの言葉に頷きながら、光成は答える。

「丁度、今お主らがのした二人が出るはずだった前座の試合。それがお主らのデビュー戦じゃ、楽しみにまっつとれよ」

「前座だあ？話が違うぞ爺、俺はベル・クラネルと戦いてえんだ！」

「戯け、そうホイホイチャンピオンと戦わせるわけなからう。それにベルは先客がおる、どーしても戦いたきや、勝ち続けイ」

光成の言葉に納得がいかないのか、ベートは詰め寄る。だが、光成にアツサリと論破されそのまま口論となったのであった。

―その後。

駆けつけた独歩とロキを始めとするロキファミリアが到着し、光成に謝罪。

ベートとアイズは涙目になったロキから延々と説教を食らわされたのであった。

―そして、一週間後。

ベルと丈。

二人の戦いが始まろうとしていた。

続
く
ッ
ッ
！
！
！

Round 14 集う狼達

—オラリオドーム地下6階

(確か、オラリオドームって地下二階までのはずなんだけど・・・)

エイナ・チユールはその廊下を歩きながらそう思った。

一体、何処へ向かうのだろうか？そう思いふと、目の前を歩いている少年ベル・クラネルに問いかける。

「ねえ、ベル君。一体何処へ向かってるの？」

「まあ、すぐにわかりますよ」

—そんな事言われても不安でしょうがないんだけど・・・。

ベルにそう言われ、胸中でツツコミを入れる。

「ここがそうだよ、アドバイザー君」

どの程度か歩いただろうか、突き当たりにある扉の前に来たときへスティアがそう言った。

そして、扉を開け放つ。

「えっ!?!ここは・・・」

エイナの視線の先にあったのは闘技場であった。

白虎、朱雀、玄武、青龍と書かれたリングが中央にある闘技場である。

一体ここはどこなのだろうか？そんなエイナの疑問を察するかの様にヘスティアが口を開いた。

「ここが、ベル君の強さの秘密だぜ！ここでボクと出会う前からベル君はずっと戦ってたのさ！」

「それって、一体・・・」

—ドオン！ドオン！

エイナの問いを遮るように、太鼓の音が鳴り響く。

それと同時にアナウンスが流れた。

『これより、第一試合を行います！青龍の方角ツツ！なんと、あの人喰いオロチの娘が地下闘技場に参戦だァー！『拳姫』ツツ！アイズ・ヴァレンシユタインツツ!!』

「えっ!?!」

アナウンスの言葉に、エイナは目を剥き驚く。

あのアイズ・ヴァレンシユタインが!?ここに来ているのか!?
そう思い、リングの方を見やる。

そこには、白い道着を身に纏ったアイズ本人がいた。

「うおおおおッ!拳姫だッッ!」

「すげえ!ご本人じゃん!」

「アイズたんッッ!俺だアッ!結婚してくれッッ!!」

途端に歓声上がる。

「ヴァレン某も地下闘技場に来てたなんてねえ・・・」

そんな声に、多少圧倒されながらもヘスティアはベルにそう言う。

「ええ、僕も驚いてます。でも・・・同時に楽しみなんですよ」

そう、ヘスティアに返しベルは笑みを浮かべながら続けた。

たまらぬ笑みであった。

『人喰いオロチの娘』、『拳姫』と呼ばれるその実力・・・どういった
ものか見てみたいですからね」

「べ、ベル君・・・?」

そのたまらぬ笑みに、エイナは困惑していた。

いつもは頼りなさそうなベルが今は餓えた狼のような笑みを浮か
べている。

エイナが見たことない表情であった。

そこへ、黒服の男が此方に近づいてくるのに気づいた。

一体なんだろう・・・。そう思っていると。

「チャンピオン、ここにおられましたか」

「チャ、チャンピオン!!」

黒服の男がベルにそう呼ぶのを見て更に驚く。

「ああ、準備ですか?分かりました。それじゃあ神様、エイナさん行っ
てきます」

「うん!頑張れよベル君」

そんなエイナを他所に、ベルはヘスティアにそう言うのと黒服の男と
一緒に何処かへと向かって行った。

「あ、あの神ヘスティア」

そう言つて、親指で後ろを指差し体を退かす。

そこに居たのは、トランクス一丁にハチマキをまいた男であつた。

「ジョーさん！」

「おいおい、ベルよう。浮気はいけねえぜ浮気は」

面白くなさそうにジョーはベルに詰め寄り、続ける。

「今回の相手は俺だろ？それなのに、この狼ヤロウと闘り合おうとすんだからよ」

「アハハハハ・・・、すみません」

「今回の闘い、満足させてくんなきや許さねエゼー！」

ベルは苦笑いしながら謝罪する。

そんなベルにジョーは、肩を軽くはたきながらそう言つた。

そこへ、

「ベートさん、ここに居たんだ」

「おう、アイズか。もう終わったのか？」

試合が終わつたのか、軽く汗を滲ませたアイズがやって来た。

「うん、私の勝ち。次はベートさんの番だよ」

「分かつた、それじゃあちやちやつと終わらせるかね」

そう言つて、ベートはアイズとハイタッチを交わすと部屋を出て行つた。

ベートを見送つた後、ベルはアイズに声をかける。

「初試合お疲れ様でした、アイズさん」

「ん」

こくり、と頷くアイズ。

ふと、ベルは気になつた事をアイズに問いかけた。

「何で、アイズさんも地下闘技場に？」

その問いに、アイズは暫く考えた後答える。

「強くなりたかつたから。キミと同じ場所で闘えば何か分かるかもしれないから・・・だからエントリーしたの」

それは一体どういう事なのか？それを聞こうと思ひ、ベルは口をつぐんだ。

何故ならばアイズの目を見たからだ。

その目をベルは知っていた。

自分も同じ目をしていたからだ。

何者かに愛しい人を奪われた目だったからだ。

復讐に燃える目であったからだ。

「だーかーらー、俺を差し置いて話してんじやねーっての!!!」

不意にジョーが怒鳴り声を上げてベルとアイズの話に割ってはい
る。

どうやら、蚊帳の外になっているのが気に食わなかったらしい。

「・・・誰?」

「し、知らないのかよ!?この『ハリケーンアッパーのジョー』を!」

アイズの一言に、肩をこけさせながら問いかける。

「知らない」

「う・・・まあ、まあね。知らねえ奴もそりやいるわな。極一部に・・・」

容赦なくバツサリと切り捨てられジトーツと恨めしい目つきでア

イズに言うのであった。

——一方その頃・・・。

「次は、ベートの試合じゃったかの?」

特等席にて、トクガワ・光成は側近にそう問いかける。

「は、相手は『理人』です」

「そうか、ふふふ・・・『超人』を相手にどう闘うかの?ベートは」

光成は不適な笑みを浮かべながらリングを見るのであった。

続 く ツ ツ ! ! !

Round15 切り裂き理人・前編

―ドオン！ドオン！

太鼓の音が鳴り響く。

野太い太鼓の音であった。

それを聞きながらベートは目を瞑り、深く深呼吸をした。それだけで、雑音は消え去り心が研ぎ澄まされていく。

―これが、ベルの奴が相手ならどんなにいい事か・・・。深呼吸しながらそんな事を考える。

相手は、理人と呼ばれる地下闘技場の選手である。

これは光成によって組まれた試合であった。

―ベルと戦いたければ勝ち続けい。

ベートは光成の言葉を思い出していた。

いいだろう。

だったら勝ち続けてやる。

そして、いつかベルと戦って勝つツツ！

目を開き、リングへと向かう。

『青龍の方角ツ！あの凶狼が地下闘技場に殴りこみだアツツ！ロキ・ファミリア、ベート・ローガツツ!!!』

―ワアアアアアアアアアツツ!!!

歓声を一斉に浴びながら、ベートはリングインした。

―その頃、観客席では。

「オツ？やってるねイ」

声が出た。

太い声であった。

ヘステイアとエイナがその声の方へ振り向くと、太いスキンヘッドの男と狐目の平坦（何処がって言うのは皆さんのご想像にお任せする）な女性がいた。

独歩とロキである。

「オロチさんに、神ロキ!?!」

「やあ、独歩君についてにロキじゃないか。ヴァレン某の試合はもう

終わっちゃったぜ」

大物の登場に目を丸くするエイナを他所にヘステイアは、2人にそう言った。

「あちやー．．．、アイズさんの試合終わってもうたかー。でもまあ、ベートの試合もあるしええか」

「ベートって言うのと、あの時『豊穡の女主人』でベル君と立ち会ったアイツかい？アイツも出るのか？」

残念そうに言うロキにヘステイアはそう言った。

ええ。と独歩がロキの代わりに答えた。

「ベートの奴もデビュー戦です。これに勝って一気にベルの所に上り詰めてやるって張り切っていましたよ」

「だけど、そう簡単に行くかしらね？」

独歩ともロキとも違う声が聞こえた。

反射的にヘステイア達、会話をしていた全員が声の方を振り向く。

そこには、右目を眼帯で覆った赤い髪の女性が立っていた。

「(神)ヘファイストス!？」

ヘファイストスであった。

エイナ、ヘステイアが異句同音に叫ぶ。

「ファイたんがここに居るって事は今回のベートの相手は『超人』って事かいな？」

「超人．．．？と言うと、あのヘファイストスファミリア期待のルーキー『リヒト・ザ・リッパ切り裂き理人』．．．ッ」

ロキの言葉に、独歩が反応する。

ええ。とヘファイストスが頷き、続けた。

「理人には『アレ』がある。いくら、かの凶狼とは言え分が悪いんじゃないかしら？」

「ベートだつてチャンピオンに勝つために血のシヨンベン流して頑張ってきたんや。超人相手に遅れはとらへんで」

ふふふふ。と静かに火花を散らすロキとヘファイストス。

その時である。

―ドオン！ドオン！

太鼓が鳴った。どうやらその理人と言う男がリングインするらしい。

『続きまして、白虎の方角ツツ！今宵もやってきたぜ、ヘファイストス・ファミリアのスーパールーキー！『超人』・理人の登場だアアアアツツ!!!』

「オツシャアツ！」

裂帛した気合と共に入って来たのはふてぶてしい表情を浮かべた短い金髪の男であった。

鍛え抜かれた肉体である、相対した者を根こそぎ喰らい尽くすようなそんな威圧感のある肉体だ。

たまたぬ肉体であった。

一方のエイナは・・・、

「私って夢でも見てるのかな・・・？」

余りに現実離れた光景に半ば放心状態に陥っていた。

―そして、視点を元に戻しリング。

「武器の使用以外全てを認めます！」

両者がにらみ合うなか、審判がルールの説明をしていた。

ベートは無表情、理人はふてぶてしい笑顔のままだ。

「へえ、アンタが俺の対戦相手かい？」

「おう、理人ってんだ。ま、本名は他にあるんだがそれはオフレコでヨ

ロシク♪」

ベートの問いにふてぶてしいまでの笑顔で男、理人は答えた。

「だけどもあ、アンタも運がねえな。俺に当たっちゃうなんてよ」

「ほう」

「俺は強いぜ。今のうちに脱退届け書いとけよ？下手すりゃ冒険者引退って事になっちゃうかもしれないねえからな」

理人は笑顔のまま、ベートに返す。ふてぶてしいまでの笑顔であった。

対する、ベートも笑顔であった。そして、そのまま理人に返す。

「そのセリフ、そのまま返すぜ。それに俺より強いだど？寝言ぬかしてんじゃねーぞ」

鬼のような笑顔でそう言った。
たまらぬ笑みであった。

「ぐにやあ……」

二人の殺気により、周りの空気が歪む。

「ハハッ、さすがは凶狼と呼ばれるだけあるな。いい試合になりそう
だぜ」

「両者、元の位置へ！」

理人がふてぶてしい笑顔を崩さず、そう言うと同時に審判が指示を
飛ばす。

離れる両者。

そして、同時に構えた。

ベートは、スタンダードな空手の構え。理人は腰を深く落としたレ
スリングの構えである。

「ドオン！」

「始めイッツ!!!」

太鼓がなった。

それでも、両者は動かない。

だが、始まっているのである。

それはまるで一太刀で勝負がつく剣豪同士の立ち合いであった。

「二人とも、あのまま動かない……。いや、動かないんじゃないか
けないのか」

観客席にてピクリともしないベートと理人を見ながらヘステイア
が言う。

「正解やドチビ。互いに隙をうかがつとるようやけど……。どっちが動
くんや？」

ヘステイアにそう返しながらロキがそう言った。その時である。

「今、動くようだぜい」

独歩がそう言ったと同時に両者が弾かれるように動き出した。

先に動いたのはベートであった。

「しゅっ！」

右ストレートを理人の顔面目掛けて放つ。

対する理人はそれを避けようとせずに突っ込んだ。

―めちっ。

当たり前のように右ストレートは顔面にめり込み、鼻の軟骨がつぶれる音がした。

「痛エな、コラ」

だが、怯むどころかふてぶてしい笑みを浮かべながら右の拳で殴りかかる。

それをガードする。

続けて左の拳。

スウエーで回避し、フックを放つ。

理人が防ぐ。

叩く、防ぐ、蹴る、避ける。打つ、避ける。

どちらも一歩も譲らぬ乱打戦であった。

暫く打ち合ううち試合が大きく変化した。

理人がベートに向けて廻し蹴りをしたときであった。

それをベートが飛び上がって回避し、そのまま廻し蹴りを放った。

それが顎に当たり、理人がよろける。

その隙を見逃さず顔面に膝蹴りを叩き込む。鼻血を噴出し、理人が

倒れた。

追い討ちをかけるように、マウントを取る。

そして、そのまま拳を叩き付けた。

叩いた。

叩いた。

叩きぬいた。

理人の顔面は血に塗れ、真っ赤に染まっていた。

目からは生気が抜けている。

「どうした？・終わっちまうぜ、このままだと」

ベートはそう理人に言いながら拳を振り下ろす。

刹那―。

―ざしゅっ！

音がした。

肉が切れる音であった。

同時に、ベートの右腕に痛みが走る。

理人から離れて腕を見やると、右腕に赤い線が5本ほど走っていた。

そこからとめどなく血が溢れている。

―何だア・・・!?

予想外な攻撃にベートは驚愕を隠せない。

そんなベートを尻目に、目から生気を取り戻した理人が立ち上がり不敵な笑みを浮かべていた。

「ド突き合いじゃあ負けるけどよ、削りあいなら負ける気がしねえ。散々ド突いてくれた礼だ、ズタズタに切り刻んでやらア!」

そう言つて、ベートに向かって右腕を振るう。

ベートは傷を負っていない左腕で防いだ。

―ざしゅ!

また、音がした。

ベートは左腕を見やる。

そこにもまた赤い線が5本ほど走っていた。

鮮血が迸る。

「出たア! レイザーズ・エッジだツツ!」

「ヒヤヒヤさせやがるぜ、理人のヤロウ!」

「いけすかねえ凶狼の鼻っ面をへし折つてやれツツ!!」

観客席にて、歓声上がる。

熱狂的な歓声であった。

そんな中、ヘスティアとエイナが驚きの声を上げる。

「なんだ、あれ!？」

「指に風か斬撃の魔法を付与エンチャントしているの?」

そんなエイナの疑問をヘファイストスは一蹴する。

「違うわ、理人に魔法の才など無いもの」

「えっ!? じゃあ、何であんなふうになつてるんですか!？」

ヘファイストスの言葉にエイナは声を上げた。

そんなエイナに、ヘファイストスは静かに告げた。
「簡単なことよ、アレはね……ただの単純な『指先だけの力』で凶狼の肉を削ぎ落としたのよ」

—人間の握力は大きく3つに分類される。

一つは握りつぶす力、『クラツシユ力』

一つは物を保持する力、『ホールド力』

そして、指先の力、『ピンチ力』である。

ベートと対峙している理人、彼のピンチ力は人の領域を大きく超えている。

身一つでロッククライミングすることなど、彼にとっては散歩するようなものである。

まさに、超人である。

そんな超人的な力を攻撃に使用したら、どうなるか？

想像に難しくない。

彼の指先が触れた部位は急所となる。

肉と言わず、骨と言わず悉く削がれてしまうのだから。

正に剃刀の如し。

「それが理人の力。彼はこれを『^{レイザース・エツジ}こそぎ落とす十指』と言ってるわ」
「~~~~~ツツ!!」

ヘファイストスの説明に、ヘステイアとエイナは驚きのあまり声が出なかった。

その傍らで独歩は険しい表情でベートを見ていた。

「さて、どう出るベートよう」

そう、静かに呟いたのであった。

—カミソリを制する策はあるのか……ツツ!?

続 く ツ ツ ! ! !

Round 16 切り裂き理人・後編

理人のレイザーズ・エッジがベートに迫る。

それをベートは紙一重でかわすが、掠った程度でも肉が、皮膚がそぎ落とされ、血が噴出していた。

「ちいっ！」

ベートは舌打ちしながら、理人に向かう。

「調子にのんじゃ・・・ねエッツ!!」

右足を跳ね上げた。

狙いは、理人の米神。

理人は右手で防ごうとするも、そのガードごと蹴りぬいた。

横に吹っ飛ぶ理人。・・・だが、

「・・・とんでもねえ蹴りだなオイ。右手を挟まなきや終わってたぜ、だけど・・・」

理人はふてぶてしい笑みを浮かべ起き上がる。

「終わったのはお前だ」

ベートの右足はレイザーズ・エッジによって切り裂かれていた。

理人、何と言う男であろうか。

正に、武装した獣である。

付け入る隙など全く無い。

「辛うじて、臆だけは守ってるが・・・頑張るねえ『人間』」

「『人間』だあ？何だそりゃ？」

ふてぶてしい笑みと共に発せられた理人の言葉にベートは眉を潜める。

まるで、自分が人間ではないと言ってるみたいだ。

「お前が思ってる通りだよ。俺は『人間』じゃねえ」

そんなベートの心情を知ってか、理人は口を開いた。

「俺のピンチ力は生まれつき、天性の才能なんだ。分かるか？スタート時点から既にお前らとは『領域』が違うんだよ！」

—このピンチ力を持つてすれば、捻る・千切る・抉るは思いのまま。やろうと思えばミスリル鋼の鎧なんかも断ち切ることもたやすい。

「・・・一郎。俺の本名はナカタ・一郎って言うんだよ」

「一郎ねえ、いい名前じゃねえか。何で一郎が理人になっちまってんだ？」

理人の言葉に、ベートは問いかける。

「よく聞いてくれたな。ま、はつきり言つて単純な理由なんだけどよ、漫画やアニメのヒーローって本名名乗らねえだろ？代わりにヒーローネームを名乗ってよオ、カッキーよな・・・餓鬼の頃から憧れてたんだよ」

だから、と理人はふてぶてしい笑みを一層深め、続ける。

「超人たる俺もヒーローネームを名乗る事にしたんだよ。『理人』ってな？『人の理』を超えた俺が『理人』と名乗るんだ。中々シャレが効いてるだろ？」

―時同じくして、観客席。

「なんつーか、子供っぽいねえ・・・」

呆れた様子でヘステイアは呟いた。ヘファイストスも半ば納得しているのか苦笑いする。

「まあ、理人・・・一郎が単純でバカなのは認めるわ。・・・だけど、實力は本物よ。格闘士としても、冒険者としてもね。ロキ、どうするの？このままじゃ凶狼の勝ち目は薄いけど」

そう言つて、ロキに問う。

「ふふん、それはどうやらかなあ？」

「？」

ロキは余裕の笑みを持って、ヘファイストスに言う。

訳が分からずヘファイストスは眉を潜めた。

「ま、見とき。面白いモンが見れるで」

そんなヘファイストスにロキは笑いながらそう言った。

「ふふん」

「何がおかしい？」

再びリングに視点は戻る。鼻を鳴らして笑うベートに理人は笑みを潜め表情を険しくする。

「笑わせんじゃねえよ。『超人』だ？お前如きが凌駕できるほど『人間』

は甘くねエゼ」

「よく言うぜ、俺のレイザーズ・エツジに手も足も出なかつたくせに」
理人の反論に、ああ、それな。と体中についた血を払いながら続ける。

「攻略法なら見つかったぜ？実を言うと、技の仕組みに気づくと同時に思いついていたが・・・ひよつとしたらまだ奥の手があると思って警戒してたんだ。・・・だけど、これで全部みてえだな。・・・期待はずれだよ」

呆気にとられる理人にベートは歩み寄った。

ダメージを一切感じさせないような流れで・・・、そしてそのまま理人に肉薄する。

「分かってんのか？ここは俺の間合いだぜ？」

「そりやあどうかな？」

互いにふてぶてしい笑みを浮かべながらにらみ合う。

互いにたまらぬ笑みであった。

「それじゃあ・・・望みどおりにしてやるぜツツ!!」

動いたのは理人であった。

棒立ちのままのベートにレイザーズ・エツジを振るう。

ベートはかわそうともせず、ただそれを見ていた。

――ニヤリ。

そして笑う。

次の瞬間――

「「エツツツツ!!」」

会場全体が驚きに包まれた。

「やっと出したか、ベートの奴め。何時出すかとヒヤヒヤしてたわい」
VIP席で、光成は満足そうに笑う。

「ま、これでヴァンシユタインに続いて及第点じゃ」

「な・・・」

リング内、理人は驚愕していた。つい先ほどまで勝利を信じて疑わなかつたのだ。

だが、

―切れて・・・ねえツツ!

ベートに放った右手のレイザーズ・エッジがベートの左手で止められていたのだ。

全く切れてはいない。

「逆転の発想だよ」

「・・・何?」

何がなんだか分からない理人にベートは言う。

「お前のピンチ力大したもんだ」

―引きちぎるだけならピンチ力で十分であるが隙が大きすぎて実戦では使えない。

最小限の動作で切り裂く場合は「指の力」と「加速する為の距離」が必要である。

これが、レイザーズ・エッジの仕組みである。

ベートはそれに気づくと同時に、弱点も知った。・・・つまり、「裏を返せば、距離を殺しちまえばお前は豆腐も切り裂けねえつてことさ」

「舐めんなツ!まだ左が空いてんだよ!」

理人は負けじと、左でレイザーズ・エッジを放つ。だが、

「よつと」

ベートが右手で手の甲を押さえる。右手は全く切れてはいない。

そのまま、解説を続ける。

「こんな風に手の甲を押さえるのも有効だ。要は、指先に触れなきや問題は無い」

さて、と付け加えながら悔しそうに顔をゆがめる理人にベートは言う。

「自慢の超人パワーは防がれちゃったぜ?どうするよ、人間『ナカタ・

一郎』君?」

「はっ、いやいや・・・お前こそ分かってんのか?この状況」

ベートの言葉に、理人は再びふてぶてしい笑みを浮かべ、言う。

「この近間じゃあ、お前の動きだって制限されんだろ?格闘技術ならお前が上だけだよオ、筋力なら俺のほうが上だぜ?」

そう言つて、全身に力を込めベートを押しした。

「力比べで俺に勝てるわけがねえツツ!!!」

理人に押され、ベートが後ずさる。

―楽勝!このまま押し切る!

更に力を込め、ベートを押しそうとして……、
体勢を崩した。

―え?

理人は訳も分からずほうけた表情になる。

―なんで俺、体制を崩し―

―めしつ。

左頬に衝撃が走る。

ベートの右の蹴りが入つたのだ。

「当たり。結構効くだろ?近間での打撃。それと、反撃はしないのか?
?左手がフリーになつてるぜ?」

「な、舐めんなコラアツツ!」

フリーになつた左手で反撃する。勿論、レイザーズ・エッジだ。だが、それは空を切つた。

―ま、まただ。まさか……、意図的に乱された!?

―ごぎやつ!

ベートの右アッパーが理人の顎を跳ね上げた。

一方の観客席。

数々の格闘士たちの死闘を見届けてきたベテランの観客達は当惑
していた。

攻撃を仕掛けたはずの理人がいつのまにかベートに攻撃をされて
いる。

そんな光景に。

「な、何がどうなつてるの……これ……?」

エイナはそんな観客達の心の声を代弁するかのように呟いていた。

「これ、ベル君との戦いのおきに使ってたな……」

「ベートのヤロウ、すげえもん身に付けやがつてよう」

「な?凄いやろ、ベートは」

「・・・ツツ!?!」

事態に気づいているのはヘステイアたちのような神、独歩のような格闘士といったごく一部の観客のみである。

当事者^{理人}を除いては。

た。

った。

だった。

이었다。

だ이었다。

うだ이었다。

ほうだ이었다。

れほうだ이었다。

られほうだ이었다。

やられほうだ이었다。

俺は、ベートの奴にやられ放題だった。

僅か数ミリ、僅か数グラム。それだけなのに・・・、それだけの

ずなのにツツ!

ベートの奴は俺の攻撃を見計らって、ほんの数グラム、数ミリ位加重して俺の力の流れをずらしている。

その結果・・・、力の流れは暴走する。

—ぐしやつ。

嗚呼、また叩きつけられた。

認めたくないが、この男・・・ベート・ローガは力の潮流を完全に指揮下に置いているツツ!

人間業じゃねえツツ!

「ワカったかい? 理人」

薄れいく意識の中、奴の声が聞こえる。

「これが理の外の技だ」

—ぐしやつ。

何かがつぶれる音と共に衝撃が走り、俺の意識は完全にシャットダウンした。

「勝負ありッッ!!」

顔を踏み抜かれ、動かなくなった理人を見て、審判が告げる。

—う、ウオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ!!

それと同時に歓声が上がった。

そんな観客達に、ベートは片腕だけ上げると何も言わずリングを去っていった。

—そして、控え室にて。

「へエ、勝ったんだベートさん」

「はい、圧勝でしたよ。理人の猛攻を全く寄せ付けなかったみたいで」
ウオーミングアップをしながら、ベルはスタッフの男に声をかける。

「ふふん」

スタッフの男の言葉に、ベルは嬉しそうに笑った。

早く、ベートさんと戦いたいッッ!

そんな狼のような笑みである。

たまらぬ笑みであった。

「つと、いけないいけない。まだ、ジョーさんの試合があるんだ。それに集中しないと」

そう言って、両手で頬を叩く。

そして、気を引き締め、控え室のドアに手をかける。

「それじゃあ行って来るよ」

「ぐ」武運をチャンピオン」

そう短く言葉を交わし、部屋を出たのであった。

続 く ッ ッ ! ! !

Round17〜ハリケーンアッパーのジョー〜

「よオ」

リングへと向かう最中、声が聞こえた。
正面である。

つい先ほど、試合を終えたベートであった。

「ベートさん、試合お疲れ様でした」

ベルは笑みを浮かべながら言う。

「これで一步だ」

同じくベートも笑みを浮かべながら答えた。

互いに一瞬のうちに鬼の形相となるようなそんな笑いである。

たまらぬ笑いであった。

そんな笑みのままベートは続ける。

「このまま勝ち続けて、お前がいるところまで駆け上がってやる。だからよ……」

そして一呼吸置いて続ける。

「負けんじゃねえぞ？チャンピオンのままでいろ。俺がお前を倒すその時までな、言いたいのはそれだけだ」

そう言つて、ベートは去っていった。

狼のようなたまらぬ笑みを浮かべていた。

「……上等」

ベルもまた、たまらぬ笑みを浮かべながらリングへと向かっていった。

『今宵もまた、どんな試合を見せてくれるのかア！チャンピオン、ベル・クラネルの入場だアーツツ!!!』

―ワアアアアアアアアアアアアツツ!!!

歓声上がる。それに応じてベルも、拳を高くあげ声援に応じた。

『対しましては、闘神の弟子がこの地下闘技場に殴りこみツツ！ハリケーンアッパーのジョーこと、ヒガシ・丈だアーツツ!!!』

「オツシャアツツ!!!」

アナウンスと共に、ジョーがリングに躍り出る。

—ふふん。

それを見たベルは口角がっぴあがっていた。モンスターの介入により中止となったダンジョンでの立ち合い。その続きがここで出来るのだ。

—知りたい。

ジョーの実力を、今ここで。

がりがり、と理性の鎖をベルの中の獣が噛み千切ろうとする。

(まだまだ、落ち着け)

まだ、始まりの太鼓がなっていない。解き放つのは太鼓がなつてからだ。そう胸中で呟き、獣を押さえつける。

「武器の使用以外の全てを認めますッ！」

審判がルールの説明をしている。そんな中、ジョーと目があった。

—にいい。

とジョーが笑う。これから楽しもうぜ。と言う笑みだ。

ああ、勿論だとも。最高の夜にしよう。そう思い、ベルも笑みを浮かべた。

「へへっ」

「ふふん」

互いにたまらぬ笑みであった。

言葉は要らない。今はただ、比べあおう。君と俺僕お前の全てを。

「両者元の位置へ！」

互いに離れる。そして、端につくと同時に振り向いて構えた。ベルはいつものスタンダードな構え、ジョーはムエタイの構えである。

—みりっ。

構えている最中、互いの獣が理性の鎖を千切ろうともがいている。

—みりっみりっ

段々と、もがきが激しくなる。

—みりりっ

終いには鎖が千切れそうになって行き……、

「はじめいッッ!!」

—ぶちん!

審判の言葉で完全に切れた。

「雄オオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!!」

それと同時に、2匹の餓狼が吼えた。吼えて、互いに向かっていく。同時であった。

ベルは右の拳を、ジョーは右の蹴りを互いに放つ。

当たったのは同時であった。ジョーの蹴りはベルの左わき腹に、ベルの拳はジョーの左頬に当たる。

「ぬうっ!」

「ちいっ!」

互いに舌打ちをし、距離を取る。ベルの行動は早かった。

「パワーウェイブツツ!!!」

気を右拳に纏わせ、地面を殴る。気の波が発生し、ジョーに向かっていく。

だが、ジョーは回避の行動を取らず、右拳を腰だめに構えた。そして・・・、

「ハリケーンアッパーツツ!!」

思いつきり上空へ振りぬいた。

「ゴウツ!」

それと同時に突風が巻き上がり、パワーウェイブを打ち消した。

「ツツ!」

「これが・・・。」

パワーウェイブを打ち消され、ベルの動きが止まる。その隙をジョーは見逃さない。

「スラッシュキックツツ!!!」

「これがツツ!!!」

大気を切り裂かんほどに放たれた前蹴りがベルに迫る。

それを紙一重で防ぐも、威力は凄まじい。数歩ほど後退してしま

う。

「オラオラア!!!」

「これがツツ!ハリケーンアッパーのジョーかツツ!!!
追い討ちをかけるように、拳のラッシュを繰り出す。」

ベルは未だ防戦一方だ。

なんという格闘センスだろうか。

ベルは舌を巻かざるを得ない。

「キャオラア!!!」

だが、ただでやられるベルではない。

右のハイキック。

ガードをされるが、それでも構わずに思いっきり振りぬく。

「~~~~ツツ!!ガードしても重てえなお前の蹴り!」

そう言いながら、ジョーは拳を振るう。

それをいなし、左フックをジョーの顔面に叩きつける。

よろめいた。

よし、もう一発だ。

そう思い、右の拳を握る。

「だけどツツ!俺も、負けてねえ!爆裂拳ツツ!!!」

瞬間。

—ぞくり。

ベルの背に悪寒が走った。

同時に、ぱあん!と空気が破裂する音がした。

「・・・ツツ! (何だ今の・・・! 咄嗟にガードしてなければ終わって
いたツツ!)」

ベルは吹っ飛ばされているものの健在。ジョーの攻撃をガードしていた。

「俺の爆裂拳を喰らって立ってるたあ、やるじゃねえか!」

ジョーはムエタイの構えをとりながらそう言った。

背に悪寒を感じた瞬間、ベルは見た。ジョーの放った拳が5つにいや、それ以上に見えていたのである。

(一秒のウチに何発もパンチを叩き込む、これが爆裂拳・・・)

ヒガシ・丈。なんと言う男であろうか。

さすがは、『闘神』に弟子入りしただけある。

「ふふん」

ふと、笑みがこぼれた。

嬉しいのだ。

こんな強い奴と闘えることが。
比べあえる事がたまらなく嬉しいのだ。

「へへへっ」

ジョーも笑っていた。

ベルはそれを見てジョーも同じ気持ちなんだな。と思った。
強い奴と戦うのが楽しい。

殴り合えるのが嬉しい。

二人はそんな笑みをしていた。

たまらぬ笑みであった。

「オラリオに來た甲斐があつたもんだぜ」

「？」

唐突に、ジョーが口を開いた。

「ムエタイのリングの試合もいいけどよ。あそこじゃあ、俺に敵う奴
なんざ一人もいなくなっちゃまった。だけど、ここなら・・・」

笑みを一層と深め続ける。

「お前みたいな強い奴と闘える。ホント最高だぜ、ここはよオツ！
もっと楽しもうぜエッツ！ベルツツ!!!」

ジョーが吼える。

そんなジョーを見て、ベルはふふんと笑った。

「勿論」

そう言つて、ジョーへと向かつていった。

さあ、続けよう。

男同士の比べ合いを。

続 く ツ ツ ！ ！ ！

Round 18「またやろうぜ！」

「トウラー！」

ベルの拳がジョーの頬に突き刺さる。

「ぐっ・・・オラアツツ！」

よろけながらも、ジョーはベルのわき腹を目掛けて左でミドルキックを放った。

「ぐぬう！」

ベルはそれをガードするが、そんな事などお構い無しにジョーは振りぬいた。

吹っ飛ぶも、ベルは受身を取る。

「ハハッ！楽しいなあ、ベルよオツツ!!」

ジョーはそう叫びながら、ベルへと向かっていく。

そして、拳をぶつけ合う。

—そういや、こんなに楽しいケンカをしたのは何年ぶりだろうか？
ベルとの激しい拳の応酬を繰り広げながら、ジョーはそう思っていた。

ジョーこと、ヒガシ・丈は極東の都市『大阪』の医者の子三男坊として生まれた。

裕福な家庭ではあるが、上の兄達のように明晰な頭脳を両親から受け継いではいなかった。

怠ったのか、それとも生まれつきなのか。

とにかく、同じように育てられた同じ血を分けた兄弟たちの中で彼だけが異端であったのは間違いない。

それゆえに、ジョーは周囲から『落ちこぼれ』の烙印を押され、蔑みの眼で見られていた。

本来なら守るべき立場であるはずの両親や兄弟でさえも、そんな眼でジョーを見ていた。

左利きであることすらも、蔑みの対象とされていた。

そんな視線の中で彼は育っていき、自然と捻くれた性格となった。

ギラギラと野犬のように眼を滾らせ、誰彼構わずケンカを吹っかけ

ては、殴って、殴られ、殴り倒して、常に満たされない思いを拳にぶつけていた。

それによって家族からの蔑みの視線は深いものとなっていく。

それでも、ジョーは闘うことをやめなかった。

この拳しかなかったからだ。

闘う事しか生きることが出来なかったからだ。

そんなジョーに理解を示していたのは彼と同じくヒガシ家で才を持たなかった祖母であった。

才を持たぬ代わりに明るく温かい心を持っていた。

彼女がいなければ今のジョーの性格は無かつただろう。

ジョーの才がケンカであるのなら彼女は豪快に笑って受け止めていた。対してジョーも、彼女の前では歳相応の子供となっていた。

しかし、両親との確執は成長することに強くなっていった。

彼の勉強の不出来は年々明確に露呈し、そして育ち続ける成長期の腕力は、何人もの怪我人を生んだ。

両親との口論の末、ついに彼は家を出る。

ヒガシ・丈、13才の時の出来事である。

当然、泊まる場所も食べ物を買う金も無い。当ても無く彷徨い続け、空腹が限界に達し食糧を奪うべく通行人を襲い、返り討ちにあった。

その通行人は神の恩恵を授かった『冒険者』だったのだ。

「ふむ、チンピラにしてはパンチは中々いい。磨けば光る逸材やもしれんな」

その冒険者の男は打ちのめされ倒れ伏したジョーを見下ろしながら、そう評価した。

「小僧、名をなんと言う？」

「ジ、ジョー……。ヒガシ・丈……。だ……。」

男の問いに、晴れ上がった口をモゴモゴさせ、ジョーは名乗る。それを聞いた、男はジョーか。と呟いた後、こう言った。

「俺はガオラン、ガオラン・ウオンサワツトだ。ジョー、ボクシングをやってみる気はないか？」

これが、ジョーの師であるガオラン・ウオンサワットとの出会いである。

ガオランの申し出に、ジョーは二つ返事で承諾した。

そして、なし崩し的にジョーはガオランが所属しているボクシングジムのジム生となる。

試合で闘って、勝てば蔑みではなく、歓声を受けられる。

いや、負けたって、引き分けだって、魂の底から燃えられる。ジョーにはそれが楽しくて仕方が無かった。

リングの上には、全てを削られ、失っていくことを理解しながらも、それでも拳を振るうしかなかった恨みのケンカとはまるで違った高揚感があった。

ヒガシ・丈にはそれが全てだった。燃えるケンカが、彼の全てだった。

やがて小さな大会から、やや大きな大会まで彼が立て続けに制すると、周囲や家族の目も変わっていった。

何を今更と以前の彼ならば思ったかも知れないが、今の彼はそれが純粹に嬉しかった。

祖母もそれを、とても喜んでくれた。

ジョーの最大の武器は、かつていたたまれないケンカで磨き、ガオランとボクシングに出会って、やっと黄金の輝きを手にした、左のアッパーだった。

蔑まれた左の拳が、今の彼の宝だった。

試合で彼の左が放たれる度に、仲間や後輩達の期待の歓声が上がった。

人の痛みの解る彼は、友達や仲間には他の誰よりも優しかった。

ジョーはもう今までのようなケンカはしなかった。

苛立ちをぶつけるだけの闘いは、その場の渴きは潤うかも知れないが、その代償に全てを失ってしまうことを、彼は痛烈に理解していた。

だが、ある少年との出会いをきっかけにジョーはボクシングを辞め、師と同じ冒険者になる事を決意する。

そのガオランとは違うファミリアの眷属である少年の変則的な蹴

りで失神した彼は、少年をライバルと定め勝つためにシヴァ・ファミリアへと入り、ガオランから本格的にムエタイを学ぶ。

その最中、ジョーは迷宮都市オラリオの存在を知る。多くの腕自慢が夢とロマンを求め集う町。

そこに行けば、『アイツ』とも出会えるかもしれない。

そんなジョーに、ガオランは条件を出した。それは、『ムエタイでチャンピオンになる事』

その条件を、ジョーは快く受けた。

すべてはあの少年に勝つために。

そしてジョーは、ムエタイの王者となり更なる強敵を求め、オラリオへと向かうことになる。

—ジョーさん、楽しそうだな。

ジョーの拳打をいなしながら、ベルは思う。

足をふらつかせながらも楽しそうに笑みを浮かべながら拳を、蹴りを放つジョー。

それはベルには眩しく見えた。

「ハリケエエエエエエエ、アツパアアアアアアアアアアアアツツ!!」

ジョーの左の拳から風が巻き起こる。

パワーウェイブにも劣らない衝撃波が、地面を擦りながらベルを吹き飛ばす。

「~~~~~ツツ!!?」

—痛……。

体中にナイフで切られたかのような傷をこさえながら、ベルは立ち上がる。

—やつぱり、闘う事が純粋に好きなんだな。

楽しそうに笑みを浮かべるジョーはまるで宝石のように輝いて見えた。

自分などその光に掻き消されてしまうほどに、ジョーは眩しかった。

「オオオオオオアアアアアアアアアアアアアツツ!!」

咆哮を上げ、地面を蹴った。

右の拳に気が集まり輝く。ジョーが放つ光に負けぬ輝きであった。

「バアアアアアアアン、ナツクルツツ!!!」

輝く拳がジョーの顔を打ち抜いた。

ジョーの体が大きく仰け反る。だが、ジョーの目は死んでいない。

仰け反りながらも、確りとベルを見ていた。

「ツツラアー」

返す刀で、ジョーが左フックを放つ。

それをベルは右腕でガードした。

そしてそのままインファイトで殴りあう。

拳が、蹴りがベルとジョーの間で飛び交う。

その光景に、観客達は歓声を上げた。

「ジョーさん」

ベルはジョーとインファイトで殴りあいながら胸中で呟く。

「アンタ凄いよ」。

ベルの右アッパーとジョーの左ストレート。

拳が互いの顔に迫る。

同時であった。

「だからこそ、負けられない。勝つのは」

「勝てエエエエエエエツツ！ベルくウウウウウんツツ!!!」

「僕だ!!!」

ヘスティアの声援とベルの決意が拳のスピードを速める。

そして、交錯。

先に拳が入ったのは、ベルであった。

ベルのアッパーがジョーの顎を打ち抜いていた。

「ぐらり」。

ジョーの体が揺らぎ、どう。と大の字になって倒れた。

そして、そのまま動かない。

「勝負ありイッツ!!!」

それを確認し、審判が声を上げる。

激戦を制したのはベル・クラネルであった。

「ツツ！オオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!!」
歓声の中m地下闘技場に餓えた狼の勝利の雄たけびが響き渡って
いた。

—30分後

「・・・ここは？」

ジョーが目を開けると見知らぬ天井であった。

「おお、目が覚めたかのオ」

自分の顔を覗くように、医者がジョーをみながらそう言った。
起き上がり、周りを見てみる。

医務室であった。

「目が覚めたか、ジョー」

「・・・ガオラン」

ドアを開け、ガオランが入ってくる。

「俺、負けちまったんだな？」

しずかにジョーはガオランにそう問いかける。

「・・・ああ」

頷く。

そうか。とジョーは短く言うと、俯いた。

しばらく、沈黙が辺りを支配する。

「かア~~~~ツツ！負けちまったかア、悔しいなア！」

大きな声が沈黙を打ち破る。

ジョーであった。

ジョーは大きな声で、顔を上げ、あつけらかんと笑いながらそう
言った。

負けたとしても、悔しがりはずれど『仕方ない』と割り切り、次へ
と切り替える。

それが彼の性格であった。

そんな彼を知っているガオランは、お前らしいな。といわんばかり
に苦笑いをする。

「あ、そういやさ。ベルの奴はまだ闘技場にいるのかい？」

「チャンピオンなら、お前が目を覚ます3分前に治療終えて出て行ったぞい」

ジョーの問いかけに、医者はそう答えた。

それを聞き、分かった。と答えるとジョーは立ち上がる。

「つてことはまだこの闘技場を出てないつて事だよなこうしちやいらねえ！ちよつくら行つてくる！」

「これこれ、まだ安静に・・・」

医者 of 制止も聞かず、ジョーは勢いよく医務室を飛び出した。

そんなジョーを見て、ガオランは苦笑交じりに微笑む。

「やはり、お前をオラリオに呼んだのは間違いじゃなかったな」

そう笑みを浮かべながら呟いたのであった。

—控え室

「ここに居たか、ベル！」

「ジョーさん、どうしました？」

ベルはもう普段着に着替えており、今から控え室を出ようとしていた。

治療は終わっているものの、顔中に絆創膏などが張られていた。

「酷い顔だな」

「ジョーさんだつて」

互いに絆創膏だらけの顔で笑いあう。

「いい勝負だったな」

「ええ、下手したら僕が負けてたかもしれません。・・・でも、いい勝負でした」

「なあ、ベルよう」

ジョーは飛びつきりの笑顔を浮かべこう言った。

「またやろうぜ！」

そしてそのまま続ける。

「また、この闘技場でやろうぜ、とびつきりのケンカをよ。だから・・・、負けんじやねえぞ誰にも。勝ち続けろよ」

「ええ、勿論ですジョーさん」

ベルもまた飛びつきりの笑顔でジョーに返したのであった。

―バベル最上階

「ああ、イイわ・・・たまらない」

うっとりとして、鏡に映された映像でベルの試合の一部始終を見ていたフレイヤはそう声を漏らした。

切なげに、情欲に塗れた吐息をほう・・・と吐くその姿は恋する乙女のものであった。

彼女がベルを見たのはほんの偶然であった。

偶然、ベルを目にした時、彼女はベルの魂に心を奪われたのである。

「そう言えば、もうすぐ『怪物祭』が始まるのよね・・・」

そう呟き、何か思いついたのかにやり。と妖しげな笑みを浮かべる。

「ふふ・・・、いい事思いついちゃった。善は急げと言うし・・・トールに相談でもしてみようかしら？」

そう言って、おもむろに携帯を取り出す。そしてちらりと鏡に映るベルの姿を見た。

「ベル・・・、もつと魅せて頂戴。アナタの輝きを・・・」

妖しげな笑みを浮かべ、そう言うトールに電話をかけたのであった・・・。

つづくツツ！！！！

Round 19 女神のお誘い

ジョーとの試合から1週間が経った。

あの試合を見たエイナは啞然としていたものの、ベルの強さを認め更に下層に行く事を許可した。

そして、ベルはその下層へと潜り、モンスターと戦い魔石を稼ぐ。今日もまた……。

「ふっ！はっ！チエリヤアツ!!!」

拳、蹴り、バーンナツクル！それらがベルを取り囲んでいたモンスター『キラアアント』を砕き、蹴りちぎり、貫く。

それでも、キラアアントは怯まずに数にモノを言わせてベルに襲い掛かってきた。だが、

「パワーウェイブ・アラウンド！」

ベルはそれをものともせず拳を地面に叩き付けた。その時である。

ードワオツ！

衝撃波が吹き上がり、キラアアントを吹き飛ばした。甲殻の硬さと数の暴力で襲ってくることから『新米殺し』として恐れられているキラアアントではあるが、ベルにとってはこれ位など朝飯前であった。

そして、もう一人キラアアントを蹴散らしている男が一人。

「オラオラオラァ！何匹でもかかってきやがれ！」

ジョー・東である。

群がるキラアアントを拳で、蹴りで、踵で、膝で、肘で、粉碎する。嵐の如き連撃であった。

「ベルよォ！お前、今何体ぶっ倒した?！」

疲れなど微塵も見せない様子で、キラアアントにハリケーンアツパーを放ちながらジョーはベルに聞く。

「僕は、今ので45匹ですかね」

近寄ってきたキラアアントの頭をクラックシュートで蹴り潰しながらジョーに返すベル。こちらもちちらで疲れを微塵も感じていないようである。

「俺は44体だ！1体差だったかア、惜しいなあ……だけど……」
ちらりと、暗がりの方を見やる。そこには押し寄せるほどのキラア
アントがこちらに向かって歩いてきていた。

「まだまだ、お客さんはタンマリいるようだなア……」
「ですね……」

だったらどうするか？狼達の答えは決まっていた。

獰猛な笑みを浮かべ、構えた。

たまらぬ笑みであった。

「全員纏めて……」

「ぶっ倒すツツ!!」

—それから数時間後……。

「くっそー、今日も引き分けかあ……」

「ですね……」

死屍累々となったキラアアント達から魔石を回収しながらジョー
とベルは嘆息する。

こうして、顔を合わせてはモンスターをどれほど多く倒せるか勝負
するのが彼らの日課となっていた。

だが、何度やっても引き分けに終わってしまうのである。

そして今日も、引き分けであった。

「よお、今日も励んでるなあ！チャンピオン」

そんなベルの背後から声がかけられる。

振り向くと、男がいた。

太い、岩のような身体の男であった。

トロールやミノタウロスを絞め殺せそうな太い腕だ。

オリハルコンの鎧を蹴り潰せそうな太い足だ。

そんな巨体の男である

堪らぬ男であった。

その男を見て、ベルは顔を輝かせながら言う。

「セキさん！珍しいね、ダンジョンに来るなんて」

「今日は、興業は休みでなア！若エモン達の手伝いでここに来てんだ」

男は体格通りの野太い声で、笑いながらベルに答えた。

男の背後には、彼と負けず劣らずに太い体格の男達がソードスタツグや、シルバーバツク、オークと言ったモンスターの入った檻を荷車に乗せて運んでいた。

「もうすぐ『怪物祭』だからよ。ちとばかり凶暴だったが、まあ何とかなったぜ」

「怪物祭かあ、もうそんな時期なんですなあ……」

男の言葉に、ベルは感慨深げにそう呟いた。

―怪物祭

オラリオのビッグイベントの一つである。

ガネーシャファミリアの主神である『ガネーシャ』が主催するお祭りでは、モンスターの調教と彼が社長を勤める『ガネーシャプロレス』によるプロレス興行がメインイベントである。

今回は、特別ゲストとしてトールファミリアが主神『トール』が社長を務めている『アズガルドプロレス』の面々とスペシャルマッチをするとの事である。

「なあ、ベル。このオッサン誰だよ？」

男を見ながらジョーはベルに問いかける。そんなジョーに、おいおい。と男が口を開いた。

「このセキバヤシ・準様を知らねえたア、お前テレビ見てねえのか？」

「テメエこそ、俺をしらねえのかよ？俺は嵐を呼ぶ男、ムエタイチャンピオン『ジョー・東』様だぜエー！」

「……何だソリヤ？つーか、ムエタイなんてテレビ中継やってねえだろ」

胸を張りドヤ顔で言うジョーに男は尤もらしいツツコミを入れる。

仰向けにつんのめりながら踏ん張り、ジョーはジト目でこう言った。

「まあ、そりやそうだけだよ。……そういや、今思い出したけどセキバヤシ・準、といやあ『獄天使』って二つ名で知られてるプロレスラーの冒険者だったっけ？」

―セキバヤシ・準

ガネーシャファミアリア所属の冒険者で、『ガネーシャプロレス』の看板レスラーである。

デスマッチから本格プロレスまで何でもこなすエースレスラーで、悪役めいた風貌とは裏腹に社交的で明るい性格からか、人気がありファンが多い。

冒険者としてのレベルは5で、オラリオに住む冒険者としても5本の指に入るほどの実力者である。

「何だ、知ってんじゃねえか俺の事を」

「とは言っても、小耳に挟んだ程度だけだな」

準の言葉にジョーは肩をすくめながら答えた。

「何でも、オラリオで5本指に入る実力者って聞いているが・・・、成る程。確かにその通りだな・・・」

「ふふん、そうかい」

ジョーの言葉に準は鼻を鳴らし答える。

そんな準を見ながら、ジョーは彼の発する闘気に微かに冷汗を流す。

「強え・・・」

セキバヤシ・準を見てジョーは胸中で呟いた。

ジョーの目が、肌が、鼻が、耳が準の強さを見抜いていた。

仮に自分が立ち合いを仕掛けて行っても、勝てるヴィジョンが思い浮かばない。

準は、そんな男であった。

「ボウズ、どうした？震えてるぜ？」

「は。嬉しくってよ、こんな強い奴がいるって喜びでな」

挑発するような準の言葉に、ジョーは獰猛に笑みを返す。

牙をむく狼のような笑みであった。

そんなジョーを見て準はかんらんかと笑った。

「ガハハハハ！面白い小僧だな！だからこそ潰し甲斐があるぜ」

準もまた、ニヤリと獰猛に笑った。

一瞬で鬼の顔に変わるような笑みである。

「ぐにゃあ・・・」

ジョーと準の闘気により、2人の間の空気が歪む。
一触即発である。

「はい、ストップ」

その空気は第三者の介入によつて霧散する。

ベルであつた。

何故止めた。

そう言いたげにベルを見るジョーと準。そんな2人にベルは、悪びれずにこう言った。

「僕としてはお2人がここでおっぱじめても構わないんですけどね。だけど、準さんは怪物祭でメインイベントを務めるんでしょう？」

やるんだつたら、怪物祭が終わつてからでもいいんじゃないですか？」

「まあ、チャンピオンの言うことにも一理あるな」

準はそう言つて肩をすくめる。

「ケンカでの傷はプロレスラーにとつちやあ怪我じゃあねえんだが、ウチの所じゃあうるせえヤツもいる。

その所為でそいつがギヤアギヤ騒いで、メインイベントがパアになつたら楽しみにしてたお客さんにも申し訳ねえしな」

そう言つと、ジョーに方へ顔をむけ続けた。

「運が良かったな、ボウズ。お前さんとの勝負は怪物祭が終わつた後だ、地下闘技場でやり合おうや」

「アンタも地下闘技場で闘つてたのかよ」

成る程、道理で強い筈だ。

ジョーは内心納得しながら準に言った。

「オウ！チャンピオンともやり合つた事があるぜエ、良い線行つてたけどギリで負けちまつた」

かんらんかんと笑い、準は自分の仲間の所へと戻つていく。

「じゃあ、俺はここいらでお暇するわ。トクガワの爺さんにヨロシクな」

そう手を振りながらセキバヤシ・準は去つていった。

「僕らも帰りましょうか」

「そうだな、帰ろう」

ベル達もそう言う事になった。

―そして、ヘステイア・ファミリアの本拠地の教会。

「へえ、キミあの『獄天使』と知り合いだったんだねえ……。しかも、地下闘技場で闘ったんだって？」

「ええ、強い人でした」

教会へと帰って来たベルはヘステイアに事の詳細を話していた。

最近では、大抵の事では驚かなくなつたヘステイアであつたが、まさかあの有名プロレスラーである『獄天使』セキバヤシ・準とまで一戦……。しかも真剣^{ガチ}で交えていたのは少しばかり驚いた。

「と言うか、『獄天使』も地下闘技場の闘士だったんだなんてなア……。ひよつとしたら、他の有名な冒険者とかも地下闘技場の闘士だったりするのかなぁ……。？」

なんて呟きつつ、そう言えばもうすぐ『怪物祭』だな。と言う事を思い出す。

―ベル君を誘うなら今がチャンスじゃないかな？

ならば、善は急げだ。ヘステイアは思い切つて、口を開いた。

「ねえ、ベル君」

「何でしようか？」

改まって自分の名前を呼ぶヘステイアにベルはキョトンとする。

そんなベルを見ながら、ヘステイアはこう切り出した。

「今度の『怪物祭』でき、デートしようぜ！」

続くツツ!!!

Round20 『いざ、怪物祭!』

―怪物祭当日・・・。

―ズチャリ、ズチャリ・・・。

荒野を、男が歩いていった。

黒い拳法着に身を包んだ、ライオンの鬣のような赤い怒髪(こげ)の男である。

ハンマ・勇次郎その人であった。

ふと、勇次郎は風に乗って飛んできたチラシを掴んだ。『怪物祭』のチラシだ。

「ほう、もうそんな時期か。サプライズにはうってつけだぜ」
それを見て、勇次郎はニヤリと鬼のような笑みで笑った。
たまらぬ笑みであった。

「どれほど強くなっているか、楽しみだなア・・・ベル。不肖(ふせう)の息子よ」
たまらぬ笑みでそう呟くと、勇次郎は荒野を歩いていった。

―メインストリートのとある喫茶店。

おしやれな店である。

美味しい珈琲と、ケーキが出る店である。

そのこのテラスの一角で、二柱の神と、2人の男がいた。

ロキとフレイヤ、そしてオロチ・独歩とマツオ・象山である。

おしやれな店に場違いな、殺伐とした空気であった。

「しっかし奇遇やなあ、こないな所でバツタリ会うなんてなあ」
飄々とした様子でロキは言う。

対するフレイヤは微笑みを浮かべながらそうね。と返す。

「本当に奇遇よね」

「それに、護衛つけてるのは『猛者(もうじゃ)』オツタルやないんやな。どう言う風の吹き回しなんや?」

「ええ、それはね・・・」

フレイヤがいいかけ、ゴホンゴホン。と咳払いをして遮ったのはマツオ・象山であった。

「フレイヤよう、そこはおいらに言わせてくれねえかね」
「いいわよ」

象山の提案に、微笑みながら承諾するフレイヤ。あんがとよ。と象山は太い笑みで礼を言った後、太い声でロキと独歩にこう言い放った。

「現役復帰したぜ」

「ほう」

その言葉に、ロキは何も言わず眼を見開き、独歩はピクリと眉を動かした。

「フレイヤと一緒に、ある男の活躍を見ちまってねえ。二人揃ってその男に夢中になっちまったのさ」

象山は太い笑みを一層深くして続ける。

たまらぬ笑みであった。

「その男？誰や、ソイツ」

眉を潜めながらロキは象山に聞き返す。まあ、彼の口ぶりからするに察しはついているのだが。そんな問いに、フレイヤが代わりに答える。

「そうね、とても凄い魂をした子と言うべきかしら。『あの人』^{オーガ}とは別の輝きを持った魂よ。

表面は無垢で真っ白なのに、その奥底には戦いを欲する餓えた狼のような輝き……。嗚呼、今思い出しただけでも疼くわあ……。」

うっとりとした表情で語るフレイヤは、頬を赤く染め熱の籠った吐息を吐いた。

それはまるで恋する乙女のようなのである。そんなフレイヤを見て、ロキはこう思った。

—あ、ベルたんやコレ……。

フレイヤに目を付けられる。……即ち、試練やらなんやらで酷い目に合わされる事になるのである。ヘタをすれば命を落とす……。なんて事もありうるのだ。

まあ、ベルならば大丈夫やろ。多分、きつと、メイビー。そう、ロキが考えていると、象山が口を開いた。

「ソイツに会いたいんだよ。会って、やりあいたいのさ。だから現役復帰したって知らしめるために、フレイヤの護衛を買って出たって訳よ」

「そうかい。ふふん、うれしいねえ」

そんなたまらぬ笑みの象山に独歩は笑みを浮かべる。

こちらもたまらぬ笑みであった。

「現役復帰ってえと、またおめえさんとやりあえるって事だよなア。マっちゃんよう」

「そう言う事になるねえ、ドツポちゃん」

たまらぬ笑みのまま、両者は言葉をかわす。

ぐにやり。と互いの殺気で空間が歪んでいるようであった。

「まだ、あの時の決着がついてねえからなア。」

それによウ、オメエには目ン玉一つ取られてんだぜイ。このまま引き下がれっかよ」

「あん時はオイラも、肋骨2、3本逝っちまったからな。おあいこだろ？」

何気ない、他愛のない会話。

それなのに、何故か空間の歪みがより一層深くなっていく。

「やるのかツツ!!?今、ここでツツ!!?」

そんな光景を見て、喫茶店の中にいる客や店員達は同時にそう思った。

オロチ・独歩、マツオ・象山。『龍虎』と呼ばれていた二人。

この二人が、今ここで始めたらどうなってしまうのか？

何が起きるのか？

そもそも、この店無事で済むのか!?

怖い。

だけれど、見てみたい。

客や店員達はそう思っていた。

「ここで会ったのも何かの縁だからよ、ちよっくらやるかい？復帰後の運動には丁度いいだろ？」

「いいね。で、何処でやるんでエ？店の表か？それとも、近くの公園か

「？」

「決まってるんだろ？・・・今だよ」

そう言ったと、同時に独歩が動いた。そして、右の正拳突きを象山の顔面に向けて放つツツ！

(さあ、この拳——どう捌く、マツオ・象山ツツ!!!)

真つ直ぐな正拳突き、それがまつすぐに象山の顔面へと向かっていく。

対する象山は、動かない。このまま直撃か？そう思った次の瞬間、

(空を切った!? タイミングは完璧なはずだったのに!?)

それは、象山の顔面に入る事はなく、空を切った。次の瞬間、目の前に象山の太い顔が迫る。

(顔、近エツツ!!)

—マズイ！反撃が来るツツ！間合いを—

そう思い、間合いを取ろうと後ろに下がる。だが、象山との間合いは一向に離れない。

(ダメだツツ！逃げ切れねエツツ！完全に射程内ツツ！)

反撃が来る。右足の前蹴りだ。

狙いは独歩の水月。

(どうやって回避すツツ！右か!?左かツツ!?)

否ツツ！どっちに動いても当たつちまうツツ！

独歩が取った行動は両腕で水月を守る事であった。

「ちよいさ」

—どいっ！—

「ぐぬうツツ!!!」

—お、重てエツツ!?

ガードした両腕越しに、象山の蹴りの衝撃が伝わる。

真つ直ぐな重い蹴りだ。受けていなければよくて内臓破裂、悪くて腹部貫通は免れぬ一撃だ。

それを独歩は歯を食いしばって耐える。

(もう一度こんなのが来たら流石に耐えられんツツ！一旦右に行かねば・・・)

サイドステップで、右へと向かう独歩。それと同時に、象山もまた独歩と同じ向きに行く。

(ほぼ同時にツツ!!?ここは足に一撃を・・・)

凄まじいほどの反応速度に驚きつつも、左のローで象山の足を狙う。

だがツツ!

(このヤロウ・・・、跳びやがったツツ!だが、空中ならチャンスだツツ!)

いかなる格闘家であろうとも、着地までは無防備。

そう判断し、米神目掛けて独歩の右足が跳ね上がった。

だが、それを察知したのか象山は腕で頭を守るように防御の構えを取る。

「ツツ!!」

攻撃は無理だと判断した独歩は、象山が着地する前に距離を取った。

時間にしてみれば、十数秒も満たない攻防。喫茶店の客や店員全員が独歩と象山に注目していた。

(す、すげエツツ!!!)

(これが、オロチ・独歩!)

(これが、マツオ・象山ツツ!!!)

(なんと言う・・・怪物ツツ!!!)

目の前の怪物達の攻防を見て、皆口には出さずとも胸中で同じ事を呟いていた。

にらみ合う事数秒、先に口を開いたのは象山だった。

「ヒデエな、ドツポちゃん。復帰したばかりのオイラに不意打ちかよ」

「おいおい、忘れたかいマっちゃん。俺達は武道家だぜエ?」

武道家つてのは日常常時臨戦態勢。立会いにヒキョウもラツキヨもあるかよ」

ニヤリと笑いながら独歩は象山にそう言った。それもそうだな。と象山もまた笑った。

お互いに笑いながらも、その殺気は消えていない。

それどころかさらに膨れ上がっている。

「まだやるだろう?」

「応」

笑いながら、お互い言葉を交わす。

そして、同時に動いた。その時だ。

「ストップや、二人とも!」

「そこまでよ」

ロキと、フレイヤによる仲裁が入った。

何故止める!?と言いたげな独歩と象山にフレイヤがこう言った。

「貴方達が、本気でやりあつたらこの店が壊れちゃうわ」

「それにホレ、周りを見てみい」

フレイヤに続き、ロキがため息をつきながら独歩たちに言う。

言われるがまま、周りを見てみるとテーブルやイスが砕けており、おしやれだった時とは打って変わりメチャクチャであった。

そんな様相を見て、「あちゃー・・・」と呟く二人。

さつきまで膨れ上がっていた殺気は何処かへと霧散している。

「参つたなあ、コリヤ」

「やっぱ、マツちゃん言うように表か公園ですりやよかった・・・」

「ハア・・・弁償代幾らになんねんやろ・・・」

ポリポリと頭をかきながらそんな事をのたまう男二人に、ロキは深くため息をつく。ふと、フレイヤを見やると外のほうを見ていた。

「フレイヤ?」

そんな彼女を訝しみつつ、問いかけるロキ。すると、フレイヤは黒いローブをかけ直しながら立ち上がった。

「ごめんなさい、急用ができたわ」

「は?ちよ、待ちイ!?弁償代どうすんねん!?!」

「肩代わりよろしくね、後で払うから。それじゃあ行くわよ象山」

眼を白黒させるロキにそう答え、象山に声をかける。おう。と二つ返事で返し、店を出るフレイヤと象山。

「ちよ、待てやコリアアアアアアアアアアツツ!!!」

そんなフレイヤにロキは怒声をあげる。その傍らで・・・、

「まあた、フィンにドヤされちまうなア・・・」
ため息混じりに独歩はそう呟いたのであった。

—オラリオのメインストリート
メインストリートは大賑わいであった。

じゃが丸くん、焼きそば、わたあめ・・・様々な屋台が立ち並び、人々はそれを買って食べている。

その中にはベルとヘステイアの姿もあった。

怪物祭、オラリオで開催される一大イベントである。今日、彼らはその怪物祭に来ていたのであった。

「ベルくん、次あれ食べようよ！」

眼を輝かせ、ベルの腕を引つ張りながらヘステイアは『リンゴ飴』と書かれたお店を指差す。その無邪気さは、歳相応の美少女のそれである。

「いいですねえ。・・・ってそんな焦らなくてもリンゴ飴は逃げませんよ」

ぐいぐいと引つ張るヘステイアに苦笑しながらベルは言う。周りから見れば、兄妹のように見えて凄く微笑ましい光景である。

「だって早く食べたいんだもん。・・・あれ？」

ベルの言葉にそう返し、ふと何かに気づいた。私服に身を包んだオロチ・克己とアイズ・O・ヴァレンシユタインであった。キョロキョロと辺りを身回し、誰かを探しているように見えた。

「ん？どうしました、神様？・・・って、克己さんにアイズさん？」

ヘステイアの視線を追い、克己とアイズに気づくベル。

「お？ベル君にヘステイア様かい？奇遇だなあ！ひよつとしてデートか？」

「こんにちは、ベルに神ヘステイア」

克己とアイズもベル達に気づき、声をかける。

「んく・・・まあ、そんな感じですかね？」

「感じ、じゃなくてそうなんだよ！羨ましいだろオ、ふふくん」

「ちよ!?!神様!!!」

照れくさそうに克己に返すベルに、ドヤ顔で腕に抱きつくヘステイア。豊満な胸がベルの腕に当たる。

そんなベルとヘステイアに、克己は苦笑し、アイズは首をかしげる。「そ、そう言えばキョロキョロと誰かを探していたみたいでしたけど、どうかしたんですか?」

「ん? ああ、ちとアーニヤちゃんトリユーにシルちゃんにコレを届けてくれて頼まれてな」

ベルの問いに、克己は財布を取り出しながら答える。

「怪物祭行く時に忘れたらしくてな。アーニヤちゃんもリユーも店の準備で忙しいから、代わりに俺達が届けに行く事になったって訳」

「成る程……。それなら僕達も手伝いましょうか?」

「ちよ、ベル君!?!」

理由を聞き、手伝いを買って出るベル。そんなベルにヘステイアは抗議の声を上げる。

「いつも、シルさんにはお世話になってますから。それに、大勢で探したほうがシルさんを見つけやすいですしね」

そんなヘステイアにベルは諭すように言った。

ヘステイアはうぬぬぬ……。と唸ると、観念したように言う。

「しょうがない、引き受けてやろうじゃないか。ただし、今回だけだぞ」

「悪いな、助かるよ二人とも」

そんな訳で、シルを探す事にしたのであった。

「……」

その物影で怪しい影がベル達を見ている事も知らずに……。
続くツツ!!

Round 21 「暗躍する女神と雷神」

「そう言えば、克己さん」

やおら、ベルが克己に問いかけた。

「何だい？」

「シルさんが怪物祭のイベントで何処を見に行きたかったのか、アーニャさんとかから聞いてませんか？」

「そう言えば、アテナファミリア所属のアイドルチームが行うライブを楽しみにしていたって聞いたな」

「へえ、彼女そういうの好きなんだね。会場は何処なんだい？」

最後の問いかけはヘステイアだ。ええ、と克己は頷いた。

「オラリオドームのところですよ。そこで行うメインイベントの前座でライブを行うみたいですね」

「成る程ね、兎に角そこに行ってみようか、ベル君」

「そうですね、行きましょう」

そういうことでオラリオドームに行く事になった。

——一方その頃……。

オラリオドームの地下、捕えられたモンスターを管理している大部屋へと続く通路を3人の男が歩いていった。

一人はセキバヤシ・準。その傍らを歩く二人の男が居た。

どちらも、全身に無駄がなくナチュラルな筋肉に覆われているがっしりとした男である。

「カジワラにナガタよう、お前さん達は怪物祭で巡業やんのは始めてかい？」

「初めてツスね」

「俺もカジワラと同じツス」

準の言葉に、二人の男……カジワラとナガタはそう答えた。

カジワラ・年男とナガタ・弘。ガネーシャ・ファミリア所属であり、二人ともレスラーとしても冒険者としても油の乗り始めた時期である。

そんな中、主神であるガネーシャから、「今度の怪物祭で、リングに上がってみないか？」と誘いを受けたのだ。勿論、二つ返事で返したのだが、今になって緊張しているようだ。表情が強張っていた。

そんな二人に、準はガハハと笑いながら言う。

「怪物祭はビッグイベントだが、リングはいつもの巡業と同じだ。お前達はいつもどおりにしてりゃいい」

暫く歩くと、モンスターを管理している大部屋の扉にたどり着いた。中にいるであろう構成員と、打ち合わせをしようと、扉を明けたその時だ。

「ンだア・・・こりゃあ？」

目の前の光景に、準は驚愕した。同じファミリアの構成員が、何処もかしこも糸の切れた人形のように、へたり込んでいたからだ。

カジワラとナガタは、何がなんだか分からないように顔を見合わせている。

「おいーどうしたツツ!?何があった!」

へたり込んでいる構成員の肩を掴み、揺さぶる準。だが、構成員は無言。

「安心なさい、ちよつと魅了で骨抜きにしただけよ」

その時、その構成員の後ろから声がした。声音からして女の声だ。準は視線を声のした方に向ける。

そこにはローブを纏った人物がいた。フードを被っており、顔は分からない。

だが、その人物から漂う、圧倒的な気配からその人物が只者でない事が分かっていた。

「なんだア、テメエ・・・?」

準の問いに答えるように、その人物は被っていたフードを外す。

露になるその素顔を観て、3人は息を呑んだ。何故ならば、オラリオに住まう冒険者ならば知らない者はいない『神』であったからだ。そう、

「ツツ・・・神、フレイヤ!」

フレイヤ・ファミリアの主神、フレイヤだったからだ。何故、彼女

がここに!?!?そう思う、3人の心情を悟ってか、フレイヤが口を開く。「何故、私がここにいいのか?」って思っているわね。答えは簡単よ、このモンスターが欲しいの」

「・・・神様よう、自分が何言ってるのかワカってるのかい?」

「ええ、勿論よ」

妖しげな笑みを浮かべたまま、フレイヤは準に答えた。

見た異性を骨抜きにしてしまうような魔性の笑みだ。

「怪物祭をブチ壊しにしてまで、何をしようってんですか?」

「そうね、ある男の子の『魂』の輝きを見たい。それだけかしら?それに・・・」

「つぎけんじやねエッツ!!!そんな事の為に、ガネーシャ様の顔に泥塗ろうってのか!?!?神様だろうと、やって良い事と悪い事があんだろツツ!!!」

「よせ、カジワラッ!」

フレイヤの勝手な物言いに、キレたカジワラがナガタの制止も聞かず食って掛かる。だが、フレイヤは動じずに、

「おすわり」

「カ、カジワラアツツ!!!」

そう言って、カジワラの額を人差し指でコツンと叩いた。すると、鬼気迫る表情だったカジワラが一気に気の抜けた表情となり、糸が切れたような人形のように座り込んでしまった。

そんなカジワラを一瞥し、フレイヤは少し拗ねたような表情で言った。

「全く、人の話は最後まで聞きなさいって教わらなかつたかしら?」

それに、祭りをオシヤカにしないし、ガネーシャの顔に泥を塗るつもりもないわ。そうならないように協力者もいるんだし・・・」

「協力者?」

準が問いかける。その時、

「俺のことだよ」

背後から声が聞こえ振り返る。そこには、顎の長い金髪の男がいた。トール・ファミリアの主神、トールである。

「どういふつもりですかい？」

「そのまんまの意味さ、俺もフレイヤの言うボウヤが気になってな。俺もそれに一枚かませてもらったって訳さ」

準の問いに、トールは笑みを浮かべたまま答えた。警戒をしている準たちを観ながらトールは安心しろよ。と言つて続ける。

「ガネーシヤの奴にも話は通してある。祭りに支障が無く客に迷惑がからなきゃOKだそうだ。……終始いい顔はしなかったがね」

「ね？だから言ったでしょう？」

ウフフ。とイタズラっぽい笑みを浮かべてフレイヤは準に言った。

「とは言つても、そいつがこのオラリオドームに来るつて確証はあるんですか？」

「勿論あるぜ、ウチの眷属がソイツを見かけた。なんでも、忘れ物を届けにこちらに来るそうだ」

準の問いにトールはそう答えると、社長。と声をかける男が。トール・ファミリアの眷属のプロレスラーである。

「おう、どうした？」

「例の男・・・ベル・クラネルが、オラリオドームに来ました」

「そうかい、丁寧におもてなししてやんな」

トールがそう男に指示すると、男は一礼し立ち去つた。

その会話を聞き、準は合点がいったような顔をしてトールに言った。

「成る程なあ・・・道理で、フレイヤ様の悪巧みに手を貸す訳だ」

「ああ、そう言う事だ。俺もじかに見てみてエのさ、ベル・クラネルの魂の輝きつてヤツをよ」

トールはそう答え、準の方を向くと深い笑みを浮かべながら続けた。

「何かあつた時は責任は俺が取る。だからよ、手を貸してもらうぜ」
その笑みはたまらぬ笑みであつた。

続 く ツ ツ ！ ！ ！

Round 2 「アテナ・ファミリアの若き龍」

―オラリオ・ドーム内部。

「すいません、皆さん態々届けてもらって」

「いえいえ、それほどでも。礼ならアーニャとリユーに言っつてよ」

アテナ・ファミリア所属のアイドルが、歌っている最中。申し訳なさそうに頭を下げるシルに、克巳は笑顔で返した。

オラリオ・ドームの手前で、サイフを探していたであろうオロオロしていたシルを発見し、サイフを渡したのである。

折角だからと、皆でオラリオ・ドーム内に入りライブやメインイベントを楽しまないか？とシルが提案し、ベル達は二つ返事で答えたのである。

そんなこんなで現在に至る。

「しかし、大賑わいだよねえ。前座とは思えない程の盛況っぷりだよ」

そうぼやき、振り向くヘスティアの視線の先には、ドーム内を埋め尽くすほどの人が溢れていた。ちなみに、ベル達がいる席は、最前列。間近でライブが見れる席であった。

「ええ、アテナファミリアのアイドル達はオラリオでも外の世界でも大人気ですからね。」

恥ずかしい話ですけど、私もアイドルを目指してアテナファミリアの門をたたいた事があったんです」

結局は、オーデイションで落ちちゃいましたけど。と苦笑いしながらシルが言った。へえ。とベルが感嘆の声を漏らす。

「つて事は、歌とかダンスとかも得意だったりしますか？」

「え!? ええ、まあ・・・」

ベルの言葉に、若干あわあわとなりながらシルは頷いた。

「僕、見てみたいなあ。シルさんのダン・・・」「ベルくうん・・・」へ？」

遮るように、唸るようなヘスティアの声を聞き、振り向くベル。

そこには鬼がいた。

ヘステイアである。にこやかではあるのだが、その背後に立ち上る神威が鬼の形を取っていた。

そして、瞬時に悟る。

— やつベエ、地雷踏んだツツ！

・・・と。

そう思った、ベルの行動は早かった。

「すいませんッツ!!」

即座に謝った。

『女性を怒らせた時は、自分が悪くなくても謝れ』

今は故郷にいる、祖父の受け売りであった。

その様子を見ていたオロチ・克己は、後にこう語る。

「何と言うか、お袋に怒られた時の親父を見ているようだった」と。

「おや？神ヘステイアやないですか」

「ん？」

不意に、関西なまりの声がかかり振り向く。

そこにいたのはメガネをかけた角刈りの男であった。

異様に太い男である。

纏っているビジネススーツごしでも分かる太さである。

その男を見るや、ヘステイアは懐かしそうに言った。

「静龍君かい？」

「静龍しずるのうて、静龍ジンロンです」

ヘステイアの言葉に、静龍と言われた角刈りの男は困った顔でツツ

コミを入れた。

「あはは、懐かしいね。このやり取り」

「からかわんでくださいよ。」

静龍しずるって呼び方、女の子みたいで恥ずかしいから堪忍してください

言うたやないですか」

ゴメンゴメンと、笑いながら謝るヘステイアに静龍は全くもう・・・

と顔をしかめた。

そして、ベルを見やり挨拶をする。

「お久しぶりです、チャンピオン。噂はかねがね耳にしとりますよ。」

何でも、神へステイアとファミリアを立ち上げたって」

「ははは、とは言っても団員は僕一人だけですけどね」

「何だ知ってたのか、サプライズしたかったんだけどな」

静龍の言葉に、ベルは苦笑いしながら返した。

へステイアの方は、出鼻を挫かれたようで少々不貞腐れた感じでしょう。う呟く。

「そちらのお二人はお初にお眼にかかります。

『アテナ・ファミリア』所属の椎^{シイ} 静龍^{シロン}と言います」

克己とアイズを見ながらそう言っ、お辞儀をする静龍。

90度の綺麗なお辞儀である。

ん。とアイズもペコリと頭を下げる。

「椎 静龍・・・？その名前どこかで・・・あっ！」

克己が何か聞き覚えがあったのか、考え込み・・・、はっとした表情で声をあげた。

「もしかして貴方、『大陸の静なる龍』こと椎海王ですか？」

「よくご存知ですね。確かに海王の称号を得てましたけど、それは昔の事。今は座を退いています」

今はただのマネージャー兼プロデューサーですわ。と微笑みながら克己に答える。

「そうですか、にしては結構鍛えてますよね。スーツ越しでもワカリますよ」

「海王の座は退いても冒険者稼業は辞めてませんかからねえ。

・・・と言っても、プロデューサーの仕事が忙しくて冒険者の方は副業みたいになつとりますよ」

「副業って言っても結構強いじゃないですか、静龍さんは」

気恥ずかしそうに頭を掻きながら克己に言う静龍。

終始和やかな様子でライブを見ながら談話に花を咲かせるベル達。

「二皆、ありがとオーーーーーッツ!!」

「さいっこオーーーーーッツ!!」

「いい歌だったよーーーーッ!」

「感動したッツ!!」

ステージで歌っていた3人組のアイドルの歌が終わり、周りからやんやんやと声援が送られる。

その声援に応えるかのように、アイドル達は手を振って笑顔を浮かべていた。

「アテナの奴もだけどアテナの眷属達も結構な人気だねえ」

「ええ。・・・ですが」

ヘステイアの言葉に静龍は頷きながら、少し表情を曇らせた。その時である！

「歌い終わったんだから手を振ってないでさっさと消えろオ！俺は、アテナさんのライブを見に来たんだよ!!」

ヘステイア達の背後で大声で怒鳴る声が。振り向くと、小太りの典型的なオタクの格好をした男が鼻息を荒くした状態で立っていた。

それを見て静龍は、はあ・・・と嘆息する。

「こう言う迷惑な輩がおるんですわ」

「そうなんだ・・・」

「おい！何て事を言うんだ、文句を言うんだつたらつまみ出すぞ！」

観客の一人が、立ち上がりオタクの男をつまみ出そうと手を出した、その時だ。

「うっせえんだよ！シッ！」

ーパァン！

「ぐうっ・・・」

男のジャブが観客の顔面を捉えた。うめき声をあげながら、後ずさる観客。

ーゴッ！

その瞬間に、右のフックが観客の顎を捉え、意識を吹っ飛ばした。そのまま前のめりに倒れ動かなくなる。

「きやあああああああああ！」

「アレ、ヤバイ倒れ方じゃんツツ！」

どよめく会場。悲鳴と、動揺の声がこだまする。

「へっ、弱いくせに粹がるからだ！」

倒れた観客を見下ろしながら、男は吐き捨てる。

「おい」

「あ？」

—ゴツ！

男の背後から声が聞こえ、振り向いた刹那、男の顔面に膝がめり込んだ。綺麗でまっすぐな飛び膝蹴りである。

ぺんっ!?!とマヌケな声を上げながら男は吹っ飛び、倒れる。

幸い、男が吹っ飛ぶ直前観客達は避難した為、巻き添えはゼロであつた。

「ここは暴れる場所ぢやうねん、これ以上暴れるんならお引取り願いましよか」

立ち上がりながら、関西弁で男に言うのはジージャンに、ジーンズパンツと言つたいでたちの少年であつた。

小柄な少年である。歳は、ベルよりもちよつと上であろうか？小柄で細身ながらも、しっかりと鍛え込まれているのが分かつた。

「拳坊だツツ!!!」

「アテナ・ファミリアの有力ルーキー、『シイ椎ケンスウ拳崇』が来てくれたぞツツ!!!」

「拳坊、この迷惑野郎をぶっ潰してくれ!」

—ケンボウ!ケンボウ!ケンボウ!

「凄い声援だねえ……。もしかして彼つて」

「ええ、私の倅です」

拳坊コールを聞きながら、問いかけるヘスティアに頷きながら静龍は答えた。

「糞……。このガキが、よくもやりやがつたな」

その一方、むくりと起き上がりながら男は拳崇を睨む。

そんな男の眼光を拳崇は、平然と……。なおかつ不敵な笑みを浮かべながら受け流している。

「その様子やと、まだ反省しとらんみたいやな。しゃあない、かかつて来きいや」

そう言つて、すつと腰を落とし中国拳法、心意拳のような構えを取つた。

クイツクイと右手の人差し指をうごかし、挑発する。それを見た、男は怒りで顔を真っ赤にして叫んだ。

「この俺を怒らせたらどうなるか、思い知らせてやる!!!」

叫びながら、拳崇に向かって突撃。そのまま、我武者羅に拳を振るった。

右ジャブ。

左フック。

右アツパー。

男は、ボクシングでも齧ってるのだろうか？その小太りな体格には似合わない、素早い動きでそれを振るう。

だが、それは悉く拳崇には当たらない。

—つるつ。

「おっ、あらあ?」

突如、拳崇の足がすべり仰向けに倒れようとする。

その隙を逃す男ではない。

「バカが、すっ転びやがって死ねえッ!!!」

体勢の崩れた拳崇に向かって、男のストレートが迫る。

タイミングも距離もピッタリであり、さしずめ拳崇の顔面に直撃か？と思われた次の瞬間である。

—ゴッ!

「あげっ」

男の顎に衝撃が走る。

顎、衝撃、何故?、不意打ち?

突然の事に男は困惑する。

対する観客やベル達は見ていた。

拳崇が体勢を崩したと思った次の瞬間即座に逆立ちしたのを。

そして、そのまま腕のばねを利用して飛び上がり男の顎に蹴りを食らわせたのである。

「すっげェ・・・」

ベルは、思わずそう呟いた。

権 拳崇。何と言う男であろうか。

彼と戦ってみたい、ベルは思わず笑みを浮かべながらそう思った。
たまたぬ笑みであった。

続
く
ツ
ツ
！
！
！
！

Round 23 「雷神」

「糞があっ!!」

男が叫びながら、拳崇に向かって拳を繰り出す。

右拳。

左拳。

右拳。

左拳。

右拳。

左拳。

右拳。

左拳。

だがことごとく、かわされ、いなされてしまう。

「よっと」

「がっ!?!」

そればかりか、腕を取られ地面に叩きつけられてしまった。その衝撃で意識がほんの一瞬飛ぶ。

ーどすん。

「げえっ!?!」

腹部に重たい衝撃が走った。叩きつけられた衝撃で飛んでいた意識が戻る。

見やると上に拳崇が乗っていた。マウントである。

「ギブアップ?」

「ぬがあっ!」

不意に拳崇が、男に問いかける。だが、男は問いかけに答えず、暴れマウントから脱出しようとした。

だが、

「え?」

振り解こうとも、マウントから脱することは出来なかった。

ー嘘・・・だろ・・・?

自分よりも軽そうな相手であるはずなのに、マウントから抜け出す

事が出来ない。その事実にも、男は驚愕した。

大木だ。

大木のようにであった。

地面にしっかりと根を張った大木のように、男の体から離れない。

ーぶおん。

拳崇が拳を振りかぶり思いっきり顔面目掛けて振り下ろした。

ごすっ！と肉がぶつかると音がする。

カリカリ。と口の中で折れた歯が鳴っている。

「があああっ!!」

それでもなお、男は振り解こうともがく。

「おわっ!!」

火事場のバカ力だろうか、大きくもがいた為に拳崇がバランスを崩した。

それを見逃さず、マウントから脱出する。

そして、互いの距離が離れた。

「しゃああっ」

先に男が動く。今までやってきた分たっぷり仕返ししてやる！

拳を振り上げ、拳崇へと迫る。

対する拳崇も動こうとしているが、男の方が早い！

拳が振り下ろされる。

ーゴツ！

鈍い音が鳴った。

打撃が肉を打つ音であった。

「お・・・が・・・?」

男がうめき声をあげている。

うめき声をあげて地にはいつくばっていた。

対する拳崇は、平然と男を見下ろしている。

「え?!え、どうなってるの?」

様子を覗いていたヘステイアが困惑気味に声をあげる。

当然である。

タイミング、距離共に男の攻撃が当たるはずであった。

なのに何故、男が地面にはいつくばっているのか？

隣にいたベルがヘスティアの疑問を解消するように、答えた。

「当たる直前に、体を捻ったんですよ。」

拳が当たる直前に、体を捻る事で威力が分散されますからね」

「それで、返す刀で蹴りを叩き込んだって訳だ」

ベルの説明を引き継ぐ形で、克己がそう言った。

「しかし、あの距離・・・あのタイミングで威力を直撃を回避しただけじゃなく、カウンターまで入れるなんて凄いですね・・・彼」

ベルは、そう言つて拳崇を見やる。

―彼と闘いたい。

そう、自分の中の狼が唸っているのを感じていた。

「さて、もう動けへんやろ？」

這い蹲る男を身下ろし拳崇は言った。

男はブツブツと呟きながら、はいつくばっている。

「・・・る・・・」

「?何て言うた？」

聞き取りづらい男の言葉に、眉を潜めながら拳崇が近づいていく。

その時だった。

「ぶっ殺してやるーーーッッ!!」

「オワッ!」

金切り声に近い絶叫と共に、男が何かを振るった。キラリ。と手に握られたそれが光る。

当たると拙いと悟った拳崇はバックステップで回避。

それと同時に拳崇が着ているシャツの腹部分がパツクリと割れる。

幸い、体は切られてはいないようである。

男はナイフを持っていた。

「アイツ、ナイフを持ってやがる!」

「・・・止めなきや」

これは拙いと感じた、克己とアイズが男を止めようと駆けつけようとする。

「待ってください、その必要はありませんよ」

が、それをとめたのはベルであった。

何故？と怪訝な表情になる克己とアイズだったが・・・、
「いけないア、こんな所でそんなのを振り回していちゃ」
声がした。

別段叫んでいる。と言うわけでもない。

だが、会場全体に響いている感覚があった。

声のした方に、克己とアイズのみならず、観客達が一斉に振り向く。
その方向にたっていたのは男であった。

背に『雷神』と大きくかかれたガウンを羽織った男が立っていた。
美しい金髪をオールバックにした、大きく尖った顎の男である。

その男を見て、ギャラリーが一斉にざわめきだした。

「トール様だツツ!!」

『トール・ファミリア』のトール様が出たぞツツ!!!」

そう、この男こそ、『トール・ファミリア』の主神であり、ファミリアの運営するプロレス団体『アズガルド・プロレス』の社長であるトールであった。

「な、何だ・・・ツツ!」

男もややあつて、振り向くもトールを観た瞬間。雷に打たれたかのように硬直し動けなくなった。

「それを渡しなさい」

「ツツ!」

にこやかに、親しい親友に話しかけるような気さくさでトールは口を開いた。

ビクツと、男は肩を震わせて怯えたようにトールを見る。

「あ・・・あ・・・」

震えている。

先ほどまでの威勢は何処へやら、男はガクガクと震えていた。

それはまるで蛇に睨まれた蛙のようである。

その原因は、トールの放つ神威であった。

それにより、男を威圧しているのである。

(なんつー神威や、気を抜けば観てるこっちもブルってまうで)

拳崇もまた、直接的ではないがトールの神威を受け冷汗を流していた。

まるで、トールが見上げるほどに大きくなったかのような感覚。それが拳崇を襲っていた。

直接トールの神威を受けている男は、その比ではないほどの感覚に陥っているようである。

男のズボンの股間当りがぬれていた。

小便だ。

小便を漏らしていたのである。

「いい子だからそれを渡すんだ」

再度、トールは手を差し伸べながらにこやかに男に言った。

男の目には、にこやかな笑顔が今にも鬼のような形相になっていくように見えた。

この男には勝てない。

男は本能的に即座に悟った。

「は、はいッッ!!」

次の瞬間には、男は跪きナイフを差し出した。

土下座であった。

土下座とは全面的に己の非を認め、100%の降伏を相手に示す行為である。

「いい子だ」

そう言って、トールは男からナイフを奪い取り顎で、連れてけと言いたげにしゃくった。

それに応じるように屈強な男が二人現れ、男を連れて立ち去った。

「見せ場とっちゃって悪いなアテナのよこのボウヤ。アイツがこれ以上暴れられたらたまったモンじゃなくてね」

拳崇のほうを見やりながらイタズラっぽく笑い、謝罪する。

ええですよ。と拳崇はトールに返した。

「流石に刃物持った相手は骨が折れますから、助かりましたわ。

しかし、何故トールの社長さんがこちらに？あんさんらのステージはアテナのライブが終わってからやありまへんでしたっけ？」

「ああ、ちよいと告知をしにな。

アテナのライブ前にサプライズでステージに出ようと思ったら、あの野郎がしゃしゃり出てきて今にいたるって訳よ」

「告知？」

首をかしげる拳崇。

「まあ、折角だからこの場で言わせて貰うか」

そう言っつて、マイクを何処からともなく取り出すと、観客を見渡すように観ながら語りかけた。

『えー、皆さん。唐突ですが、メインイベントであるモンスターのティム&プロレスショーは都合により、急遽中止となりました』

—ざわ．．．ざわ．．．。

唐突であつた。

唐突に、告げられた怪物祭の目玉でもあるメインイベントが中止となり、困惑する観客一同。

ですがツツ！と、そんなざわめきに意も介さず、ツールは続ける。『それと負けず劣らずの、とびっきりのイベントを用意しておりますツツ！！』

その名も．．．「地下闘技場チャンピオンVSモンスターのガチンコ勝負」ツツ！！』

「チャ．．．チャンピオンだつてツツ！！」

「オラリオの都市伝説じゃなかったんだな」

「あのチャンピオンがここに来るのかよツツ！！？」

「こりやあ、女房を質に入れても見てみてえや！」

「地下闘技場のチャンピオンつて．．．何だア？」

「ご存じないのですか!?!」

トールの爆弾発言にざわめく会場。

それはそうだろう、あの地下闘技場のチャンピオンが、メインイベントで出るのだから。

この発言に一層驚いたのは、観客だけではない。

「な、何だつてツツ!!!?」

ヘスティアである。

チャームポイントのツインテールを猫の尻尾のように逆立て、素っ頓狂な声を挙げていた。

克己や、アイズもまた声には出さずとも驚きの表情を浮かべていた。

「えらい事になりましたね、ベルさん」

「そうですね・・・」

静龍の言葉に、ベルは少々驚きつつもそう返した。

レベルアップして以来、何らかの視線があったのは感じていた。

何かしらのアクションをするにしても、ダンジョンなどで刺客やらモンスターを差し向けるなりそう言ったことをするのだろうかと思っ
てはいたが・・・。

「まさか、こんな手段に出るとはなあ・・・」

苦笑いをする。

怪物祭で、捕らえたモンスターは結構な強さだと聞く。

そのモンスター達と一戦交えられる。

そう考えると、

「ま、悪くないよね」

いつの間にか楽しげな笑みへと変わった。

たまらぬ笑みであった。

「ああ、いいわ。凄くいい」

その様子を、神のみが許される特等席にてフレイヤはたまらぬ瞳で見詰めていた。

それは、まるで長年恋焦がれた想い人に会った女性のようにであった。

「もつと見せて、貴方の輝きを」

うつとりとした表情で、フレイヤはベルへとそう言った。

続 く ツ ツ ！ ！ ！